
小野不由美
Ono Fuyumi
十二国記
Jūnikoku-ki
風の海 迷宮の岸
Kaze no Umi Meikyū no Kishi
講談社文庫

風の海 迷宮の岸

十二国記

小野不由美

講談社文庫

風の海 迷宮の岸

十二国記

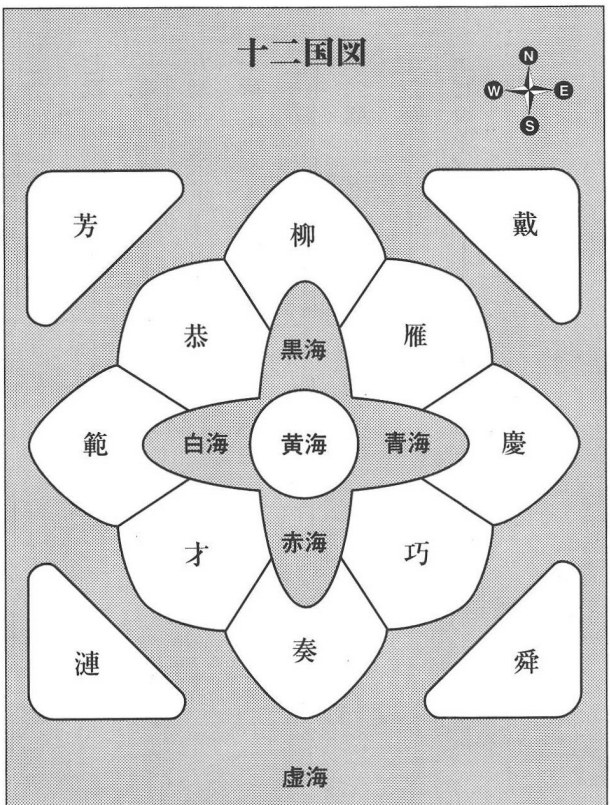
小野不由美

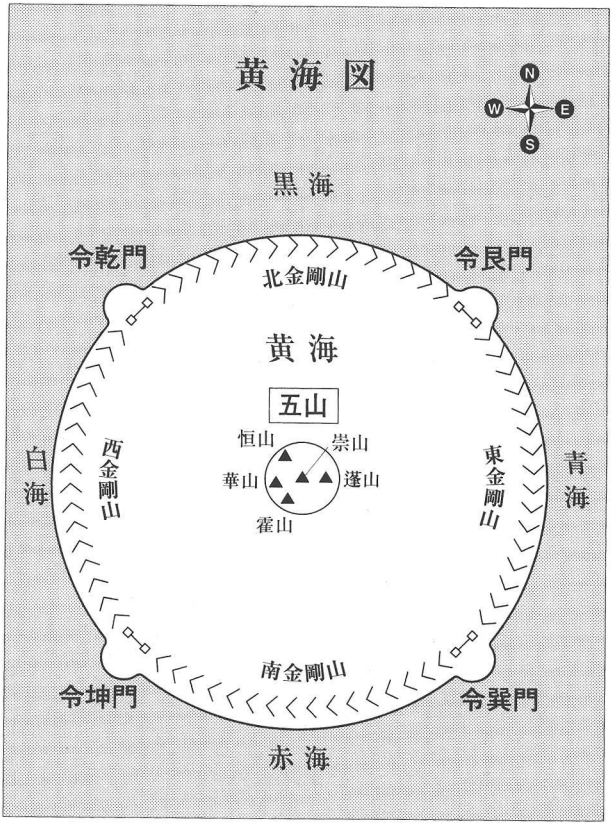
講談社

目次

プロローグ——8
一章——14
二章——37
三章——61
四章——86
五章——118
六章——150

七章 178
八章 207
九章 235
十章 262
十一章 287
十二章 309
十三章 328
エピローグ 343


十二国図
N
W
E
S
芳
柳
戴
恭
黒海
雁
範
白海
黄海
青海
慶
才
赤海
巧
漣
奏
舜
虚海


黄海図
N
W
E
S
黒海
令乾門
北金剛山
令艮門
黄海
五山
恒山
崇山
華山
蓬山
霍山
白海
西金剛山
東金剛山
青海
南金剛山
令坤門
令巽門
赤海

風の海　迷宮の岸　十二国記

プロローグ

雪が降っていた。

重い大きな雪片が沈むように降りしきっていた。

天を見上げれば空は白、そこに灰色の薄い影が無数に滲む。染みいる速度で視野を横切り、目線で追うといつの間にか白い。

彼は肩に軟着陸したひとひらを見る。綿毛のような結晶が見えるほど、大きく重い雪だった。次から次へ、肩から腕へ、そうして真っ赤になった掌に留まっては、水の色に透けて溶けていく。

雪の白よりも、彼の吐息のほうが寒々しかった。子供特有の細い首を廻らせると、動作のとおりに白く吐息が動きを見せて、それがいっそう目に寒い。

彼がそこに立ってもう一時間が過ぎた。

小さな手も剝き出しの膝も、熟れたように赤くなってすでに感覚がない。摩っても抱きこんでも冷たいばかりで、それでいつの間にかぼんやりとただ立っていた。

北の中庭だった。

狭い庭の隅には、使われなくなって久しい土蔵が建っている。土壁に入った亀裂が寒々しい。

三方を母屋と蔵に、もう一方を土塀に囲まれていたが、風のないただ寒いばかりのこの時、それらはほとんど恩恵をもたらさなかった。

庭木と呼べるほどの樹木もない。夏が近くなればシャガの花が咲いたが、今は剝き出しの地面が白く斑に染まっているだけだった。

（強情な子やね）

祖母は関西から嫁いで来た。いまも故郷の訛が消えない。

（泣くくらいやったら可愛げもあるのに）

（お義母さん。そんな、きつく言わなくても）

（あんたらが甘やかすし、意固地な子になるんやわ）

（でも）

（近頃の若いもんは子供の機嫌を取るしあかん。子供は厳しいくらいでちょうどよろし）

（でも、お義母さん、風邪を引いたら）

(子供がこれくらいの雪で風邪なんか引くわけないわ。——ええね、正直に謝るまで、おうちの中には入れへんからね)

彼はただ立ち尽くしている。

そもそもは、洗面所の床に水をこぼして拭かなかったのは誰かという、そんな些細な問題だった。

弟は彼だと言い、彼は自分ではない、と言った。

彼にはまったく身に覚えがなかったので、そう正直に言ったまでのことだ。彼は常々祖母から、嘘をつくのはもっともいけないことだと躾けられてきたので、自分が犯人だと嘘をつくことはできなかった。

(正直に言うて謝れば済むことでしょう)

祖母が厳しく言うので、彼は自分ではないと繰り返すしかなかった。

(あんたやなかったら、誰やの)

犯人を知らなかったので、知らないと答えた。そうとしか返答のしようがなかった。

(どうしてこんなに強情なんやろね)

ずっと言われ続けていることではあるし、彼は幼いなりに自分が強情なのだと納得していた。「強情」という言葉の意味を正確に知るわけではないが、自分は「強情」な子供で、だから祖母は自分を嫌いなのだと、そう了解していた。

涙が出なかったのは困惑していたからだった。

祖母は謝罪の言葉を求めているが、謝罪すれば祖母がもっとも嫌う嘘をつくことになる。どうしていいか分からなくて、彼はただ途方に暮れていた。

彼の目の前には廊下が横に延びていた。廊下の大きなガラスの向こうは茶の間の障子。半分だけガラスが入ったそこから、茶の間の中で祖母と母とが言い争いをしているのが見えた。

二人が喧嘩をするのは切ない。いつも必ず母が負けて、決まって風呂場の掃除に行く。そこでこっそり母が泣くのを知っていた。

――お母さん、また、泣くのかなあ。

そんなことを考えて、ぼんやりと立っている。

少しずつ足が痺れてきた。片足に体重を載せると、膝がきしきし痛んだ。足先は感覚がない。それでも無理に動かしてみると、冷たい鋭利な痛みが走った。膝で溶けた雪が冷たい水滴になって、脛へ流れていくのが分かった。

彼が子供なりに重い溜息をついたときだった。

ふいに首筋に風が当たった。すかすかするような冷たい風でなく、ひどく暖かい風だった。

彼はあたりを見廻した。誰かが彼を憐れんで、戸を開けてくれたのだろうと思ったから

だ。

しかしながら、見廻してみても、どの窓もぴったり閉ざされたままだった。廊下ではなく部屋に面したガラスは、さも暖かげに曇っている。

首を傾げて、もう一度あたりを見廻す。暖かな空気は今も彼のほうに流れてきていた。

彼は蔵の脇まで目をやって、それからきょとんと瞬きをした。

蔵と土塀の間のごく微かの隙間から、白いものが伸びていた。

それは人の腕に見えた。二の腕の上のほうまで素肌を剝き出しにした白いふっくりとした腕が、蔵の陰から差し出されているのだった。

腕の主の姿は見えない。おそらく蔵の陰に隠れているのだろうと、彼は思った。

ひどく不思議な気がした。

蔵と塀の間にはほんの微かの隙間しかない。狭い隙間に落ちこんだ野球ボールが取れなくて、弟が泣いたのは昨日のことだ。彼や弟の小さな身体をもってしても、その隙間には腕より他に入らなかった。見たところ大人の腕のようだが、いったいどうやってあの隙間に入っているのだろう。

腕は肘から下を泳がせるようにして動かしていた。それが手招きしているのだと悟って、彼は足を踏み出す。凍えて痺れた膝が、音がしないのが不思議なほどぎくしゃくした。

怯える気になれなかったのは、暖かい空気がその方角から流れてくるのに気づいたからだ

った。
彼は本当に寒かったし、本当にどうしていいか分からなかったので呼ばれるままに歩いた。
雪はすでに地面を覆って、彼の小さな足跡を残すほどになっている。
白かった空は墨(すみ)をぼかしたように色を変えている。
短い冬の日が暮れようとしていた。

一章

1

命がどこから来るのか知る者はいないし、ましてや人でないものならなおさらだった。
命も意識も、彼女の中に唐突に宿った。
目覚めたとき、彼女は白い枝の下にいて、頭の中にはたった一つの言葉しかなかった。
——泰麒。
身を起こす間に、その言葉は頭の中一杯に満ちて、溢れると同時に彼女はすべてのことがらを把握していた。
自分が何者であるのか、何のために存在するのか、何がもっとも重要であるのか。
——泰麒。
それは半身を起こした今も、彼女の脳裏から溢れて身内に滴り続けていた。

まるで滴っていく水を体の奥深いところで受け止めようとするように、彼女は起こした上体を反らした。顔を仰向け、目を閉じた。涙が蜂谷に向けて滑って落ち、まだ濡れている髪の中に溶け入った。

力の入らない足を動かすと、足の先に湿った土と金色のかけらが触れた。

かけらはつい先ほどまで彼女を抱いていた殻だった。土が吸った水分は、つい先ほどまで殻の中に満たされていたものだった。彼女はほんの少し前に殻の中から孵ったのだ。彼女を抱いた金の卵は枝を離れて落下し、割れた。

彼女は卵のかけらをしばらく見やって、次いで視線を上げた。目の前には白い枝。白銀でできたかのような枝は頭上に伸びて、遥か上空で堅牢な岩盤に吸い込まれている。

枝にはいくつか、金色の果実が瘤のように実っていた。それはまだ命を宿さぬ卵なのだと、自分もついさっきまで同じようにしてそこに実っていたのだと、彼女は教えられるわけでもなく思い出していた。

命とは、そのようにして誕生するものなのだ。

――泰麒。

彼女は四肢に力を込めて立ち上がった。また、涙がこぼれた。

涙は初めて外気に触れた瞳を守ろうとする反射にすぎなかったが、彼女はその熱いほど温かいものが滑り落ちていく感触を、たった一つの言葉が身内を滑り落ちていく感触だと受け

止めた。

泰麒、泰麒と呼ばわりながら、涙がこぼれる。

まっすぐに立ち上がると髪を枝に掬われた。彼女は土を踏んだ四肢とは別の二本の腕で、それを解いた。

「孵ったようだね」

ふいに声が聞こえて、彼女は音声のしたほうを見た。

あたりはほの暗い闇、頭上の枝ばかりが燐光を放って白い。

少し目が慣れると、そこが巨大な洞窟の中だと分かった。

巨大な——あまりに巨大な半球形の洞窟の、中央に白い枝が垂れている。実を言えば、彼女を覆い隠すようにして垂れているのは枝ではなく根だった。それは岩盤を貫いて、どれほどあるのか分からないほど高い天井の中央から、彼女の立つ足元までびっしりと細かく枝分かれしながら伸びているのだった。

ふむ、と間近で声がした。

「よい女怪だ」

彼女はもう一度声の所在を探した。

今度はたやすく見つかった。彼女の足元の、そう離れていないところに腰の曲がった老婆

が立っていた。
老婆は立ち上がった彼女の、胸のあたりまでしか背丈がない。枯れ枝のような腕を背伸びするように差し上げて、老婆は彼女の濡れて背中に纏わりついた髪を撫でた。
「女で」
言いながら、次いで頬を撫でる。
「首は魚」
軽く腕を叩く。
「上体は人」
背中に廻された手が、さらに下の背筋を叩いた。
「下は豹。尾は蜥蜴だね。よく混じっている」
上の背筋と下の背筋の、ちょうど間のよく緊張したあたりを老婆は軽く押した。
「さ、そんなにお泣きでないよ。――おいで」
押されるままに彼女は歩いた。歩くたびに涙がこぼれて乾いた土に染みを作る。
ゆっくりと長い時間をかけて洞窟を横切り、天井の岩盤が作る曲線と足元の土が交わるあたりで階段を見つけた。
「サンシ、にしよう」
老婆がやっと呟いた。

「汕、子、だ。お前は、これから汕子と呼ばれる」
彼女は黙って狭く暗い石段を昇りながら、老婆の声を聞いていた。
「姓は白だ。これは蓬山で実った女怪の定め」
大きく湾曲した石段を昇っていくと、ふいに光が見えた。
「姓を賜るのは、お前の使命が重いからだ。それをよく覚えておおき」
彼女は頷いた。何が重いのか、言われなくても分かっていた。
その重みを一段ずつ、胸の中に刻み直すようにしながら黙々と石段を昇ると、ふいに視野が開けた。いつの間にか幅広になっていた石段の、正面にぽっかりと大きく四角の穴が空いていた。
彼女は足を止めた。
見上げる角度にあるその穴から、淡い青の抜けるように高い空と、そこに向かって伸びる眩いばかりに白い木が見えた。見えるのはそれだけだった。やっと止まった涙がまた溢れた。
老婆が背筋を叩いた。
「そら、おゆき」
彼女は駆けだした。生まれ落ちたばかりの脚で初めて走った。
石段を上りきり、陽光の中に飛び出し、刺すような光に涙をこぼしながらまっすぐ木に駆

け寄った。

彼女は根に実った。長く細い根に対して、木は低く大きかった。苔むした岩盤の上、空を背景に伸びやかに枝を張った木の、白い白い枝には金の果実が一つ実っている。

「泰麒」

初めての声が彼女の喉を越えた。

彼女を実らせた根と、ちょうど一対をなす位置にその果実はある。まだ小さく、両手で包めるほどの大きさしかなかった。陽光が乾ききらぬ鋭敏な肌を刺すのを感じながら、彼女はその実を両手で包んで頬を当てた。

涙が止まらない。

「……泰麒」

汕子はこの世に生を受けたのだ。

2

世界の中央に黄海があった。

海と言っても水はない。そこで流れてゆくものは時と風ばかり、その他には果てのない砂漠と果てのない樹海と、あるいは一面の沼地が、あるいは一連の岩山が広がるばかりの土地

である。

その黄海の中央に一際高く連なる山々がある。五つの峻峰が複雑に入り組むそこを、五山といった。

中央の高い山を崇高、周囲四方に連なる山をそれぞれ蓬山、華山、霍山、恒山と呼ぶ。蓬山は旧くを泰山といったが、凶事あるたびに改名して、ここ千年ばかりは蓬山と呼び習わしている。

五山は西王母の山と言い、蓬山は王夫人の山だと言う。残る四山の主は諸説あって定かではない。その真偽はともあれ、いずれにしても五山は女神・女仙の土地だった。

五山はどれも天を突くほど高い山だが、麓に広がる黄海同様、何があるわけでもなかった。緑と岩と水、それだけが複雑怪奇な地形を作りながら連なるばかり、そこに途切れることなく風だけが吹き抜けてゆく。

ただ蓬山の中腹に、蓬廬宮と呼ばれる小さな宮殿がある。ここが蓬山で——ひいては五山で暮らす者たちの唯一の住処なのだった。

「……おや、罌粟が」

禎衛は呟いて、屈みこんだ。

泉に罌粟の花びらがいくつも浮いているのを見つけたからだ。

禎衛から二歩ほど後れて小径を歩いていた蓉可もまた足を止めた。澄んだ水の表面に、赤い花弁の色が美しかった。

「罌粟苑の花でしょうか」

蓉可の問いに、禎衛は頷いて花びらを掬う。

「風に乗って飛んできたのだろう。——今日は妙な風が吹くね」

蓉可もまた頷いて、頭上を見上げた。

蓬山は奇岩の山だった。特にここ蓬廬宮のある高台は、苔むした奇岩でさながら迷路の様相を呈している。

奇岩はその名に相応しく奇妙に剝れ、不安定に聳え、その高さは低いものでも身の丈の三倍あまり、奇岩の間を縫うようにして通る小径は、かろうじて女が二人肩を並べて歩けるほどしかない。

その小径の途中で足を止めて、禎衛は泉に浮かんだ罌粟の花びらを丁寧に掬った。

彼女は女仙の一人だった。十八、九の娘に見えるが、女仙の外見を信用してはならない。いかなる経緯でいつごろ昇仙したのか、彼女自身ももはや覚えていない。それほど長い間、蓬山にいることだけは確かだった。五十人あまりいる女仙の中でも、禎衛ほど蓬山住まいが長い女仙はいない。

反対に、蓉可はもっとも新参の女仙だった。歳は十六、ごく平凡な農家の娘に生まれた

が、どういうわけか世俗に馴染めず、十三の歳に昇仙の誓いを立て、五穀を断って西王母の廟に通い続けること三年、つい先頃満願を成就し五山へ召し上げられた。

したがって蓉可は蓬山に住んで長いわけでは決してない。崇高山での修行を終え、蓬廬宮に移って半月だが、その彼女にも今日の風はなにかしら奇妙に思われた。

常には緩やかに小径を流れていく風が、今日にかぎって強く速い。奇岩の上空へ吹き上げ、かと思えば奇岩にそって吹き下ろして、至るところで渦を巻いている。空模様もどこかすっきりしなかった。薄曇りにもかかわらず、重苦しいものが垂れこめているような、そんなふうに感じられてならない。

「何かの予兆でしょうか」

蓉可の問いに、禎衛は首を傾げた。

「さてね。今朝の八卦には、何かが起こりそうな卦は出ていなかったけれど。——とにかく、水を汲んでおしまい」

「はい」

蓉可は持ってきた手桶を泉に沈めた。

泉の名前は海桐泉という。奇岩の根元を刳るようにして湧いた泉の、その上に差しかかるように張り出した岩棚の上には海桐花の木が群生していた。

蓬廬宮にある泉は、もちろんこれ一つではない。いくつの泉があるのか数えてみた酔狂な

者はいないが、名前が必要なほどの数であるのは確かである。
蓬山には季節がない。花は年中咲いて散った。今も海桐花が小さな白い花を落として、泉の水面に泡のように浮かんでいる。水には海桐花の芳香が移って、海桐泉の水を汲み上げ続けた桶からは、いつしか海桐花の匂いがするほどだった。
海桐花の匂いのする水は、蓬廬宮の中にある大真廟で蓬山の守り神である王夫人の木像を拭き清めるのに使われる。
海桐花の花を避けながら水を汲み上げ、大真廟に向かおうと足を踏みだした蓉可を、禎衛は笑って呼び止めた。
「どこへお行きだね」
「え？　――夫人の……」
禎衛は声を上げて笑う。
「廟はそちらにありはしないよ。まだ道を覚えておいでないかえ？」
蓉可は三方に枝分かれした小径を見比べて、少し赤くなった。
「……そのようですね」
蓬山は奇岩と無数に枝分かれした小径とで迷路のようだが、実際のところ迷宮に他ならなかった。
正しい道を知っているのは蓬廬宮に住む者だけだった。ここに住まう女仙だけが無数に枝

分かれした道の中から正しい道を選びとり、洗濯によい小川へ、水浴によい淵へ、水汲みによい泉へと行くことができた。あるいはまた、小さいながら陽当たりのよい野原へ、花園へ、菜園へ。あるいは、点在する小さな宮へ辿り着くことができる。——ただし、蓉可のように蓬山に来て間がない女仙ともなれば、話は別である。

「どうしてこんな、ややこしい……」

蓉可が溜息混じりにひとりごちたので、禎衛は笑った。

「蓬山公をお護りするためだもの。多少の不便は我慢おし」

迷路は侵入者に対する備えだった。

奇岩の上を到底人馬が進むことはできない。妖獣ならばそれも可能だろうが、蓬廬宮にはいくつかの例外を除き、妖獣が立ち入ることは許されなかった。そうして、奇岩の間を縫う小径は細い。蓬廬宮を尋ねる者は乗騎を捨て、必ず歩いて入らなければならなかった。

一歩中へ入れば、道は紛れもなく迷路である。

高い奇岩は視野を遮る。しっとりと水を含んだ苔に覆われた奇岩の、その間を通る小径には石畳が敷かれてはいるものの、無数の枝道と無数の隧道であっという間に方角を見失うことは疑いがない。

蓬廬宮を熟知する者だけが道を見失わずに、この世にただ一つしかない木の生える高台へと、辿り着くことができるのだ。

「ああ、やっぱりそうなんですね」
迷路の奥に隠されたのは捨身木、捨身木に実るのは麒麟だった。
この世では人も獣もその他のものも、悉くが白い木に実るが、麒麟が実る木はここ蓬山にある捨身木が唯一だった。
蓬山は麒麟の生まれる聖地、蓬廬宮は麒麟のために存在し、そこに住まう女仙もまた麒麟のために存在する。麒麟は蓬山の主である。ゆえに、蓬山公と呼んだ。
禎衛は頷く。
「麒麟を預かる責任は重い。けれどこれほど幸せな仕事もない。泰果が孵ったら蓉可にもお世話を手伝って貰う。ようく心しておきね」
禎衛の言葉に蓉可は瞳を輝かせた。
「わたしがお手伝いできるんですか？　本当に？」
実のところ、蓉可は少し不満だったのだ。
蓬山の女仙の務めは麒麟に仕えることで、それ以外の仕事は雑用にすぎない。蓬山にはいま若い麒麟がいるが、蓉可はあまりに新参なのでその麒麟に係わることを許されなかった。
禎衛は笑う。
「まず、道を覚えなくてはね」
「はい」

蓉可は大きく頷いた。

捨身木にはつい先日、麒麟の実が一つ、付いた。泰果と呼ばれる果実である。

蓉可は、今はまだ小さな果実に思いを馳せる。

泰果が熟して麒麟が孵るまでに十月。生まれたばかりの麒麟はどんなに愛らしいだろう。小さな麒麟のそば近くに仕えてその世話をする、それは想像しただけで楽しくてたまらないことのように思われた。

またどこからか罌粟の花びらが飛んできて、泉の水面に舞い落ちた。

3

「罌粟かえ」

突然声を掛けられて、禎衛は花びらを掬う手を止めた。背後を振り返ると、海桐泉に近いことから海桐宮と呼ばれる建物から一人の女が出てきたところだった。

蓉可は女を見やって首を傾げる。見覚えのない顔だったからだ。歳の頃は分からない。若いようでもあり、すでに中年を越えているようでもあった。着ているものも身につけている装身具も、女仙がつけるそれとは格段に違う。身分の高い女なのだとは想像がついたのだが。

「――玄君」

禎衛が慌ててその場に平伏し、蓉可もぎょっとしてそれに続いた。

現れたのは蓬廬宮に住まう女仙の長、天仙玉女碧霞玄君――玉葉だったのだ。

「罌粟苑の花が風に乗ってきたのでございましょう」

禎衛が述べると、玉葉は玲瓏とした面を奇岩の合間の空へ向けた。

「妙な風の吹くことよの」

「はい」

玉葉は少しの間、柳眉を顰めるようにして空を見上げていたが、すぐに視線を下ろして蓉可のほうへ向けた。

「蓉可といったか。――蓬山にはもう慣れたかえ」

蓉可は声を掛けられて狼狽した。

まだ下界にいたころ、玉葉は伝説の中にしか住まないものだと思っていた。それほど隔たりのある女神なのだ。文字どおり雲の上の人に会って声まで掛けてもらっては、うろたえずにいることなどできない。

「は……はい」

「まだ道に迷うようですが」

禎衛が笑い含みに言ったので、蓉可は真っ赤になった。

玉葉は耳に快い声を上げて笑う。

「それは新参者の定めよの。かく申す禎衛も、昔にはさんざん迷うておったほどに。じきに慣れよう」

ちらりと蓉可が禎衛に視線を向けると、禎衛は屈託なく笑っている。

「ほんに。――妾よりは、よほど物覚えはよいようでございます。労苦を厭わず、よう働いてくれますし」

玉葉は笑んだ。

「それは、感心なこと」

蓉可はさらに赤くなってしまった。

「と、とんでもございません。まだまだ叱られることばかりで――」

「慣れるまでは、叱られるのも務めのうち。気落ちせずにな」

「――はい」

深々と頭を下げて額を地に付けた蓉可を見やって玉葉は微笑う。同じく微笑んで若い女仙を見ている禎衛に視線を向けた。

「ときに、戴の女怪が斃ったとか」

「さようでございます」

玉葉は常には蓬廬宮にはいない。ふいにどこからともなく現れる。いつもはどこにいて、

どこからどうやって現れるのか、禎衛は知らなかった。不思議に思わないでもないが、一介の女仙が詮索してよいことではない。

「名は？」

「汕子、と」

「その、汕子はどこじゃ？」

「捨身木の下に。いっかな離れようといたしません」

禎衛が言うと、玉葉はふっくりした紅唇で笑った。

「いつものことながら、女怪とは情の深いものよの」

禎衛もまた笑んで頷く。

麒麟には親がない。親の代わりを務めるのが女怪で、これは捨身木の根に実る。麒麟の実が枝に付くと一夜で孵って、これから十月、麒麟が孵るまで枝の下で熟していく果実を見守り続けるのだ。

「して、どちらと？」

女怪だけがこれから生まれる麒麟の性別を知っていた。

「泰麒だそうでございます」

「そうか」

牡は麒、牝は麟。国氏を冠して号となすのが古来からの決まりである。現在、捨身木に実

っているのは戴国の麒、国氏は「泰」、ゆえに「泰麒」と呼ばれる。

玉葉は一つ頷いて、捨身木に至る道へ足を踏み出した。禎衛と蓉可がそれを見送って深く頭を下げたときだった。

突然、大気が震撼した。

逆巻く勢いで突風が小径を駆け抜けた。

声を上げる暇もなく、禎衛はその場に薙ぎ倒される。同じように倒れた蓉可が悲鳴を上げた。

地が鳴動する。地鳴りは奇岩に谺して、迷宮が不気味な咆哮を上げた。

「何が……」

蓉可の狼狽しきった声に、禎衛は答えることができなかった。

単なる嵐とも地震とも思えない。単にそれだけのことならば、必ず八卦に予言があったはずである。第一、単なる天変地異なら、天神女神の力によって幾重にも守護されたこの蓬山に起こるはずがない。

「玄君、宮の中へ」

とにかく長の安全を図らねばと、禎衛が石畳に爪を立ててなんとか顔を起こすと、玉葉は天を仰いで立ち尽くしていた。

いつの間にか空が赤い。薄い赤い紗を幾重にも下ろしたようにして、赤気が揺らめき空を

覆っていた。
「蝕か……！」
玉葉は鳴動を続ける大地には構わず、空で踊る極光を見据える。
あの突風に倒されずに済んだのは、さすがは女神というべきか。それでも禎衛には、それに感嘆する余裕などありはしなかった。
「蝕――」
大気が捻じれ、のたうつように震えるのが分かる。そのたびに頭上で赤気が不穏な蠢きを繰り返した。
赤気の狭間に薄く、蜃気楼のように何かの影が見えた。
それは海の彼方に細く広がる大地の幻影である。
「そんな――」
この世ならざる土地が、接近しようとしている。
細かく可憐な海桐花の花が、突風に散って飛礫のように禎衛を打った。
「ああ――泰果があるのに……！」

4

白い枝の下に身を伏せ、湿った苔が肌を擽るのを感じながら、うっとりと汕子は枝の果実に見入っていた。

泰麒の入った実は十月で熟す。

十月の後には、あの泰果から汕子の主である麒麟が孵るのだ。熟した実を捥ぐその瞬間を思うと、汕子の身体は涙の温度をしたもので一杯になる。

嬉しく、誇らしく、溢れるような思いで光沢のある金の実を見上げていたときに、突然それは襲ってきた。

汕子には最初、何が起こったのか分からなかった。

大気が捻れる。逆巻いて壊れる。幕を引いたように赤気が空で踊り始めた。身震いするほどの恐怖を感じて、ようやく「蝕」という言葉を脳裏に探し当てた。

咄嗟に立ち上がった汕子の足を突風が掬う。風には決してそよがぬはずの白い枝が、音を立てて揺れた。

悲鳴を上げて汕子は枝に縋った。枝を摑み、風に逆らって身を起こすと、吹き散らされて枝に絡めとられた髪が毟られていく。そんな痛みに気を取られる余裕はない。守らなけれ

ば、と切迫した思いで見上げた視線の先で空気が捻じれる。
「……泰麒！」
吹き寄せた音が身体を叩いた。捻じれてひずんだ大気がさらに歪み、歪みが枝を呑みこむのが見えた。
「やめて……！」
金の小さな実がひずみに呑みこまれる。十月先、汕子が己の手で捥ぐまでは、決して枝を離れるはずのない実が、枝から捻じ切られていくのが見えた。
「誰か！」
枝に掻き切られて血だらけになった腕が実を追う。指先と金の実の間の距離は絶望的なまでに遠かった。
「誰か、止めて――！」
汕子の叫びは、全霊を託して伸ばされた指の先で断ち切られた。
金の実はその姿を歪みの中に沈めて消えた。
この世に生まれ、泰麒と呼んだ、その他に発した初めての声は悲鳴だった。虚しいばかりの叫びだったのである。
始まったときと同じく、唐突にそれは終わった。

汕子は呆然と白い枝を見上げた。
そこにはもう金の光は見えなかった。たった一つあった果実は、消え失せていた。
「汕子……！」
声が四方から響いて、多くの女仙が駆けてくるのが見えた。
まっさきに汕子のそばに辿りついたのは玉葉だった。
「ああ……汕子……」
汕子は差し出された彼女のたおやかな手に縋りついた。
最初に名を。次いで、悲鳴と叫びを。その次に汕子の喉が発したのは号泣だった。
「なんということ」
玉葉は孵ったばかりの女怪を抱きしめる。無惨に散った髪を梳き、傷だらけになった身体を撫でた。
「よりによって、麒麟が実ったときに」
腕の中の女怪は絶叫している。ともすれば十月のほとんどを木の下で過ごすほど、女怪の麒麟に対する思いは深い。それを目の前で失った痛みは、玉葉の想像に余った。
「大事はない」
玉葉は言って、女怪の背を叩いた。
「そのように泣くでない、汕子。……必ず泰麒は捜し出してみしょう」

呟きながら、己に言い聞かせる。
「できるだけ早うに、そなたの手に泰麒を戻してやろうほどに」
「玄君……」
声を掛けてきた禎衛に頷く。
「諸国に朱雀を飛ばし、至急に蝕の方角を調べさせよ」
「かしこまりまして」
「月の出までに、ぞえ。女仙を集めて門を開く用意をさせよ」
「はい。ただいま」
女仙が方々に散っていく。玉葉は虚しく視線を上げた。
何度見渡しても、白い枝に金の果実は見出せなかった。

蝕は黄海の西に起こって、東の方角へ駆け抜けていったと分かった。
不可思議な力に守られた五山の、さらに守護の厚い蓬廬宮の花は一花も残さずに散った。
蝕が通過した諸国からは甚大な被害が報告されたが、蓬山の女仙にとってそれは心を動かされることではない。彼女たちにとって、重要なこととは麒麟のことでしかありえないのだ。
——問題は、蝕の歪みの中に呑みこまれた果実が、どこへ行ってしまったのかということだった。

蝕はこの世と、この世ならざる世界を繋ぐ。この世の外を蓬萊といい、崑崙といった。

一方は世界の果てに、もう一方は世界の陰に位置すると伝えられる。

その真偽はともかく、それは人には行くことも覗き見ることもできない異境である。蝕と、月の呪力を使って開く呉剛の門だけがその二つの世界を繋ぐことができた。

世界は虚海と呼ばれる海に取り巻かれている。東へ抜けた蝕なら、泰果は虚海を渡って世界の果て——蓬萊に流れていったのだろう。

人には渡れぬ世界だが、女仙は単なる人ではない。玉葉の指示のもと、多くの女仙が虚海に開いた門を越えて泰果を捜しにいったが、泰果の行方は杳として知れなかった。

——麒麟は、失われてしまったのだ。

その日から長く、蓬山の東、黄海の東を彷徨う汕子の姿が目撃された。

二章

1

蓉可は珍珠花の隧道を抜けたところで、汕子に出会った。

隧道を抜けたところにある小さな丸い広場は、柔らかな緑の草に覆われている。周囲の奇岩の斜面には、しがみつくようにして珍珠花が生えていた。ちょうど隧道の上に生えた一株は、白い花の枝を簾のように丸い出口にさしかけている。

その花の簾をそっと掻き分けたところで、蓉可は斜面を下ってくる汕子を見つけたのだ。

蓉可は海桐泉の水が入った桶を足元に置く。

人馬には通えぬ奇岩の上を、女怪は軽々と駆けていく。斜面の上から汕子が下りてくることに不思議はないが、肝心の汕子の姿を見るのが久方ぶりだった。

「――汕子、お帰り」

女怪は迷路を越えて東の方角へ彷徨い出る。一旦出ると、長い時には一月ほども帰ってこないのが常だった。

何が目的の旅なのかは、蓬廬宮の女仙のすべてが知っている。倦むほど彷徨ってから、女怪は疲れ果てた顔で帰ってくるのだった。

「ちょうどいい。水を汲んできたところ、そこにお座りなさいな」

蓉可が言うと、汕子はおとなしく豹の脚を折って、珍珠花の下に真っ白な身体を休めた。

「今度は長かったね。黄海の果てまで行っていた？」

できることなら黄海を取り巻く金剛山をも越えて、さらに東へ行きたいだろうが、どんな生き物も己の意志のみで金剛山を越えることはできない。いかなる仕組みでか、そのように定められていた。

「ほら、おあがり」

桶を口元にあてがってやると、汕子はおとなしく縁に口を付けた。

ひとしきり飲むと顔を上げたので、桶を下ろして袖から出した布を水に浸した。軽く絞って、脚に当ててやる。支えた手にもその脚が熱をもっているのが分かった。

「ああ、こんなに腫らして」

布で爪先をくるむようにしてやると、汕子は真円の目を閉じる。首を珍珠花の茂みに軽く凭せかけるようにして、その重みで雪のように花が散った。

ここにあった珍珠花はかつて一度根こそぎ折れた。ただの一本でさえ残らなかった。
――もう十年も前の話である。
「気持ちいい？　あまり遠出をしないのよ」
汕子は答えなかったが、それはいつものことなので蓉可も気に止めなかった。
大きな蝕があった。さすがに五山では地形が変わることはなかったものの、五山の外では地勢が一変した。――そうして白い木の果実は捥ぎとられた。
女怪は悲鳴を上げ、号泣し、それ以後汕子の声を聞いた者はいない。
蓉可は四本の脚を丁寧に冷やしながら拭ってやった。
「まだ痛むでしょう。川へ行って冷やしてらっしゃい」
言って、すっかり温くなった水をその場にこぼすと、汕子は立ち上がって歩き出した。
汕子がとぼとぼと歩き出した枝道の方角に川はない。彼女は白い木の根元へ戻るのだ。蓉可にはそれが分かったが、あえて呼び止めたりはしなかった。
蓉可には汕子の気持ちが分かるのだ。
麒麟の木に小さな実が付いて、それが孵ったら世話を手伝わせてやろうと言われた。
下界では人が麒麟に会うことは滅多にない。昇仙して蓬山に召し上げられて、初めて蓉可に与えられる責任のある仕事になるはずだったし、生まれて初めて間近に見る麒麟になるはずだった。

その果実は流されて、麒麟のために用意された蓉可の両手は宙に浮いた。汕子が養う相手を失って乳房を——人の形をした上体の胸には少女のように微かなふくらみしかない。それは豹の形をした下肢のほうにあった——腫らしていたように、蓉可の中にもまた、行き場を失って疼くものが残された。

果実が流れて十年。どの女仙も、もう泰麒が帰ってくることはあるまい、と言う。きっとそのうち新しい泰果が捨身木に実る。それは失われた麒麟が異界で死んだことを意味するのだと、そう言うのだ。

それでも諦めきれなかった。汕子が今も東の方角へ彷徨い出るように、蓉可もまた、泰麒のために何かをすることをやめられない。無事を祈り続け、細々とした品を用意し、少しでも役に立てるよう麒麟についてできるかぎりのことを学ぶ。そうせずにはいられないから、汕子の気持ちは痛いほど分かるし、汕子もまた女仙とは深く係わろうとしないなかで、蓉可にだけは馴染んでくれた。

足をひきずるようにして去った白い背を見送って、蓉可は桶を抱え上げた。

水を汲みなおそうと踵を返したときだった。珍珠花の簾が動いて、隧道から女仙の一人が顔を出した。

「こちらに汕子が来なかったかえ」

蓉可は、たったいま汕子が曲がっていった枝道のほうを見やった。すでに汕子の姿は見え

ない。
「木のほうへ行ったけれど」
「大急ぎで追いかけておくれでないか」
「あたしは、水を」
「玄君のお召しだ」
蓉可は目を見開いた。
「どうやら泰果の行方が分かった」

2

蓉可は汕子を追いかけ、玉葉が待つ白亀宮へ急がせた。
蓬廬宮の建物は、どれもみな四阿か、さもなければ庵のような佇いをしている。風なら岩が防いでくれる。もともと気候のよい山、暑さ寒さには縁がない。ただ雨露が凌げればよかった。
蓉可は小径を走り、白い石の階を五段ばかり昇り、同じく白い石を敷いた宮の床に踏みこんだ。ちょうど禎衛もまた宮の中に駆けこんできたところだった。
「汕子を連れてまいりました」

蓉可はその広い八角形の床の上に平伏する。椅子に座り、背後の手摺に凭れていた玉葉は頷いた。

蓉可の傍らに平伏した禎衛が顔を上げる。

「おそれながら、泰果が見つかったとか」

「雁の麒麟が見つけてくりゃった」

「では、本当に泰麒が見つかったのでございますか」

それは奇蹟に近いことだ。蓬山のどの女仙もが、もう諦めていた。蓬山の歴史の中では、十年も経って帰ってきた麒麟の例などありはしない。過去、蓬萊に流された麒麟がないではないが、どんなに長くともその半分以下で見つかっている。十年という歳月は禎衛を驚かせるに足るほど破格の数字だった。

玉葉はおっとりと微笑う。

「おそらく。……一旦あちらへ渡って、胎果となれば姿形が変わるが、麒麟には麒麟の気配が見えるという。それで諸国の麒麟に折につけ、虚海を渡って泰麒を捜すようお頼みしておいたが、今日、ようやく返答があった」

蝕に流された果実は、異国において女の胎に辿りつく。それを胎果と称した。

「延台輔からでございますか」

玉葉は瑠璃を削がせて作った扇を口元に翳して笑う。

「延台輔はしばしば虚海を渡っているご様子。見つけてくださるなら延台輔であろうと思うたが、やはりそうじゃったの」

麒麟がしばしば遠出をするのは誉められたことではないが、この先強く咎めるわけにもいかないだろう。

「蓬萊に麒麟を見つけたという。今のところ、在所の明らかでない麒麟は泰麒だけゆえ、泰麒に違いないであろ」

「……はい」

それでは本当に麒麟が帰ってくるのだ。

「では、さっそく女仙を集めて――」

言いさした禎衛を玉葉は制した。

「よい」

「ですが」

玉葉は首を振って、禎衛と蓉可の背後に呆然と立っている汕子に向き直った。扇を卓の上に置いて、まっすぐに両手を伸ばす。

「……汕子。ここへ」

汕子はのろのろと玉葉の間近へ歩いていく。

「必ず見つけてみしょうと言うたは、嘘ではなかったろう?」

玉葉は汐子の手を取った。

「少しばかり遅うなったが、許してたも」

言って汐子の手を叩く。

「捨身木の根元に扉がある。行って、今度こそこの手で捥いで来や」

汐子の真円の目にみるみる涙が浮かんだが、彼女は泣かなかった。即座に身を翻すと、そのまま駆けていった。

玉葉は疾走してゆく白い女怪を目を細めて見守る。白亀宮を飛び出した汐子が小径を曲がるのを見届けてから、禎衛に向かって晴やかに笑った。

「やっと蓬山に祭りの季節がきますぞえ」

汐子は走った。生まれてこのかた、ねぐらと定めた木の根元に走ると、太い幹の傍らに一人の年若い女が立って、その足元を示していた。そこには丸く白い光の射している場所がある。

すでに女仙が集まっていた。見守る彼女たちには一瞥もくれず、汐子はまっすぐ女の許に駆け寄った。

捨身木は崖の上、巨大な一枚岩の上に立っている。ずっしりと苔むした岩の、ちょうど木の根元から一歩ほどの場所に、金の髪をしたその女は立っていた。

足元には銀の輪が落ちている。近づいてみれば、それは単なる輪ではなく、一匹の蛇だった。白銀の鱗を持った二つ尾の蛇が丸くなって、一方の尾を銜えて円を作っていたのだ。

蛇の作った円の中は薄く輝いている。ちょうど丸い光が降り注いでいるようにも、苔の下から光が射しているようにも見えた。

汕子が足を止めると、彼女は微笑って優美な右手を差し出した。彼女の左手の指には蛇のもう一方の尾が巻きついている。

「汕子、ですね」

汕子は彼女を見、蛇が作った光の輪を覗きこむ。両手を広げたほどの輪の、向こうは白い闇だった。淡い光の隧道が続いた底に、ぽっかりと丸い穴が空いていた。穴に切り取られた風景の中に見えるのは、見慣れない様式の建物と、庭らしき空間と、金の丸い光だけだったが、汕子にはそれで充分だった。

――泰麒。

なにを誤っても、あの光が泰麒か否かを誤ったりはしない。

「お入りなさい。ただし、わたくしの手を決して放さないでくださいまし」

そう言った女は、汕子の知る顔ではなかったが、今はどうでもいいことだった。

彼女の手を握り、汕子は光の中に踏みこむ。冷え冷えとした空気が吹き上げてきていた。隧道の出口には珍珠花の花弁が舞い散るようにして、白い冷たい花が吹きこんでいる。

光の中に最後の足までが踏みこむと、ふんわりと浮き上がる気配があって、天地の感覚が消滅した。宙を漂うようにして隧道の出口へ向かって一歩を踏みだした汕子の背後に、女が続いて下りてくる。

「さあ。進めるところまで進んでごらんなさい」

言われて、汕子は歩き始める。出口へ向かって、汕子が進めるぎりぎりの縁まで歩んでから、腕を伸ばした。

いまや視界一杯に広がった風景は、白い冷たい花の舞う墨色の空気の中に金の丸い光が浮かんでいる、ただそれだけの光景だった。

光はよく見れば小さな子供の姿をしているようにも思われたが、汕子の目には、それが一つの果実のように映った。本当なら十年も前に汕子が白い枝から捥いだはずの果実。腕に抱えるほどの大きさがあって、艶やかな金の色をしている——。

汕子の指は精一杯に伸ばしても、金の果実に届かない。女の手を握る指に力を籠め、上体を伸ばし、手探りをし、冷たい空気を掻き分け果実を差し招くようにすると、果実のほうから汕子の手に届くあたりへ漂ってきた。

——どれほどこの瞬間を夢見たろう。

汕子は指先に触れたその果実をしっかりと摑まえた。

手元に引き寄せると、その実は難なく、汕子の腕の中に捥がれて落ちた。

3

彼が白い手の、すぐ間近へ歩いていくと、白い手は迷わずに彼の手首を握った。

冷えた肌に、その手の感触はひどく暖かかった。

蔵と土塀の間の狭い隙間にどうやって人が隠れているのか、それを確かめたかったはずなのに、間近まで行った瞬間、あたりの風景が定かではなくなった。ちょうど瞳を水の膜が覆いでもしたように、風景が潤んで滲み、ものの輪郭が消え失せた。

思わず手探りをするように伸ばした腕の手首を摑まれ、すると急に身体が浮き上がる感触があって、するりとどこかに引きこまれた。

引きこまれた先は白い空間だった。色のない靄のようなものが濃く立ちこめていて、どんな場所だか判然としなかったが、彼は何となくそこをふわふわした球形の場所のように感じた。

そこはいっそう暖かく、さらに暖かい風がどこからか流れてきていた。

足元には硬い床の感触がなかった。かといって柔らかなものを踏んで足を捉られる感じもしない。雲の上に立つとこんな感じがするかしら、と彼は思う。

すぐ近くに人の気配がして誰かがしっかり彼の手を捕らえていたが、その姿は見えなかっ

た。靄の中にちらちらと乳白色の影が動いているようにも思えたけれど、気のせいだったかもしれなかった。

少しの間ぼかんとしていると、彼の手首を握った手が彼を引いた。不思議に怖い感じはしなかったので、おとなしく手を引かれるに任せる。

ごく短い廊下を歩くほどの間、ふわふわと引かれて、やがて水面に顔を出すようにして、ぽかりと靄の外に出た。

突然陽光に曝されて、彼はしばらくきょとんとしていた。

目の前にあったのは、見たこともない木の真っ白な幹だった。それはまるで純白の金属でできたように見えた。幹は太く、それでもさほどには高くなく、やはり白い枝は大きく横に伸びて、先端で垂れるように撓っている。

その枝の向こうには奇妙な風景が見えた。緑色をした変わった形の岩が連なる様子。遠巻きに集まった、見慣れない恰好の女たち。

そうして、なかでも一番奇妙だったのは、彼の手を握った女の姿だった。

女は半分が人で、半分が虎か豹のように見えた。顔は妙にのっぺりとして、そこに真円の目が表現のしようのない色を湛えて開いている。怯えてもいいはずだが、不思議に怖いとは思わなかった。それよりむしろ、優しい目だとそう思った。

「……タイキ」

半獣の女はそう言ったが、それが何を意味する言葉なのか、彼にはよく分からなかったし、ましてやそれが彼女が十年ぶりに発した言葉であることなど、分かるはずがなかった。
「泰麒」
彼女の柔らかな手が髪を撫でて、同時に丸い目から澄んだ涙がこぼれた。
彼は、いつも母親にするように手を握ってその顔を覗きこんだ。
「悲しいことがあったの？」
彼が言うと、彼女は首を横に振った。いいえ、と否定するよりは、気にしなくていいのよ、と言いたげなその仕種が母親のそれによく似ていた。
「……泰麒？　その子が？」
声が聞こえて、彼はようやく木の周囲で奇妙なざわめきが起こっていることに気がついた。どうしたのだろう、と思っていると、一人の女が近づいてくる。
「……珍しいこと」
「だれ？」
女は彼の前に膝をついた。
「わたしは玉葉と申す。……こんな髪を見たのは何百年ぶりかの」
女は彼の髪を梳いた。
「黒麒だ。ほんに、珍しいこと」

「何か、おかしい？」

彼は目の前の女にではなく、傍らに立って彼の手を握っている半人半獣の女のほうを見上げた。すでに彼の中で、こちらの女のほうが自分の頼るべき存在なのだと、そう何となく理解されていた。

彼女はもう一度、無言で首を横に振った。

「もちろん、おかしくはないとも。めでたいことじゃ」

目の前の女は言う。

「あちらで生まれたのなら名前があろうが、ここでは泰麒とお呼びする」

「泰麒？　どうしてですか？」

「それがきまりだから、かの」

「ここは、どこなんですか？　ぼくは庭にいたはずなんですけど」

彼は、異常なことが起こったのだと理解できないほどには小さくなかったが、それによってひどく動揺するほどには大きくなかった。

「ここは蓬山。泰麒のあるべき場所」

「よく……分かりません」

「いずれお分かりになろう。——これは、汕子。白汕子という。あなたのお世話を申しあげる」

彼は傍らの女を見上げた。

「汕子……」

さらに玉葉は、視線を脇へ向けた。

「そちらは、廉台輔」

白い木の幹のそばに、金の髪の女が立っていた。彼が玉葉の視線を追って彼女のほうを見たとき、ちょうど白い蛇がするすると腕に巻きついて、銀の腕輪に変じたところだった。蛇には二つ目の尾があって、それが腕輪に銀の鎖で繋がった指輪に変じたようにも見えたが、驚いていたので確かなこととは言えない。

「お礼を申されよ。泰麒のお迎えに汕子を遣わすため、貴重な宝をお貸しくだされたのだから」

彼はやんわりと微笑む女を見上げ、さらに汕子に目をやった。汕子が頷いたので、言われるままに頭を下げた。

「ありがとうございました」

彼女はただ微笑う。それを満足そうに見やって唐突に玉葉が立ち上がった。踵を返し、去っていこうとする。

「あの、玉葉……さん」

「泰麒。さま、と」

彼は汕子を見上げた。
「……さま、とお呼びするのです」
彼は頷いた。汕子の言葉は不思議に戸惑いを生まなかった。泰麒、と耳慣れない言葉で呼ばれても、汕子の口から出ると、自分の呼び名だとあっさり納得できた。
「玉葉さま。……いろんなことがとても不思議な気がするんですけど」
彼には自分の困惑を、うまく表現することができなかった。
玉葉はただ笑った。
「じきに慣れようほどに、おいおい汕子に訊かれるがよかろう」
彼は汕子を見上げた。汕子は微笑んだ。——表情の乏しい顔だから、定かではないが、たしかに微笑んだのだと感じた。
「はい」
彼が汕子の手を強く握ると、それ以上に強い力で応えがあった。

4

「——汕子、汕子。その子をようく見せておくれ」
「こちらへおいでなさい、泰麒。衣をしんぜましょう」

「衣より水を。それより桃がよろしいか」
「李でも梨でも」
玉葉が腕輪の女を伴ってその場を去るなり、女仙に取り囲まれて泰麒は困惑してしまった。
女仙たちの笑顔を見れば歓迎されているらしいとは分かるのだが、なにしろ状況が普通でない。汕子の手を固く握って、腕に摺り寄るようにすると、どっと女仙がはやしたてた。
「あれ、そのように汕子ばかりにつかずとも」
「汕子も独り占めおしでない」
「泰麒、こちらにいらっしゃいませ」
見かねて禎衛は女仙たちに声を掛けた。
「そのように浮ついては、泰麒もお困りでしょう。しばらく謹んで、汕子に任せておやりなさい」
言って禎衛は傍らに立った蓉可を振り返る。
「宮にお連れおし。露茜宮がよいだろう」
禎衛は、この若い女仙が泰麒のためにずっとその宮の準備をしていたことを知っていた。
蓉可は感極まった様子で禎衛を見返し、それから深く頷いた。
蓉可はそろそろと子供の前に進んだ。膝をついて目線の高さを合わせる。泰麒の顔を覗き

こんだ。

「……よくお帰りくださいました。心からお慶び申しあげます」

泰麒は守るように自分の肩に廻された汕子の腕が解けるのを感じた。やんわりと押し出されて、膝をついた女に対峙する。

「あなたは、誰ですか？」

「蓉可と申します」

「蓉可さまは……」

言いさしたとたんに、周囲の女たちがどっと笑った。蓉可もまた笑みを浮かべた。

「蓉可、とお呼びください。さま、と泰麒がお呼びになるのは、玄君だけでよろしいのですよ」

「玄君？」

「玉葉さまでございます」

泰麒が汕子を仰ぎ見ると、汕子は頷いた。それで泰麒も納得した。

「じゃあ、蓉可。——蓉可はどういう人なんですか？　どうしてぼくは、帰ってきたことになるんですか？」

「わたくしはこの蓬山に住む女仙でございます。そして泰麒は、この蓬山の主。泰麒はここでお生まれになったのですよ」

泰麒は目を見開いた。しばらく蓉可を見つめた。
「……ここで生まれた……？」
「はい」
蓉可は頷く。
「いわば、ここが泰麒のご実家でございます」
「でも……」
言いさした泰麒を、蓉可は首を振って止めた。
「泰麒はずっと行方知れずでいらっしゃいました。天変地異に巻き込まれて、異国に流されておしまいだったのです。本当に……お捜し申しあげました」
そういう蓉可は嬉しいような、切ないような表情をしていた。
「どこでどうしていらっしゃるのか、長い間心配申しあげておりました。やっとお帰りいただけて、こんなに嬉しいことはございません。本当に、よくお戻りくださいました」
泰麒はただ蓉可の顔を見返した。
それでは自分は、うちの子ではなかったのだ、と思った。
思ったとたんに、それはすんなりと胸の中に溶けこんだ。
祖母が自分を嫌うわけも、自分がどこか変で、そのせいで周囲と何かしらぎくしゃくしてしまうわけも、その一言でぜんぶ説明がついた気がした。

実際のところ、彼は家族どうまくやっていくことのできない子供だった。彼自身はうまくやっていきたいと願っていたし、そのように行動しているつもりだったのだが、それでも彼と家族の間にはどうしても埋められない溝が存在した。

同じ年頃の子供がよく考えるように、彼もまた自分は異分子なのかもしれない、と思うことがよくあった。——そして、それはやはり真実だったのだ。

「……もしかして、汕子がぼくの本当のお母さんなの？」

汕子と蓉可を見比べたが、ふたりはともに首を横に振った。

「汕子は泰麒の僕です。泰麒のお世話を申しあげるためにいるのでございます。わたくしは単なる女仙、泰麒にお気持ちよく暮らしていただけるよう、雑用をいたしますのが務めなのです」

「じゃあ、ぼくの本当のお母さんはどこにいるんですか……？」

蓉可は頭上の枝を見上げた。

「泰麒はこの木に生った実からお生まれになりました。天帝がお恵みくださったのですよ」

泰麒は白い木を見上げた。白銀の枝には果実はもちろん、花も葉も見えない。彼はまだ生命の誕生についてよくは知らない。それで蓉可のその言葉には、さしたる抵抗を感じなかった。

きっと——と、泰麒は思った——季節になれば、この枝いっぱいに赤い実が生るのだろ

う。たぶん大きな実で、それをぽんと割ると、その中に自分が入っていたのだ。

それはどこか奇妙な生まれ方であるようにも思われたが、彼は自分がある種の異端であることを何とはなしに感じとっていたので、それは生まれのせいなのだと納得することができた。

（それで、だったんだ）

自分は貰われてきた子だったから、祖母に嫌われ母の迷惑になっていたのだ。

木の実から生まれたので、どうしても祖母や両親が喜ぶようにふるまうことができなかったのだ。

――そうして、本当の両親はいない。どんな事情があるのかは分からないが、自分にはそもそも親がないのだ。

その思考はするすると胸の内に滑りこんできて、そもそもあった確信のようにそこに宿った。嘘だとは思えなかった。何かの間違いだとも、思えなかった。ただ――、ひどく切ない気分がした。

「……どうなさいました？」

蓉可が訊いてきたので、唇を引き結んで首を振った。汕子が労るように腕を廻してきたので、精一杯の力で汕子の身体にしがみついた。

――分かってしまった。

（ぼくはうちの子じゃなかったんだ）

たくさんの記憶の断片が脳裏をよぎっていった。

怒らせてばかりいた祖母。父親の叱責。彼はどうしても、二人の期待に応えることができなかった。母親は彼のことで祖母や父親と言い争うことが絶えず、必ず最後には一人でこっそり泣いていた。叱られるのは弟も同様だったけれど、弟は自分が叱られるのは彼のせいだと、そう言って怒った。

――困るんです、と若い教師は言った。

（少しもクラスに馴染んでくれないので、困っているんです）

彼女は彼を途方に暮れた目で見た。

（やはりこの年頃で、友達が一人もいないのは問題があると思うんです）

祖母は皺の深い口元を歪める。

（どうしてお友達を作らへんの）

（お義母さん、違うんです。この子は仲間外れになってるんです）

（そんなん、本人の気性に問題があるからやわ。どうしてちゃんと、お友達とうまくやっていくことがでけへんの）

（お兄ちゃんは弱虫だから、仲間に入れてもらえないんだよ）

（あんたは黙っとき。あんたはあんたで、弱い者いじめばっかり。母親がしっかりせえへん

し、うちの子は二人してこんなんなんやわ。まともに子供を育てられへんの）
（お義母さん、でも――）
祖母の叱責は結局いつも、母親を責めて終わる。そうして母親は一人で泣くのだ。
（どうしてお前は、そうなんだ）
父親に溜息をつかれて、何と返答すればよかったろう。
（お祖母ちゃんに叱られずに済むよう、もう少ししっかりできないのか）
――ごめんなさい、と詫びる以外に返す言葉がなかった。
（お兄ちゃんのせいで、またぼくまで怒られたじゃないか。お兄ちゃんが祖母ちゃんを怒らせてばっかりいるから、ぼくまでいっつも迷惑してる）
――ごめん、と謝るばかりで。
彼なりに努力してみても、少しも結果は変わらなかった。
どうしてうまくいかないのか、彼には分からなかった。自分の存在が家族全部に不快な思いをさせているように感じられてならなかった。彼さえいなければ、家族は円満でいられるのではないか、そんな気が常にしていた。
（本当にそうだったんだ）
自分という異分子がいたから。
（ぼくは、うちにいてはいけなかったんだ）

振り返るとそこは、暖かいばかりの場所であった気がした。父親が、母親が恋しかった。祖母が弟が懐かしかった。

彼がもう少し頑張れば、何もかにもがうまくいって、誰も怒ったり泣いたりせずにいられたのではないかと思えるのに。

（でももう、ぼくは二度とうちには帰れない）

涙がこぼれた。

それは郷愁ではなく、愛惜だった。

彼はすでに、別離を受け入れてしまっていた。

三章

1

「お目覚めですか……？」
汕子の声がして、泰麒は目を擦った。きょとんと目を開けて、しばらく横になったまま天井を眺めた。
白い石の天井だった。乳白色の石にはびっしりと何かの図案が彫りこまれている。四隅には鳥の彫刻が見え、草や花が複雑に絡み合いながら、天井の中央にある丸い図案を囲んでいる。色は塗ってなかったが、代わりに様々な色をした石が嵌めこんであった。
「あの鳥は何ていう鳥？」
指を伸ばして四方に止まった鳥のうちの一羽を指した。
「さあ……」

困ったような声に、ふうん、と呟く。本当を言えば、鳥の名前が知りたいわけではなかった。昨日、もう大きくなったのにたくさん泣いたのを思い出したので、少しきまりが悪かっただけだ。

「いま、何時？」

思いきって、汕子の声がしたほうを見た。小さな部屋――といっても、彼の勉強部屋よりも少し小さいにすぎない――の、床一杯に薄い綺麗な柄の布団が敷き詰めてあって、三方の壁ぞいにクッションとも枕ともつかないものが並べられている。白い石でできた壁の上半分には、小さな石を嵌めこんで、何かの樹木が描かれていた。

一方だけは壁がない。代わりに布が幾重にも下がっている。布はいまはたくし上げてあって、ちょうどそこに汕子の姿があった。

汕子は困ったように首を傾けた。

「ぼくは、これからどうすればいいんですか？　学校に行かなくてもいいの？」

泰麒はもう、自分の生活が大きく変わってしまったのだと理解している。目覚まして起きて、服に着替えて、顔を洗って朝食を食べて学校に出ていくような、そういう生活でないことだけは確かだと直感していた。

「何をすればいいの？」

「何も」

そう言って汕子は首を振った。

「お起きになりますか？」

そう訊かれるところをみると、このまま寝ていても起きても、どちらでも構わないらしい。それがここしばらくの間だけに許された特別な状態なのか、それともこの状態がずっと続くのか、それは判然としないにしろ。

「起きます」

泰麒は小部屋の奥のほうに横たえていた身体を起こした。

汕子が立ち上がって、それでこの小部屋が床から一段高くなっているのだと分かった。カーテンの向こうには、透かし彫りをした細い扉が何枚も並んでいる。開いている部分から、その向こうにさらに別の部屋があるのが見えた。

泰麒は興味深く自分のいる小部屋と、向こうに見える部屋を検分する。昨日は木の下で恥ずかしいくらい泣いて、そのまま眠ってしまった。それで自分が運びこまれた部屋がどういう部屋なのか、少しも分かっていなかったのだ。

この小部屋はとても落ち着ける場所だと思った。向こうに見える部屋も、気持ちのよさそうな部屋だ。向こうの部屋には壁がないようだったが、代わりに白い石の手摺があって、その外、手を伸ばせば届くほどの距離に、苔に覆われた岩が壁のように迫っている。岩壁と建物の隙間から入った光が、表面の苔を艶やかに輝かせていた。岩壁にしがみつくようにして

生えた草や小さな木が、部屋の中にまで入りこんでいるのが面白かった。

汕子が水差しと桶を持って小部屋の中に戻ってきた。一段低くなった部分の、片端にあるテーブルに桶を置いて泰麒を呼ぶ。ころころと布団の上を転がるようにして、汕子のそばによった。

「おはようございます」

言うと、汕子はただ微笑って泰麒に布団の端に腰掛けるよう、示した。おとなしく腰を下ろす。自分が裸なのに気づいたけれど、特に気にはしなかった。汕子も蓉可もそのほかの女たちも、泰麒が知るいかなる服とも違う服を着ていたので、ここでは前のような恰好はできないのだろうと、そう思った。

裸でも寒くない。かといって暑いわけでもない。ここはちょうどいま、気持ちのいい季節なのだろう。

汕子が少し変わったやりかたで、洗面をさせてくれた。うんと小さな子供になったようで恥しかったが、されるままになっていた。桶を持って出ていった汕子は、こんどは服を抱えて戻ってきた。それは、祖母が着る着物に少しだけ似ていると思った。

服を着せてくれる間も、汕子はずっと無言だった。汕子は無口なのだと、そう思ったが別に気詰りな感じはしない。服を着せられ、手を引かれて隣の部屋へ行くと、部屋の中央には朝食の載せられたテーブルがあって、蓉可がそのそばに立っていた。

「おはようございます、蓉可」
声を掛けると、蓉可は嬉しそうに笑う。
「おはようございます。よくお休みになれましたか？」
「はい。――蓉可が朝ご飯を作ってくれたんですか？」
「いいえ。お食事を用意するのは、そういう役目の者がするのですよ」
泰麒はきょとんとする。
「ひょっとして、お掃除をするのも、そういう役目の人がするんですか？」
「さようでございます。――さ、冷めないうちにお食事をなさいませ」
まるでお金持ちの家の子になったようだと思った。実際にそういう子を知るわけではないのだけれど。
蓉可に白く長い箸を渡されて、それを手に取った。
見慣れない料理を見渡して、それから蓉可と汕子を見比べる。
「蓉可と汕子は食べないんですか？」
「汕子は食事をいたしません。わたくしは、先に済ませました」
「でも、ぼくは一人でこんなに食べられません」
テーブルの上には大小いくつもの皿が並んでいる。
「お残しになって、構わないのですよ」

「ひょっとして、ぼくが寝坊をしたのでみんなご飯を済ませてしまったんでしょうか」

蓉可は笑う。

「汕子は食事をしないのです。そういう生き物ですから。たとえ食事をしても、泰麒にお相伴できる身分ではありません」

泰麒は首を傾げた。身分、という言葉は知っているが、納得するのが難しい言葉であったからだ。

「一緒にご飯を食べられないんですか？　寝坊しなくても？」

「さようです」

泰麒は困りきってテーブルを見つめた。

「……どうかなさいましたか？」

「ここではそうするのが、あたりまえなら仕方ないんですけど……」

「はい？」

泰麒はそばに控えた蓉可を見上げる。

「そういうの、ぼくは少し変な感じがするんです。……ええと」

首を捻って、言葉を探した。

「寝坊した罰で、一人でご飯を食べるのなら、我慢できるんですけど。一人じゃなくて、それなのに一人でご飯を食べるのは変な感じです。きっと一緒に食べたほうがおいしいと思う

んです」

まあ、と呟いて、蓉可は声を立てて笑った。心得たように頷いて、部屋の一方にある衝立の向こうに声を掛ける。どうやらその向こうにも部屋があるらしかった。

「――手を休めてこちらにいらっしゃいませ。泰麒が朝餉にお招きくださるそうです」

2

朝食のあと、蓉可は外を案内してくれた。

汕子の手を握って建物の外に出る。泰麒はそこで少しの間、きょとんとしていた。

建物にはまったく外壁がない。出入り口にも衝立が立ててあるだけ、扉も戸もなかった。三段ばかりの石段が小径に向かって下りていて、庭もなければ門もない。かろうじて石段の前は少しだけ広くなっていたが、戸口を出たすぐ前がもう奇岩の壁面というありさまだった。

奇岩は高く、仰向かなければ空が見えない。三方に伸びた小径は岩壁に挟まれて、道というより路地に見えた。ビルの谷間の細い路地に立てば、こんな気分がしたかもしれない。背後を振り返ると今出てきたばかりの建物だけが低くて、本当にビルの谷間にひっそりと隠された家のように見えた。

「……不思議なところですね」
泰麒がしみじみ呟くと、蓉可は笑う。
「さようでございますか？」
「こんなことを訊くのはとっても変なんですけど、ここはどこなんですか？」
蓉可は首を傾げた。
「ここは蓬山でございます」
「ええと、そうじゃなくて……」
泰麒は何とか自分の困惑を伝えようと、言葉を探す。
「うちの近所ではないと思うんです。うちからどれくらい離れたところなのかな、って。——ここは日本のどこかですか？　それとも外国なんでしょうか」
言葉は外国語ではないけれど、何もかもがとても変わっていて、日本のどこかとも思えない。
「それとも、ぼくはぜんぜん別の世界に来てしまったんでしょうか」
タンスを通り抜けたみたいにして。
蓉可は少し困ったように首を傾ける。
「……そうなのだと存じます」
「そうかあ……」

ひどく奇妙な気分がした。目の前にあるもの全部は現実でしかないように見えるのに、今まで思っていた現実とは違うものだなんて。

しみじみ考えていくと、「現実」とは何なのか、そもそも何が「現実」なのかさっぱり分からなくなってしまいそうなので、泰麒は息を一つ吐いて、それで考えるのをやめることにした。

「――ここには広い平らな場所はないの？」

「ございますよ。ご案内いたしましょうね」

言って歩きだしてから、蓉可は背後の建物に目を向けた。

「ここは露寒宮と申します。泰麒のお住まいに用意いたしました」

「ここがぼくの家なんですね」

「はい。もう少しここにお慣れになって、ほかによい宮がございましたら、そのようにおっしゃってくださいまし」

「引っ越してもかまわないの？」

蓉可はかろやかな声で笑う。

「かまいませんとも。泰麒は蓬廬宮の主、お好きなようにお使いになってよろしいのでございます」

泰麒は首を傾けた。細い小径を辿って、緩やかな上り道と隧道が交差する分岐点まで来て

いた。
「それが……よく分からないのですけど」
「はい？」
「蓬廬宮って、ここのことですよね？」
「さようでございますよ」
「どうしてぼくが主になるんですか？」
泰麒は心底困惑していたのだ。蓉可にしても汕子にしても、ほかの女仙にしても、泰麒よりはずっと年上なのだし、中でも玉葉には何かしら威厳のようなものがある。その女たちをさしおいて、自分が主だと言われるわけが分からなかったし、どう考えてみてもそれは不似合いなことだとしか思えなかった。
蓉可は少し困ったように微笑んだ。
「泰麒が麒麟でいらっしゃるからです」
「キリン、って何ですか？」
「昨日の、あの木からお生まれになるのが麒麟でございます」
ぱっと胸の中に明るいものが射した。
「じゃあ、ぼくのほかにも同じような生まれの子供がいるんですね」
「はい。いまは泰麒のほかに十一」

「ぼくを入れて十二人？」
「さようでございます。昨日お会いになった、廉台輔も麒麟でいらっしゃいますよ」
「腕輪の人？」
「さようでございます」
「昨日の人に、また会えるでしょうか」
蓉可は首を横に振った。
「廉台輔はもうお帰りになられておしまいです」
それはひどく惜しいことのように思われた。昨日、あんなに泣いて泣き寝入りしたりせずにいられたら、色々な話ができたかもしれないのに。
「ほかの人たちはどこにいるんですか？　会えるでしょうか？」
蓉可は笑った。
「もうみんなお国にお下りあそばしましたけれど、泰麒もお下りになれば、お会いになれますとも」
「下る？」
「王をお選びになって、蓬山をお下りになれば」
「王――。王様がいるんですか？」
「はい。泰麒のご主人が王でございますよ」

「ご主人？」
「麒麟は王を選び、王にお仕えするもの。それまで泰麒をお預かりするのが、蓬山の役目でございます」
——きっと、と泰麒は考える。
きっと自分は王様のところで働くことになるのだ。どの王様のところで働くのか、それを決めるまでここにいて、ひょっとしたら修行か何かをするのかもしれない。
展望が開けて、泰麒は昨日からずっと感じていた途方に暮れる気分が少し軽くなった気がした。
「でも、ぼくにそんなたいそうな仕事ができるかな」
まあ、と呟いて蓉可は声を上げて笑う。
「おできになりますとも。だって泰麒は麒麟ですから」
「キリンは王様のところで仕事をするものなの？」
「そうでございますよ」
「じゃあ、ほかのキリンも？」
頷いて、蓉可は指を折る。
「ここには国が十二、あります。それぞれ、王が一人で、十二人。麒麟も十二、一人の王に一人の麒麟、そういうきまりになっているのでございます」

「へえ……」
「ただし、いまは王が十一人しかおられません。北東の国、戴国の王様は十年も前に亡くなられて、次の王様が決まっていないのです」
「戴国のキリンは？」
蓉可は笑って、泰麒の顔を覗きこんだ。
「ここにいらっしゃいますでしょう？」
「――ぼく？」
「さようでございますよ。泰麒は戴国の麒麟、だから『泰麒』とお呼びするんです。王はこれから泰麒がお選びになる。誰を王にするか決めるために、麒麟はいるのですから」
泰麒は瞬きをした。
「そんな、大切なことをぼくが決めていいの？」
蓉可は深く頷いた。
「それは泰麒にしか、決められないことなのです。――さ、ここが桑園でございますよ」

3

泰麒が蓬山の生活に慣れるのには、いくらの時間もかからなかった。

奇妙な恰好、奇妙な生活習慣、野菜しか出ない食事。

不思議はたくさんあるが、そんなものに拘わるほど大人ではない。不快なことならばともかく、それらはいっさい特に不愉快とも思えなかったので、泰麒は苦もなくそれを受け入れていった。

一つだけうまく馴染むことができないことがあるとすれば、それは自分の姿形が変わったように思われることだった。ここにある鏡は家にあったそれほど明瞭には姿を映してくれないが、映りの悪いことを考慮に入れても、どうにも自分でない者のように思われてならない。

もともとしみじみ自分の顔を眺める習慣などありはしなかったので、どこがどう違ってしまったのか説明はできないが、鏡に映った自分は他人のように見えた。

どういう仕組みでかは分からないけれど、あの白い靄の満ちた道を通った時に、何かの変化が起こったようだった。

自分の置かれた立場は、いくらも経たずに呑みこんだ。女仙に寄ってたかって世話を焼かれること、適当な時間に起き、適当な時間に眠り、その間何をするでもなく蓬山を廻って暮らすこと、汕子や女仙にいろいろな質問をして、ここでの暮らしに必要な知識を貯えること、それが今自分に求められているすべてであること。

温かく——その実緊張して泰麒を見守る女仙たちも、すぐにその緊張を解いた。

「最初はどうなることかと思ったけれど」
茉莉花の上に広げて乾かした布を振るいながら女仙の一人が言う。扇がれて茉莉花の匂いが強くなった。
「なにしろ、十年も蓬山を離れていた麒麟の例など他にありゃしないんだから」
蓉可は同じように布を振るいながら、軽く彼女をねめつけた。
「何年離れていようと、麒麟は麒麟だもの。変わるはずがないでしょう」
「そりゃ、そうなんだけどね」
同じようにして振るった布を畳んでいた別の女仙が声を立てて笑う。畳んだ布は茉莉花の移り香でいい匂いがした。
「さすがに蓬莱育ちでは、奇妙なところがないじゃないが。——なぁに、嫌なふうに奇妙なわけじゃないから、構やしない」
蓉可は畳んだ布を積んだ手を腰に当てる。
「奇妙呼ばわりは聞き捨てなりません。そりゃあ、蓬山育ちの麒麟よりもあたしたちに気安いけれど、奇妙どころかありがたい話じゃありませんか」
周囲で衣を取り込む数人の女仙がどっと笑った。
「蓉可は本当に泰麒贔屓だ」
「泰麒贔屓で悪いんですか」

むきになる蓉可の周りを女仙は取り囲む。踊るように近づいて蓉可の足元に布を積んでは、はやしたてて離れていく。

それを見守っていた禎衛もまた、笑った。

「そんなに蓉可を苛めるものじゃない」

本来、蓬山の女仙は陽気だった。それでも、麒麟の世話をするためにいるのだから、肝心の麒麟がいなければ何とはなしに意気消沈して過ごす。ましてや、つい先だってまでのように、麒麟の行方が分からずにいれば、さしもの女仙も悄れようというものだ。

麒麟は常にいるとは限らない。むしろ蓬山に麒麟のいない時間のほうが長かった。麒麟がいなければ水汲みも洗濯も機織りも全部が全部自分たちのため、張り合いのないこと夥しい。——だが、今は違う。今は麒麟がいる。

それでもう、どの女仙もすっかり浮かれてしまっている。それでなくとも女仙にとって麒麟は愛しい。どの麒麟も愛しいことにかわりはないが、どうしたって現在いる麒麟が一番愛しい気がしてしまう。実を言えば女仙の誰もが蓉可を笑えない。五十人近くいる女仙の全部が、泰麒を愛しくて愛しくてたまらないのだ。

それでも蓉可を寄ってたかって「泰麒贔屓」と呼ぶのは、他の女仙より泰麒に馴染みの深い年若の女仙を少しばかり妬んでの振る舞いにすぎない。

「蓉可！」

子供特有の澄んだ声がした。

女仙がみんな手を止めて、声のしたほうを見る。細い小径を抜けて、泰麒が広場に駆けこんできたところだった。

「隠して、隠して」

泰麒は息を弾ませて言う。蓉可に飛びついて、背後に隠れた。

「泰麒も蓉可贔屓だ」

「ほんに」

女仙たちは笑って言って、持っていた布を積みあげる代わりに、泰麒に被せる。茉莉花の茂みと蓉可の間に隠れた小さな身体は、あっという間に布の山に隠されてしまった。

女仙たちがくすくすと笑っていると、傾いた陽射しがさっと遮られた。奇岩の上に白い姿が見えて女怪が広場に下りてくる。それに向かって全員が東の小径を指した。

「あっちだよ、汕子」

「泰麒なら、あちらへ向かわれたよ」

「あたしを転ばす勢いでねえ」

口々に女仙が言ったが、汕子は決して泰麒を見失ったりはしないのだ。まっすぐ蓉可に近づいて、背後の布の山を持ち上げてしまう。首を竦めるようにして隠れていた泰麒が、顔を上げて大きく息をついた。

「……やっぱり見つかった」

汕子の前脚を抱くようにして、ぺたんと座りこんでしまう。まだ息が弾んでいた。

汕子はその頭を一つ撫でて、腕に抱えた衣を女仙に渡す。女仙たちが笑った。

「汕子の目をくらまそうなんて、無理な話だ」

「そうみたい」

笑って言った頬は紅潮している。汕子の前脚に身体を凭せかけて、袍の襟を緩める子供を誰もが笑って見守った。今まで蓬山にいたどの麒麟よりも、泰麒は見た目にも愛らしい気がするのは、全員が泰麒贔屓のせいかもしれない。

蓉可も笑って泰麒の髪を撫でる。戻ってきた時よりも伸びた髪が、汗で額に張りついていた。やんわりと額にかかった髪を掻き上げてやる。

麒麟の髪は普通は金の色をしている。正確には髪でなく鬣なのだが、泰麒のそれは鋼の色をしていた。普通の麒麟でない証だが、それが特別尊いことのように思われてならない。

「水を浴びておいでなさい。すぐに夕餉ですよ」

麒麟は女仙より遥かに高位の生き物だった。それでも世話をすれば自分の子供のような気がするから、自然口調はくだけてしまう。女仙の長である碧霞玄君でさえそうなのだから、彼女たちを咎める者がいるはずもなかった。

「幸い、着替えはここにいくらでもある。ここが済んだらお迎えに参じましょう」

「うん」
頷いて泰麒は立ち上がる。
「汕子、行こう」
泰麒の手を引いて歩いていく汕子を、女仙たちは目を細めて見送る。
「一番の泰麒贔屓は、汕子だね」
「まったくだ」
頷き合ったが、悔しいわけではない。女仙とは違い、汕子は泰麒だけのものだ。それを抜きにしても、怒る気にはなれない。彼女たちは運がいい。ちょうど夕餉の前に泰麒に会えた。食事の直前に会えた者が、泰麒の食事に相伴する。それが最近できた蓬山での新しい不文律だったので。

4

乾いた衣を畳み、まだ陽射しの匂いと茉莉花の匂いのする泰麒の一揃いだけを別にして、蓉可たちは川へ向かった。
露茜宮に近い淵に向かう小径を曲がったとたんに、澄んだ笑い声が聞こえてきた。
淵では泰麒が汕子の尾を追って、潜ったり浮かんだりを繰り返している。高く掲げた尾を

捕まえそこねて水に倒れこんだ泰麒は、水面に顔を出すなり、蓉可たちに気づいて手を振った。

「お迎えに参じましたよ」

「ありがとう」

女仙の一人が岸に布を広げる。水から上がった泰麒がその上に立つと、別の女仙が腕に広げた布で小さな身体を包みこんだ。

「自分でするよ」

「泰麒は背中を濡れたままにするから、駄目です」

言い放って彼女は白い身体から水滴を拭っていく。泰麒は自分のことを他人にしてもらうのを済まながるが、要は誰もが泰麒に触れていたくて堪らない。

さらに別の女仙が一揃いを着せてやって、蓉可が髪を拭いてやった。

「もう、だいじょうぶ」

「まだ髪から滴が落ちてますよ」

泰麒は布の間からこぼれおちた自分の髪を摘んだ。それは黒とも銀ともつかない奇妙な色に変色してしまっている。

「髪が長すぎない？」

「まだ短いくらいです」

泰麒はきょとんと蓉可を見上げる。
「伸ばさないと、いけないの？　女の子みたいに？」
「伸びるのが止まるまで、伸ばすのが普通なんだそうですよ。揃えるぐらいはしますけどね」
「切っちゃ、だめなの？」
「転変したときにみっともないお姿でいたいのなら、お好きにどうぞ」
「……転変？」
蓉可はあらかた水気を切った髪を梳ってやる。
「泰麒は麒麟ですもの。麒麟の形になることができるんですよ」
「キリンの形、って。それ、動物のキリンのこと？」
「そうですよ」
泰麒は考えこんでしまった。
自分は実はキリンなのだとは聞いていたが、「キリン」とは単に木の実から生まれた人間のことだと思っていた。蓉可の今の言葉からすると、どうもそればかりではないらしい。
「ぼくは、実は動物なの？」
これはちょっと困惑する事態だった。人だって動物の一種なのだけど、少しばかり意味が違う。

「そうですとも」
「いつか会った、廉台輔も？」
「もちろんです」
泰麒はさらに困惑してしまった。
狼男のようにキリンに変身するのかしら。狼になるのはそんなに変ではない気がするけれど、キリンになってあんなふうに首が伸びたりするのは変な気分がするに違いない。
――この時点で、泰麒は麒麟という生き物をまだ勘違いしたままだった。
微笑って泰麒と女仙たちを見守っていた禎衛は、すっかり困った顔をしている泰麒に気づいて、ああ、と呟いた。
「泰麒は転変したことがないんで、よく分からないんですね。――泰麒の髪は、あたしたちの髪とは違う。それは鬣ですから」
泰麒は頷いた。たしかにキリンには鬣がある。
禎衛は泰麒を手招きして、額の中央、生え際に近いあたりにそっと触れる。何かひどく嫌な気が、落ち着かないような不安なような感じがした。
「――ここにほんの僅か、盛り上がったところがある」
言われて泰麒は、そこを指で探ってみた。確かに、撫でると分かる程度の小さな盛り上がりがあった。

「これが角。角は麒麟にとって、特別大事な場所だから大切にしないといけません。いま、嫌な感じがなさったろう？　触られるのが嫌な気が」
「……ちょっとだけ」
「無理をなさることはないんですよ。麒麟は角に触れられるのが嫌いな生き物なんですから。大きくなれば、もっと嫌になります。絶対に触らせないようになる。たとえそれが汕子でもね」
——そういえば、と泰麒は思う。自分はそもそも額を撫でられるのが好きではなかった。それが母親でも、何となく逃げたい気分がしたものだ。
「じゃあ、やっぱりぼくはキリンなんだ」
「もちろんです」
蓉可は呆れたように口を挟んだ。
「転変すれば、はっきり分かりますよ、きっと」
「転変、って、どうやってするの？」
泰麒に問われて、蓉可は首を傾げた。
「そうですねぇ。生まれたときからずっと蓬山で育っていれば、何となく分かるんでしょうけど。生まれたときから、ある程度大きくなるまで、麒麟は麒麟の姿をしてますから。——蓬萊じゃ、麒麟でも生まれたときから人の姿をしているんですって？」

蓉可も蓬萊の事情をよく知るわけではないが、過去に蓬萊から帰ってきた麒麟の例があるので、噂話でとはいえまったく知らないわけでもない。

「キリンになるのって……嫌な感じがしないのかなぁ」

「転変を嫌がる麒麟はいませんから、べつに嫌なことじゃないんだと思いますよ」

「変じゃないのかな」

「少しも変じゃありませんとも」

言ってから蓉可は泰麒の髪を指で梳いた。

「泰麒はね、普通の麒麟とは少し違います。普通の麒麟は、廉台輔のように金の鬣をしているものですから。泰麒は黒麒麟なんですって。黒麒麟は珍しいんだそうですよ。……早く蓉可に見せてくださいまし。鬣の色がこんなに綺麗なのだから、きっとお綺麗な姿なのでしょうね」

「でも、どうやってなるのか、想像もつかない」

「でしょうね……」

蓉可は息をつく。

「あたしにも、想像もつきません。あたしは麒麟じゃないし、だから転変したことなんてないんですもの。——もしも機会があれば、玄君にお訊きしておきましょうね」

「うん……」

まだどこか釈然としない様子で頷く泰麒を見つめながら、禎衛は内心で眉を顰めた。十年もの長い間、人として暮らしてきた泰麒が果たして転変できるのだろうか。転変しない麒麟はいないが、もしもその最初の例になれば、それはかなり不憫な話だ。

玉葉に訊けば分かるのだろうが、肝心の玉葉には会いたくて会えるものではない。しかも、泰麒にはもうあまり時間がなかった。

禎衛は何事かを言って笑い合う泰麒と蓉可から視線を逸らし、不安な気分で暮れ始めた空を見上げた。

幸い春分は過ぎたが、夏至には確実に人が昇ってくる。

――転変できない不完全な麒麟が、王を選ぶことができるのだろうか。

四章

1

泰麒はとぼとぼと小径を歩いていた。目的があって歩いているわけではないし、だから道の様子など見てはいなかったが、汕子がいれば道に迷うことはありえない。そもそも、泰麒だって自分が住む露茜宮の周辺以外は、まったく道など分かりはしないのだ。

あてもなく歩いているうちに、ふいに小径の先に行く手を遮る門が見えた。扉はぴったり閉ざされて、完全に道を遮断している。

これが蓬廬宮の果てだった。露茜宮からここまでは、まっすぐに来ても相当の時間がかかるはずだが、それでは驚くぐらい長い間、自分は物思いに沈んでいたらしい。

「……」

泰麒は溜息をついた。門には内側に閂があるばかり、開けようと思えばたやすく開けら

れるが、門の外には決して出てはならないと、そう女仙たちに教えられていた。

そのまま引き返す気にもなれず、泰麒は背後を振り返る。無言で後をついてきていた汕子に向かって手を伸ばした。

「汕子、上に連れていって」

汕子は頷いて、泰麒を抱き上げる。普通の女ならそれが困難なほど泰麒はもう大きいが、蓬山に帰って以来見かけほどの重さはない。仙骨とかいうものがあって、泰麒はうんと軽いのだ。それで汕子は苦もなく泰麒を抱き上げて、軽く岩壁を蹴ると奇岩の上に向かって駆け上がった。

岩の上から見下ろした蓬廬宮は迷路そのものだった。

ところどころに碧く輝いて見えるのは数々の宮の屋根、迷路の奥には白い木の枝が陽射しを受けて輝いて見える。

泰麒は汕子に抱き上げられたまま、しばらくその方角を眺めた。

上から見た蓬廬宮は扇状をしている。もっとも奥の東の高台に捨身木があって、その先はない。切り立った断崖で、どれほどあるか分からない段差の下には、人が歩くことさえ困難なほど複雑な奇岩地帯が果てもなく広がっているのだ。

その高台を突端に、迷宮はごく緩やかに下りながらその幅を広げていく。無数にある枝道は堂々廻りを繰り返しながら、やがて一つの小径に収束し、その道が唐突に門で区切られ

て、それが迷宮の終わりなのだった。

迷宮の北は険しい峰だった。絶壁を作り、尖塔を作りして遥かな高みへ駆け昇る山は、汕子といえども登攀が難しい。

東を断崖に北を絶壁に守られて、蓬廬宮を訪ねるには門を抜け、複雑極まりない迷路を正しく抜けるしかないようになっている。

――そして、と泰麒は汕子の腕を下りて奇岩の頂上に立ち、背後を振り返った。

迷宮の外、南と西にはさらに下りながら、広大な迷路が続いていた。

外の迷路と内の迷路は複雑に入り組んで、こうして上から見下ろしていても、どこまでが内でどこからが外なのか見分けることができなかった。

外の迷路は内の迷路に比べて、遥かに読み解くことが易しい。道幅も広く、あちこちに点在する広場も桁違いに広い。あてずっぽうに歩いても太陽の位置さえ把握していれば、ここまで来るのはそう難しいことではないだろう。

そう思いながら見渡して、泰麒はかなり離れたところにある奇岩の麓に、翠の釉薬の輝きを見つけた。

「汕子、あれはなに？」

指さすと、汕子もまた真円の目をそちらへ向ける。

「甫渡宮……」

「門の外にも宮があるの？」
汕子は頷く。
「離宮でございます」
「……ふうん」
泰麒は奇岩の上に腰を下ろした。
しばらく緑の迷宮に見入る。奇岩の上には疾い風が吹いていた。見渡す限り、海などなさそうなのに、潮の匂いがした。
「……どう、なさいました？」
しばらく風に吹かれていたら、汕子がそっと問うてきた。汕子がこんなふうに話しかけてくることは稀だから、よほど考えこんでいたのだろう。
泰麒はふと、外の迷路を辿っていた視線を上げて汕子を見た。
「汕子は転変してそういう姿をしているの？　それとも、最初からそういう姿なの？」
汕子は泰麒の頭をやんわりと撫でる。
「女怪は転変いたしません。転変できるのは、その力が尋常の力ではないからです」
「……ふうん」
「姿を変えることは、難しいことなのです。妖魔の中にも転化するものがおりますが、そういった妖魔は王の手にも余るほど魔力甚大なもの」

「妖魔？」
「妖の技を持ち、天の秩序に従わぬものを妖魔と呼びます」
「女怪も妖魔？」
汕子は首を振った。
「女怪は人と妖獣のちょうど間に位置するもの。人妖とも妖人とも申します。蓬山で生まれた女だけを特別に女怪と呼びますけれど」
「じゃあ……キリンは妖獣？」
汕子は泰麒にだけそうと知れる表情で笑った。
「妖の技を持つ獣なのは確かでございますが。――いいえ、麒麟を妖獣とは呼びません。麒麟は神獣と申しあげるのですよ」
「どうして？」
「この世に麒麟より尊い方は神と王だけ。……もっと正しく申しあげれば、この世に泰麒よりも身分の高いお方は、泰王と西王母さま、天帝しかおられないのでございます」
「……よく、分からない」
汕子は何度も泰麒の髪を梳く。
「では、こう覚えていらっしゃいませ。西王母も天帝も、下々には交わらぬお方。お会いすることもありますまい。……ですから、泰麒よりも尊いお方は泰王しかおられないのだと」

「その他の人は？　玉葉さまは、ぼくよりずっと偉い人ではないの？」
「玉葉、とお名前をお呼びになれるのは、身分が等しいからでございます。さま、とお呼びするのは、そのほうが礼儀にかなっているからです」
「難しいんだね」
「難しゅうございますか？」
「うん」
泰麒は足元の風景を見下ろす。しばらく風を吸ってから、汕子に訊いた。
「どうすれば……転変できるようになるだろう」
汕子は泰麒の少し憂鬱そうな横顔に改めて目をやった。
「それは泰麒が生まれながらにお持ちの力。……必要になれば、必ず思い出されます」
「そうかなあ……」
泰麒は目を伏せる。
このところ女仙が、黒麒麟を見せてくりゃれと、はやすことが多い。泰麒にも女仙たちがいっぱいの愛情を自分に注いでくれていることが分かるゆえに、できることなら転変して彼女たちを喜ばせてやりたいと思う。それでも、その方策が皆目見当がつかないのだった。
「お焦りになりませんよう。……泰麒はただ、のびのびとお暮らしになればよろしいのでございますよ」

「……うん……」

汕子の腕に頭を凭せかけたときだった。

甫渡宮のほうの迷路に、二人ばかりの人影が見えた。

「……汕子。人がいる」

汕子もまたそちらを見やって頷いた。

「進香の女仙でございましょう。甫渡宮の祭壇に花と香を持っていったのです」

「女仙と一緒に帰ろうか、汕子」

奇岩の上から下の小径まで、泰麒には下りることさえできない。立ち上がった汕子の腕に抱かれようとした刹那、汕子がキッと顔を上げた。

「……どうしたの？」

泰麒が問うた瞬間だった。汕子の姿が細い亀裂に吸いこまれるようにして消えた。

「汕子？」

「そこをお動きになりませんよう」

声だけが——それもひどく緊張した声が——どこともしれぬ間近から聞こえた。

泰麒は岩の上で身体を硬くする。こんなことは初めてだった。汕子が険しい顔をするのも、あんな声を出すのも、不思議な力を現すのも。何か——蓬山に来て初めて、何かが起こったのだと想像がついた。

周囲に視線を配りながら、泰麒は我知らず息を潜める。細く尖った岩にしがみつきながら、消えた汕子がどこかに見えないものかと、伸ばした首を何かが掠めた。

「……え」

何かが顔の横を掠めて飛んできたのだとは分かった。

次いで、岩に絡った両手に何かが巻きついたのも感じた。ふいに強い力で両手を引っぱられ、奇岩の頂点から外へ向かって身体が傾くのを感じた。

僅かの一瞬に泰麒の目は捉えた。自分の両手に巻きついた細い鎖と、その先についた武骨な錘。

身体が宙に投げ出されてゆく。

――何者かによって、岩から引き摺り落とされたのだ。

2

「捕まえたぞ！」

高らかに、野太い声が響いて、泰麒はきょとんと目を開いた。

岩の上から転落して、出てはならないと言われていた外に出てしまったことは、一瞬のうちに思い出した。なぜ転落したのかを、もう一度反芻しようとしたときに、太い押し殺した

叫びが聞こえた。寝転んだまま視線を向けると、薄い色の空に点々と赤い飛沫が散るのが見えた。

（……血みたい）

思った瞬間、すっと泰麒の体温が下がった。一瞬のうちに身体が凍りついた。

蓬山に来てからは、思い出す機会のなかった自分の性癖を思い出した。

——駄目なのだ、どうしても。

自分が怪我をしてもそんなには感じないのに、他人が怪我をして血を流しているのを見ると、怖くて怖くて息が止まりそうになる。

目を閉じたかったが、瞼までが凍りついていてできなかった。息をすることさえ忘れたような自分の体の中で、鼓動だけが限界まで駆け上がる。焦点を失った目の奥に、赤い飛沫が散る一瞬が再生されつづけた。

——岩の上に立っていた。

何かが手に巻きついて、引き摺り落とされた。

何かの感触は今も両手にある。針金みたいに細い鎖だ。

岩から落ちたのだということは分かる。

落ちて、自分はいま岩だらけの地面の上にひどく不自然な恰好で——背中の下の岩から仰向けにのけぞるようにして——横たわっている。

あちこちに岩棚や出っ張りのあるあの岩から転げ落ちて、ましてやあの高さから転落して無傷で済むはずがないが、自分が怪我をしているのか、それとも奇蹟的に軽い怪我で済んだのか、泰麒自身にも分からなかった。

ただ鼓動だけが速くて、手足の先が凍えるほど冷たいのだけを感じる。なのに頭は熱をもったようにぼうっとしていて、そこに鮮やかな血の色が染みついて消えない。あまりにその色が鮮明で、いま自分が見ているものが何なのか——目の前で何かが起こっていることは確かなのに——、それを読み解くことができなかった。

頭を一つ振れば治るようにも思えるのに、瞬きすることさえできなかった。身動きできないのは、怪我をしているせいだろうか。さっき見た、血の色のせいだろうか。——一体、何が起こったのだろう。

「この、化け物が！」

野太い叫びが聞こえて、泰麒はようやく目が捉えているものが何なのか理解した。

男、だった。

大きな男で、その片手に幅の広い刀を持っている。

そして、その刀が振りかざされる先にいるのが汕子だった。

「人妖ごときに倒される俺か！　さっさと黄海に帰るがいい！」

刀が上がり、恐ろしい勢いで振り落とされる。

（――汕子！）

咄嗟に上げた泰麒の悲鳴は声にならなかった。

弧を描いた白刃が汕子を掠めて落ちる。汕子の手が伸びて、男の喉笛を掻き毟った。真っ白な指が赤いもので濡れる。一拍後れて、切っ先が掠めた汕子の腕に赤いものが噴き出した。

（――やめて！）

反射的に瞼が落ちた。そのまま二度と開かぬように、泰麒は固く目を閉じた。もう自分が息をしているのか、鼓動が打っているのかさえ分からなかった。

そのまま目を瞑っていたかったのに、突然両手を激しく引かれて、泰麒は驚きのあまり目を開けずにおれなかった。何が起こっているのか把握する前に、辛うじて乗っていた岩の上から転がり落ちる。

背中をしたたかに打って喘ぐ間もなく腕を引かれて引き摺り起こされて、改めて目を開けると宙に掲げられた自分の腕が見えた。細い鎖が巻きついて、その鎖は男の刀を持っていないほうの腕に続いている。男が身動きするたびに肩と肘が抜かれるように痛んで、引き摺られた下肢が岩の表面にぶつかり、掻かれた。

「なんだ、お前」

男は片手で汕子に向かいながら、泰麒を見た。憤懣を露わにした表情だった。

「その髪はなんだ」
責めるように言われても、泰麒には返答などできなかった。
男は跳びかかってきた汕子を無造作に刀で払って、足蹴にする。また汕子の白い身体に赤いものがこぼれた。
男は再び横目で泰麒を見る。いかつい顔を歪ませて怒鳴った。
「豎子、お前、麒麟ではないのか！」
――キリン？　もちろん、キリンだ。そう誰もが言う。
――そう答えていいのか。
――それよりも、汕子が。
――それよりも。
（ああ……あんなに血が……）
男が身動きするたびに、上体が腕ごと引き摺られた。酷い気分がした。今にも内側から壊れてしまいそうな気が。
「ええい、てっきり麒麟だと思うたのに！　ただの餓鬼とは口惜しい。おまけに人妖までがちょろちょろと！」
男に向かった汕子の腕を刀の煌きが打ち落とす。また赤い飛沫が散った。跳び退った汕子に向かって踏みだした男に引き摺られ、岩の角が泰麒の胸を刳った。

「人妖の分際で、どうやって蓬山に入った！　いま成敗してくれるわ！」
振り降ろされた刀は汕子を掠めて岩を噛む。
（……汕子）
白い身体はすでに赤く斑になっていた。
（汕子、逃げて……！）
――せめてそう、叫べたら。

3

「――おやめなさいませ！」
突然、悲鳴のように高い声が聞こえて、泰麒は目を見開いた。
「なんと――いうことを！」
「泰麒！」
駆け寄ってくる足音が聞こえた。視野に真っ青になった女仙の顔が飛びこんできた。
「こんな――酷い――泰麒！」
女仙が駆け寄ってきて、両手が伸ばされる。その途端に涙がこぼれた。温かな手に抱き起こされ、いい匂いのする腕に抱きしめられて、このままもう死んでしまいたい気分がした。

「なんという無体をなさる！　――汕子、およし！」
「お前たちの飼い犬か！　さっさと退がらせろ！」
「退がるのはそちじゃ、無礼者！」
一喝する声に泰麒は顔を上げた。
それは禎衛の声に聞こえたが、それほど激しい禎衛の声を初めて聞いた。男もきょとんと禎衛を見ていた。汕子は壮絶な顔でその男を睨んでいる。
「――汕子、およし。血で汚れては、泰麒のおそばに上げられません。それが嫌だったら、気を鎮めなさい」
汕子に言った禎衛は、凛と首を上げて男を見据える。
「この蓬山で、畏れ多くも泰麒に対し、なにゆえに非道の振る舞いか」
「泰麒？」
男はもう一人の女仙にしがみついた子供を見た。
「それではやはり、その餓鬼――いや、その御子が泰麒か」
「いかにも。古来より蓬山に小さき人は蓬山公のみ。――さて、その蓬山公に対し、かように無礼非道な振る舞いをなされた理由をお訊きいたしましょう」
男は満面に笑みを浮かべた。
「泰麒！　やはり！　――俺が捕まえた！」

足を踏み出した男に向かって、禎衛は身構えるように手を掲げる。
「返答は。――おそばに寄るは、かないません。まず理由を申しなさい」
「俺が捕まえたんだ！　この、俺が」
「返答いたせ。それとも、この蓬山の女仙の、仙たる証をその目で見たいか」
男は愛想のように笑ってみせた。
「俺は戴国馬侯が司寇大夫、酆孫と申す。蓬山に泰麒帰還との噂を聞いて参じた」
「甫渡宮では、酆孫なる人物の昇山を許しておらぬ」
「おお……それは申し訳ないことをした。気が逸って、一目蓬廬宮を見ようと礼を欠いたはお詫び申しあげる。だが――俺が捕らえた」
「捕らえたとは、いかなる意味か」
男は目を丸くする。
「俺が、泰麒を捕らえたのだ。礼儀を欠き、蓬山におわす方々を無視した無調法はお詫びするが、俺に泰麒を賜りたい」
言って男は破顔した。
「俺が、泰王だ」
泰麒は、自分を抱いた女仙が震えるのを感じた。その震えが伝染したように、立ちはだかった禎衛も肩を震わせる。

「この――痴れ者が！」

あまりに激しい恫喝に、男が半歩退がる。

「戴国馬州はかくも愚かな者に、司寇大夫の位をくれてやってか！」

男はさらに半歩退がった。

「泰麒を何と心得る。畏れ多くも蓬山公を、黄海で生け捕る妖獣と同じく思うたか。痴れたことをぬかすでない！　泰王だと？　片腹痛いわ。天のお罰を被って、雷に打たれぬうちに、早々に立ち去るがよい！」

「しかし――」

「黙りゃ！　それ以上、下賤の口を開こうものなら、天に成り代わって妾がそちを八つ裂きにするが、構わぬか」

男は言葉もなく、口を開き、閉じしている。

泰麒を抱いた女仙が立ち上がった。丁寧に腕に絡んだ鎖を解いてくれる。

鎖の絡んでいたあたりを撫で、頬を撫でて髪を梳き、いまにも泣きそうな顔で泰麒の顔を覗きこんだ。

「おいたわしいこと。さぞ、恐ろしゅうございましたでしょう。……いま、宮へお連れいたしましょうね」

「……汕子が」

傍らに悄然と立っている汕子を見ると、女仙は首を横に振った。

「今はいけません。汕子は捨て置いてくださいまし。……さ」

今一つ事態は呑みこめないが、少なくとも汕子が自分を守るために傷だらけになったことは分かる。

怪我の状態はひどくないのか、礼を言って具合をたずね、手当てをしてやりたいのに、血だらけになった姿を見ているだけで心臓を鷲摑みにされる気がする。汕子のほうから濃厚な血の臭気がして、どうしても竦み、そばに寄ることができなかった。

後ろ髪を引かれる思いで、抱き上げられるに任せた。身体のどこもここもが痛んで、一歩揺られるごとに泣きたかった。

蓉可に会ったのは、門を潜って少しのところだった。

駆けつけた女仙たちは泰麒の姿を見て悲鳴を上げた。泰麒を抱いた女仙から事情を聞き、半数ほどが門の外に駆け去っていく。

「なんて……下郎……！」

蓉可は吐き捨てるように言って、門のほうを睨む。すぐに憂いを一杯に浮かべた表情で泰麒に向かって手を伸ばした。

「おかわいそうに。怖かったでしょう。大事ございませんか」

「……汕子が」
心得たふうに、蓉可は頷く。
「汕子は大事ありませんとも。女怪の傷は深手に見えてもすぐに治ります。それより泰麒にお怪我は」
「分からない」
「とにかく、宮へ帰りましょうね。……汕子は汚れを落としてから、宮へ戻ってきます。心配はありませんからね」
ようやく泰麒は頷いた。
「そんなお顔をなさらないで。仕方ないんですよ。麒麟は血が嫌いな生き物です。血の臭いを嗅いだだけで、病気になる麒麟もいるんですから」
「そう……なの？　他のキリンもこうなの？」
「そうですよ。ですから、泰麒がそんなにお心を痛めることはないんです。汕子が帰ってきたら、手当てをしてあげましょうねえ」
「……うん」
蓉可に向かって手を伸ばすと、蓉可が抱き上げてくれた。
そこから露茜宮までの道を、集まった女仙たちに代わる替わる抱かれて戻った。

4

露茜宮の奥の寝室で、蓉可は大盥に張った薬湯に小さな麒麟を沈めた。
身体中を検分するようにして、丁寧に身体を洗ってやりながら、泰麒から事情を聞いた。
聞きながら心中で何度も、痴れ者が、と悪態をこぼす。
「……何が起こったんだと、思う？」
泰麒には実を言えば、よく理解ができなかったのだ。
首を傾げて不安そうに見上げてくる泰麒に、蓉可は微笑んでみせた。
「あたしが迂闊でした。春分は過ぎたので油断してました。……お許しくださいね」
「蓉可のせいじゃない」
「いいえ。これはちゃんとお話ししていなかったあたしの落ち度です。……本当に大したお怪我がなくてよかった。きっと汕子が岩から落ちた泰麒を、ちゃんとお守りしたんでしょう。帰ったら労ってあげましょうね」
「……うん」
「そして、約束してくださいまし。二度と、お一人で——汕子がいても、女仙のいないときに、外に出てはいけません。いえ、どうぞ、外に近づかないとお約束くださいまし」

「門のほうには行かない」
泰麒が言うと、蓉可は頷く。布を両手に広げたので、湯から上がってその中にくるまれた。
蓉可は泰麒をそのまま抱き上げて、寝室の奥の牀榻に連れていった。布団の上に下ろして、そっと小さな身体を拭いてやる。
「……麒麟は王を選びます」
「どうやって？　王様は王様の子供がなるんじゃないの？」
「いいえ。王は麒麟が選んで王にするんですよ」
「……よく、分からない」
「あたしにもよく分からないんです。麒麟ではありませんからね。——ただ、こういうことです。王を選ぶのは天帝です。天の一番偉い方が、いろんな人の人柄を比べて、一番王に相応しい人を決めるんです」
「……ふうん」
「天帝はそれを麒麟に伝えます。……べつに天帝が耳打ちしてくださるわけではないんですよ。ただ、麒麟は王になるべき人に会うと分かるんです。天啓が下りますから」
「天啓、ってどういうもの？」
「それは、麒麟でなければ分かりません。麒麟なら必ず分かります。うんと小さな麒麟で

も、ちゃんと王は選びますから」
「……うん」
「これから先、蓬山には自分こそが王に相応しいと思う人々が昇ってきます。泰麒にお会いして、泰麒に選んでもらうために」
「今日の……あの人みたいに？」
蓉可は頷いた。泰麒の髪を拭いた布を置いて、代わりに下着を着せかけてやる。
「そうです。たくさんの人が来ますよ。これから……そうですね、夏至を過ぎると」
「どうして、夏至？」
「蓬山は黄海の中央にあるんです。普通、黄海に人は出入りできません。ただ、門が四つあって、四門のどれかを潜れば黄海に入れます。その四門が、春分と秋分、夏至と冬至の日に一つずつしか開かないんです」
四門の開く日を安闔日という。それ以外には、それぞれの門は固く守護されていた。
「一日だけ？」
「一日だけです。午から翌日の午まで。――泰麒がお戻りになって、いくらもせずに春分でしたから、昇山する者は間に合わなかったのだろうと思ってました。それで油断をしていたあたしたちが迂闊でした。どうぞお許しくださいましね」
「……ううん」

「その男はぎりぎりで、間に合ったんでしょう。本格的に人が昇ってくるのは夏至を過ぎてからになりましょう」
「……ふうん」
「四門からここまでは、どんなに早くても半月はかかりますから、一度入ると次に門が開く日までは出られない。それで蓬山を目指して集まった者たちは甫渡宮の周りに天幕を張って、帰るまでの日を潰します。黄海には妖魔や妖獣がいますけど、蓬山には入れないので安全ですから。それはたくさんの人でね、小さな町ができるくらいなんですよ」
「そんなにたくさん？　ぼく、本当に分かるんだろうか」
「それは心配におよびません。必ず天啓が下りますから、分かります。天啓がなければ、どんなに立派な人でも、その人は王になるべき人じゃないんです」
「……うん」
「ただ、中には今日の男のように何か勘違いしている馬鹿者もいるんです。麒麟を捕まえた者が王だとか、とにかく麒麟に跪かせればいいのだとか、間違ったことを信じている乱暴者がね」
「それで、蓬廬宮は迷路の奥にあるの？」
「そうだと思いますよ。実際、麒麟が生まれたと聞くと、麒麟を攫いに忍びこんでこようとする、たわけ者もいるくらいですから」

「……ふうん」
「その時が来れば、ちゃんとあたしたちが外にお連れします。だから、それまでは一人で外においでにならないでください。たとえ中にいても、充分に気をつけないといけません」
「……分かった」
蓉可は笑って、泰麒の髪を撫でる。
「天啓が下ると、麒麟は王の前に平伏します。王以外の者には絶対に平伏したりしない生き物ですけどね。——天帝や西王母の廟でも、麒麟だけは平伏しなくてもいい決まりになっているぐらいですから」
「へえ……」
「そうして、決してそばを離れない、絶対に命令には逆らわないという誓約を立てます。御前を離れず、勅命に背かず、忠誠を誓うと誓約する、と」
「うん」
「王が、許すと言ってくださったら、王の足に額を当てる。——角を当てるんです。それでその人は王になります。泰麒が選んだ方なら、泰王とお呼びします。戴国の王をそうお呼びするんです。泰麒はそれ以後、泰台輔、と呼ばれる」
「ややこしいんだね」
心許無げにした泰麒に、蓉可は微笑む。

「そうですか？　――王を選ぶと、蓬山のもっと上へ昇ります。上に西王母の廟があるんです。泰麒はそこへ王をお連れする」
「どうやって？　汕子でも昇れないのに」
蓉可はさらに笑った。
「その時になれば、勝手に道が開けます。廟に昇って天勅を受けて、そうして戴国へお下りになる。――天勅はどんなものだと、お訊きになってはいけませんよ。それを知っているのは麒麟と王だけなんですから」
「はい」
「瑞雲と言って、綺麗な雲が蓬山から戴国までかかります。雲に乗って、戴国へお下りになるんですよ」
「……それで？」
「それで？」
蓉可は泰麒を見返した。子供は不安そうな表情を浮かべている。
「それから、どうなるの？　ひょっとして、ぼくは戴国で暮らすの？」
「もちろん、そうです」
「じゃあ、それきり蓉可には会えないの？」
泰麒は泣きそうな表情をした。

「汕子にも？　禎衛にも、他の女仙たちにも？」
まあ、と呟いて、蓉可は布団の上に座った泰麒を抱きしめる。
「そうですね。……お会いすることはないやもしれません。でもね、汕子はおそばを離れませんから。ずっと泰麒と一緒です」
「王を選ばないでいることはできないの？」
「王を選ぶことが、麒麟の大事なお役目なんですよ」
細い腕で抱き返してきた子供の背中を蓉可は撫でる。
「立派な麒麟になって、立派な王をお選びくださいまし。あたしたちは、蓬山から泰麒がどんなふうにお暮らしだか、ちゃんと見守っておりますから」
蓬山は麒麟を育てる場所だから、旅立った麒麟は帰ってこないほうがいい。女仙たちの両手はいつでも、新たに生まれ落ちた麒麟のためにだけあるのだから。——だがそれは、今の泰麒が知る必要などないことだ。
「泰麒が立派にお役目を果たしてくださることが、あたしたち女仙のたった一つの願いです」
泰麒は頷いた。
——頷こうとしているように、思われた。

5

やがて、暦の上では夏が近づき始めた。

暦の上で、というのは、蓬山にはそもそも気候の変化がないからである。

翻せば、夏至が近づく。夏至には黄海の南西にある令坤門が開くのだ。

「泰麒、お髪を結えましょうか」

禎衛は声を掛けた。川底の小石を拾おうとして、水面に髪を落とし、何度も煩そうに掻き上げる泰麒を目撃したからだ。

「うん」

泰麒は言って、川端の石に腰を下ろした。禎衛は帯についた飾り紐を解いて、それで鋼色の髪を結んでやる。切り揃えながら伸ばしてきた髪は、すでに背中にかかっている。それでもまだ、結んでしまうと物足りなく感じた。

「前髪だけでも、切っちゃだめ？」

「どうしてもとおっしゃるなら、お好きなように切ってさしあげますけどね。そのかわり、あとで後悔なさっても知りませんよ」

「これだけあれば、充分だと思うんだけど」

泰麒の心許無げな言葉に、軽く笑う。

「麒麟になったときにこのままの長さ、というわけじゃありません。見合った長さになるようですよ。泰麒の髪はまだまだ伸びたがってますから、きっとこれでも短いのだと思いますけど」

「一度、キリンになってみればはっきりするのにね」

「試してみなくとも、あたしたちが心得ておりますよ。――さ、どうぞ」

ぽちゃん、と音を立てて水の中に戻った泰麒を目を細めて見守る。

「斎麟の話をご存知ですか？」

「斎麟？　ううん」

「昔々、まだ才国の国民を斎といっていたころ、とてもお洒落好きの斎麟がいて」

「麟だから、才国の女の子だね」

「さようです。その斎麟が女仙の髪を羨んで、髪を結えと言ってきかなかったんですって」

「女仙みたいに結ったの？　簪をして？」

禎衛は縫い物をしながら頷く。

「そうですとも。――油で梳かして、きっちり結って、色とりどりの簪で飾ったところまではよかったのですけどね、急に夕立が来て、一足先に転変して宮に戻ろうとしたら、鬣を結ったまま。首がのけぞって、まっすぐにならなかったというお話」

軽く泰麒が吹き出した。
「……痛かったろうな」
「そうでしょうとも。泰麒もお気をつけなさいませ。結わえたまま麒麟になって、痛い思いをなさいませんよう」
「はあい」
くすくす笑う泰麒に笑い返して、禎衛は手元に視線を戻した。
馬州の酬孫という男が現れて以来、泰麒の周囲には必ず二、三人の女仙が付き従うようになった。女怪はいざとなれば、泰麒を守ることしか考えられない生き物だから、時には無益に血を流して却って泰麒を傷つける。
事実あの日も、一度の沐浴程度では血の臭気が落ちず、それをまた泰麒が女仙には言わずに、いつものように汕子の添い寝を許したものだから、結局翌日になって熱を出す騒ぎになってしまった。
（……使令がいればいいのだけれど）
禎衛は胸のうちで呟いた。
汕子一人では、泰麒の守護は手に余るのだ。
十年の歳月が恨めしいのはこういう時だ。
五山を取り巻く黄海は妖魔の住処である。本来なら、少しずつ黄海の縁を散策しながら、

麒麟は妖魔を手懐けて使令にしていく。まずは五山の麓から、麓に集まった小物を遊びのように折伏して、益体もない妖魔を集めるところから始めるのだ。

（泰麒にはその時間がない……）

しかも、本人も妖魔を折伏する方法など分かりはしないだろう。禎衛にだって教えてやることはできない。それは麒麟が生まれながらに知っているはずのことだ。

――せめてその半分の年月で帰っていれば。

麒麟は獣形で生まれる。五年はそのままで、まだ角はない。言葉も喋れず、女仙の意図もうまく理解できない。鳥の雛のようなものだ。

鳥の雛は飛ぶことを知らないが、麒麟は生まれながらに宙を駆ける方法を知っている。麒麟の雛は女怪だけを従えて、五山を奔放に駆け、妖魔を集めて遊ぶ。女怪の乳だけで育って、傷にも血の汚れにも強い。

五年ほど――個人差はあるが――すると、ときおり何かの弾みに人の形をとり、人語を喋るようになる。いくらもしないうちに、人獣頻繁に入れ替わるようになって、ある日額に角の先端が現れる。それと同時に乳離れして、完全な人形を現すのだ。

だから麒麟は、普通なら乳離れしたときから、転変の仕方も折伏の仕方も知っている。誰に教わる必要もない。角が完全に伸びきるまでは成獣とは呼べないが、麒麟としての能力はすべてが揃っている。だからこそ、旗が揚げられるのだ。

麒麟が乳離れすると、生国――実際にそこで生まれるわけではないが、そう呼ぶ――に報がもたらされ、各祠に麒麟旗が揚げられる。蓬山に麒麟あり、すでに王の選定に入る、という意である。麒麟旗を見て、我こそはと思う者は蓬山に昇ってくる。

禎衛は溜息を落とした。

泰麒はすでに雛ではない。帰還した日に、生国――戴国では麒麟旗が揚げられた。いまさら、できぬはどうあっても通らない。王は選定してもらわねばならない。転変はできて当たり前、自分の身を守る程度の使令は持っていて当たり前。

「……どうしたものか」

禎衛が呟いた声が耳に入ったのか、泰麒が顔を上げた。

問いかけるような表情に、禎衛は首を横に振ってみせる。

言わないほうがいい。転変の件のように、いたずらに泰麒を悩ませるだけだ。どうせ女仙の誰も教えてやることはできないのだから。

やっと元の元気を取り戻した泰麒に、また沈んだ顔をさせたくない。

蓉可から王を選べば蓬山には帰れないのだと聞いて、泰麒はひどく悄れてしまった。夏至が来るのが憂鬱そうで、見ている女仙のほうが慌てたくらいだ。

夏至に昇ってきた者の中に王がいるとは限らない、季節季節に昇ってくる者の中に王を探して、何年も過ごす麒麟もいるのだと、あまりに現れぬ王に業を煮やして、自ら蓬山を飛び

出して王を探しに出る麒麟もいるのだという話を聞いて、ようやく落ち着いたようだった。

「何とかするなら今のうちだが……」

幸い今は甫渡宮の周囲に人がいない。春分の安闔日に間に合ったのは、あの醐孫とかいう男だけだったようだ。

その醐孫も、女仙に寄ってたかって責められたあげく、水も貰えぬ食料も貰えぬ、という冷淡極まりない扱いに辟易して蓬山を下りてしまった。国へ帰るために令坤門のあたりで門が開く安闔日を待っているのだろうが、妖魔や妖獣から身を守りながらの野営は生半可なことではない。辛うじて生き延びても安闔日に入ってきた連中の笑い者になるだけだが、あいにく禎衛は同情する気にはなれない。

だがそれも夏至まで。夏至を過ぎれば、甫渡宮のあたりには常に人がいる状態になる。今のうちに黄海へ連れていって妖魔に対峙させれば折伏の方法を思い出すかもしれないが、雛に比べて泰麒はすでに野生の強靱さを失っている。万が一のことが、と思うとそれもさせかねた。

「禎衛、悩みごと？」

声を掛けられて顔を上げると、気遣わしげに泰麒が禎衛の顔を覗きこんでいた。

「……いいえ」

「ぼくが何か、心配させてるの？」

禎衛は微笑った。女仙を悩ませるのは麒麟だけであることを、すでに泰麒は理解している。その聡明さが嬉しく、女仙の気鬱を気遣ってくれる優しさが愛しい。

「とんでもありません」

「でも」

「針仕事にうんざりしただけですよ。自慢じゃありませんが、あたしはこういうことが苦手なんです」

「ぼくに手伝える？」

「あらあら、それはありがとうございます。でも、泰麒に禎衛よりも上手に縫っていただいたら、あたしは顔を隠して行方をくらまさなきゃなりません。——お気にせずに遊んでいらっしゃいまし」

笑って頭を撫でてやりながら、禎衛は思う。

——せめて、ほかの麒麟と会わせてやれるといいのだけれども。

麒麟なら、女仙にも汕子にも教えられぬことを、教えてくれるに違いないのに。

五章

1

「――玉葉さま！」

泰麒が声を上げたのは、露華宮で昼餉を終えたときだった。

わずか五室しかない宮の、中の間に入ってきた玉葉は背後に金髪の若者を従えていた。それを見て、禎衛は平伏しながらさらに深く心中で頭を下げる。

――玉葉はちゃんと考えていてくれたのだ。

「少しお会いせぬ間に、ご立派になられた」

玉葉は笑って泰麒の髪を梳く。

「ずいぶん鬣も伸びましたね。……つつがなくお暮らしか？」

「はい」

答えて泰麒は、玉葉の背後の若い男に目をやる。蓬山で男を見るのは、いつぞやの酬係以来だから、ひどく珍しかった。

「こちらは景台輔。……景麒でいらっしゃいます」

泰麒は目を見開いた。

「キリン、なんですか？」

玉葉は頷く。

泰麒はしばらく、無表情に会釈をする景麒を見上げた。

なんだか冷たそうな人だけれど、キリンに会えたのは嬉しい。

実際、泰麒は自分がキリンであることを承知しながら、そのキリンがどういうものなのか、いま一つ呑みこめないでいたのだ。

玉葉は女仙たちを見渡す。

「露茜宮は賑やかよの」

蓉可が慌てて、頭を下げる。

「申し訳ございません。泰麒がお一人でお食事なさるのを厭われて……」

玉葉は笑った。

「よい。いま、蓬山の主は泰麒。泰麒のよいようにしてしんぜなさい」

「はい」

「景台輔はしばらくご逗留なさるほどに、宮を用意しや」
「かしこまりまして」
一礼する女仙たちを見渡して、玉葉は泰麒の手を取る。
「不心得者に狼藉を働かれたとか。とんだご災難だったが、お怪我は？」
「ありません」
「それはようござった」
微笑って玉葉は泰麒を座らせる。景麒にも目線で座るように促した。
「景台輔は、泰麒の前に蓬山にいらしたお方」
「そうなんですか」
泰麒は景麒を見たが、表情のない目礼が返ってきただけだった。
「お二人は同じ蓬山でお生まれになった、いわば兄弟のようなもの。景台輔はしばらく蓬山におられますゆえ、泰麒も景台輔をお兄様ともおぼしめして、いろいろと教えていただかれませ」
「はい」
泰麒は笑って、景麒をまっすぐに見る。
「景台輔はお昼はお済みですか？」
「……ええ」

「お茶はいかがでしょう」
「ご遠慮申しあげます」
泰麒は首を傾げる。
「景台輔は、どちらの宮にお泊まりになるんですか？」
「以前こちらにいる時には、紫蓮宮におりました」
「じゃあ、宮に行かれますか？　ご一緒してもいいでしょうか」
「どうぞ」
立ち上がった景麒に続いて、泰麒も立ち上がる。景麒の後を追って歩きかけて、玉葉を振り返った。
「玉葉さまはゆっくりしていらっしゃるんですか？　それとも、ご用事がおありでしょうか」
玉葉は笑う。
「とくに用はござらぬほどに、泰麒さえよろしければ、夕餉にお招きくりゃれ」
「はい！」
嬉しそうに笑って、慌てて景麒を追っていく泰麒を玉葉も女仙たちも微笑んで見送る。二人の姿が消えてから、禎衛は憚かるようにして玉葉に声を掛けた。
「ご無礼とは存じますが……」

「申してみや」
「おそれながら、景台輔は気安いとは申しあげかねるお方。……その……泰麒とは」
全部を言わせず、玉葉は声を上げて笑う。
「たしかに景台輔は堅苦しいお方よの」
禎衛は黙した。景麒は蓬山で生まれ、つい先頃までここ蓬山に住んでいたのだから、気質はよく分かっている。否定するのが礼儀だろうが、あいにく禎衛は否定する根拠を持たなかった。
「いつぞやのご縁もおありゆえ、廉台輔にお願いしようかとも思うたのじゃが。漣は今騒乱のさなか、そうそう台輔をお借りするわけにもまいらぬ。いつぞやも、ご無理を申しあげてのこと」
廉麟の生国、漣に乱ありとの噂は禎衛も聞いていたので、ただ頷いた。
「それを思えば、景台輔が一番お歳が近くていらっしゃる。お国が大変なのは景台輔もご同様なれど、台輔は泰麒とお付き合いあそばして、少し泰麒の気安いところを見習われるのがよろしかろう」
禎衛はごく控えめに苦笑した。
「……はい」
玉葉は軽く笑ってから、ふと笑みを失う。

「……景女王は、少しばかり思い詰める性質のお方。景台輔があれでは、かえって景王を追い詰めてしまわれよう。泰麒の柔らかな気質を少しでも見習ってくれるとよいのじゃが……」

禎衛は黙って一礼した。

蓬山の外にも、悩みの種は尽きないらしい。

2

泰麒はつき従う女仙とともに景麒を追って歩いた。

大人の景麒に追いつくのは、泰麒にとってやさしいこととはいえない。ましてや景麒が少しも歩調を緩めてはくれないものだから、紫蓮宮に着いたときにはすっかり息が上がっていた。

紫蓮宮も露茜宮と大差ない造作をしていた。景麒は宮に入って、少しの間何を思っているのか、それぞれの部屋を歩きながら室内を見渡していた。懐かしんでいるのだろうと判断して、泰麒は黙って控えている。

一通り宮の中を歩いてから、景麒は中の間の椅子に腰を下ろす。やはり泰麒は黙ってそばに控えていた。

家具はあるが、掛け布や飾りものは取り払われている。そんなものを持って右往左往する女仙を尻目に、景麒はじっと物思いに耽る風情だった。

すっかり存在を忘れられてしまったようで、泰麒はしだいに落ち着かなくなる。景麒の表情を見れば声を掛けるのは憚られるが、かといってこのままそばにいるのも邪魔なような気がする。

すっかり途方に暮れてしまったので、女仙がテーブルの上に茶器を揃えて出したときには心底ほっとした。

「お騒がせして申し訳ありません。お茶でもおあがりなさいませ」

女仙は言って器を景麒に差し出す。

「そのように黙っておられては、泰麒がお困りですよ」

「ああ……」

やっとその存在を思い出したように、景麒は泰麒を見る。

「これは、失礼」

表情のない顔で、軽く会釈をする。

「あの……、ぼくはお邪魔でしょうか。でしたら、帰りますけれど」

おずおずと問うた泰麒に答えたのは、景麒ではなく女仙だった。

「そんなことはありませんよ。さ、泰麒もお茶を召しあがれ」

椅子をすすめてくれたので、迷いながら腰を下ろしたが、居心地の悪いこと、このうえもない。

「ええと……景台輔はどちらにお住まいですか？」

「慶です」

「慶国はどういうところなんですか？」

景麒は気のない声で答える。

「東の国です」

それきり口を閉ざしてしまったので、泰麒には慶国がどんな国なのか、さっぱり分からなかった。

「景台輔も蓬山にいらっしゃったんですよね」

「そうです」

「生まれた時からずっとですか？　ぼくは、このあいだここに来たんですけど」

「生まれた時からです」

「いつまでいらっしゃったんですか？」

「二年前までです」

「じゃあ、二年前に王様を選んだんですね」

「王にお会いできたのは昨年のことです」

ああ、と泰麒は呟く。
「では、二年前に王様を探して蓬山を降りてしまったんですね」
「そうです」
「あの……」
泰麒は花の匂いのするお茶を覗きこむ。
「王様を選ぶのはどういう感じなんでしょう。蓉可は天啓が下るのだというんですけど、ぼくにはよく分からなくて……」
景麒の返答はどこまでも素気なかった。
「その時になれば分かります」
「ぼくでも間違いなく王を選べますか？」
「選べます。麒麟はそういう生き物ですから」
「天啓がどういうものか、分からなくても大丈夫でしょうか」
「天啓を言葉で表現するのは難しい。王にお会いすれば、どういうものだか分かります」
「間違った人を選んでしまったり、王様を見逃がすことはないんでしょうか」
「ありえません。王には王気がありますから」
「王気？」
景麒は無表情に頷く。

「王の気配です。風格といってもいいのですが。とにかく他の者とは違うので、分かります」
「ぼくは普通のキリンとは違うらしいんですけど、それでも分かりますか？　普通のキリンとは選び方が違うということはないんでしょうか」
「私は黒麒麟を存じあげないので、分かりません」
「……はあ……」
泰麒はすっかり困ってしまった。額に薄く汗が浮いている。
あんなにキリンに会ってみたいと思ったのに、そのキリンが目の前にいて、少しも前に進んだ気がしないのは、どうしてだろう。
「景台輔は、蓬山を降りて、どうやって王様を探したんですか？」
目の前にいる人間の中から誰かを選ぶならともかく、どこにいるか分からない相手を探すのは大変ではなかったのだろうか。
「王気を頼りに」
「いろんな人に会って、王気があるかどうか、試してみたんですか？」
「王気は本人が目の前にいなくても、漠然とながら感じられるものです。それで王気のある方向へ向かったまで」
「……そうですか……」

これまた、泰麒にはよく理解できなかった。
「景台輔は転変できるんですよね」
「転変できない麒麟はおりません」
「ぼくはできないんです。……やり方が分からなくて……」
景麒は泰麒を見た。その目は鮮やかな紫をしている。
「手を上げるのに、やり方を訊きますか？　歩く方法を習いますか？」
「いえ」
「それと同じです。転変の方法を訊かれても答えられないし、答えたところでお分かりになるとは思えない」
「はい……」
泰麒は俯いた。それでは自分は、このまま一生転変できないのかもしれない。
沈黙が流れた。景麒のほうからは話しかけてくるつもりがないのを感じとって、泰麒は立ち上がる。ひどく汕子に会いたかった。
「……お邪魔をして申し訳ありませんでした」
頭を下げると、無言の会釈が返ってきた。
「夕餉のときにお会いできるでしょうか」
「玉葉さまはそのおつもりのようでしたから」

「はい。……本当に、煩くしてごめんなさい。失礼します」
「ええ」
一礼して踵を返した。急ぎ足で宮を出たけれど、表に出るまでは保たなかった。外に出る石段に辿り着く前に涙がこぼれた。切なくて情けなくて、足が止まる。追いかけてきた女仙が呼ぶのが聞こえた。
「……泰麒」
肩に手を置かれる。その手の温度と重みがいっそう切なかった。
「ぼくはキリンじゃないかもしれない」
「そんなことはありません」
柔らかな手が抱き寄せてくる。
「キリンだったら、できそこないのキリンなんだ」
「そんなことはありませんよ、泰麒」
「きっとそうなんだ」
泰麒は女仙にしがみついた。
「ごめんなさい……」
——できそこないで。
愛情を貰うばかりで。

何一つ、期待に応えられないで。

3

——どうしてこんな、情けない子ができたんやろね。

祖母はいつもそう言った。

——いいのよ、と言う母親の、撫でてくれる手は女仙の手と同じ温度をしていた。

(おばあちゃんの言うことを気にしなくてもいいの。今のまま、優しい子でいてくれたら、それでいいんだから。お母さんは、それで嬉しい)

だったら、どうして母親は何度も何度も泣く必要があったのだろう。

ごめんなさい、と言うと、謝る必要はない、と言う。涙を溜めた目で微笑って、そっと撫でてくれるのだ。

「気にしなくていいんですよ」

女仙もまた同じように言って、泰麒の背中を撫でた。温かな手で泰麒の手を引いて、露寒宮に連れ戻ってくれた。蓉可も禎衛も、同じように慰めてくれた。

「焦らなくていいんですよ」

「そうですとも。転変できようとできまいと、泰麒が麒麟なのは確かなんです。少しも気に

することはないんですよ」
（気にしなくていいの）
「本当に、景台輔も大人げのない」
（おばあちゃんは、怒りっぽい人なの）
「そんなにお泣きにならないで。転変できなくたって、少しも構わないんですから」
（謝ったりしなくてもいいのよ）
「そうですとも。泰麒がそんなに気に病まれるようなことじゃないんですよ」
汕子もまた、労わるように撫でてくれる。撫でたその手で抱き上げてくれて、泰麒の顔を覗きこんだ。
「……少しお外に参りましょうか？　いい夕風が吹いておりますよ」
誰もが優しいのでいっそう辛かった。温かな手も柔らかな声も、かえって切ない。
「いってらっしゃいませ、泰麒」
言って蓉可は袍を一枚掛けてくれた。
「夕餉にはお帰りなさいましね。今日は玄君もご一緒くださるそうですから、きっと賑やかになりますよ」
蓉可に送られ、汕子に抱かれて宮を出ても、やはり涙が止まらなかった。

「景台輔にも困ったもの」
紫連宮を訪ねてきた玉葉は溜息をついた。景麒は傍らで憮然とする。
「……泰麒はまだお小さくてあらっしゃる。それをお泣かせするとは」
苛めたように言われるのは不本意です」
「分かっておりますとも。……それでも、もう少し言いようがおありでないかえ」
「本当のことを申しあげただけです。転変の方法なぞ、問われてもお答えできない」
玉葉はさらに溜息をつく。
「その申されようが、つれない。泰麒は不運にも長い間を蓬莱でお過ごし。景台輔のようにはまいられぬ。もっと……」
「ならば同じ蓬莱生まれの誼、延台輔にでもお願いすればよろしかろう。私には向きません」
「景麒」
玉葉は窘める。
「妾は景麒にお願いしたのじゃぞえ。景麒にも泰麒にもよかれと思うてのこと」
「私は――」
「景麒のお悩みを知らぬ玉葉と思し召してか」
ぴしゃりと言われて景麒も深い溜息をつく。生国に残してきた王を思った。

景麒の主はごく普通に育った商家の娘、よく言えば繊細な女性である。悪く言えば、気が弱すぎる。玉座を呑んでかかることができない。日に日に萎縮し、政務も放擲して王宮の奥に隠れ、出てこようとしない。叱っても励ましても少しもよくならないどころか、明らかに景麒を疎んじ対面を避ける様子さえ見せる。

「景台輔は決して間違ったことを申されたわけではありますまい。――なれど、正しい方法が必ずしも最良の方法ではないことを、学ばれる必要があらっしゃる」

景麒は途方に暮れる。なぜ正論だけではいけないのか。

「まずは、お気持ちを酌んでさしあげることから始められませ。泰麒は気性の素直なお方。そのお方を怯えさせるようでは、景王のお心を安んじてさしあげることはできますまい」

再び景麒は溜息をついた。

「泰麒はどちらに」

小道を歩きながら、ゆきあった女仙に訊くと、女仙は背後、蓬廬宮の外辺を示す。

「麝香萱の苑に。――あまり泰麒を苛めてくださいますな」

道を訊くたびに同じ小言を言われるので、景麒はひたすら憮然とするしかない。

「そんなつもりはない」

「つもりはなくても、景台輔のお言葉は冷たくてらっしゃるんですよ」

「心懸ける」

それ以外に返答のしようがあろうはずがない。

鬱々とした気分で奇岩の間の小径を辿り、出会う女仙ごとに小言やら皮肉やらを言われながら麝香萱が咲いた広場に出た。

景麒は少し立ち止まる。黄色い花が点々と咲いた中に、白い女怪が四肢を折って座っている。その豹の身体に縋るようにして蹲っている泰麒を見つけた。

変わった麒麟だと思う。

麒麟であることは間違いないのだが、鬣の色が違うので今一つ違和感を拭えない。

違和感の元は他にもある。景麒は子供に慣れていないのだ。小さな身体も細い手足も、別の生き物のようで馴染めない。特に今のように肩を落として丸くなっていると、何やら胸の中がさわさわとして、落ち着かない気分にさせられた。

声を掛けるか否か迷っていると、先に女怪が視線を向けてきた。それに気づいたのか、泰麒もまた振り返る。きょとんと深い色の目を見開いてから、慌てたように袖で顔を拭った。立ち上がり、深く頭を下げる。

「……さっきはごめんなさい」

「いえ」

言ってから慌てて言い添える。

「こちらこそ、申し訳ない。私は物言いが冷たいようで……」
「いいえ」
泰麒は首を横に振る。どうしてあんなに細い首で頭を支えられるのだろうかと、景麒にはそれが不思議な気がした。
「ぼくが不甲斐ないんです。本当に申し訳ありませんでした」
「いや……。――そばに座ってもよろしいか」
「どうぞ」
景麒が傍らに腰を下ろすと、泰麒もまたその場に座る。景麒は控えるように何歩か下がって礼をとる女怪を見やった。
「泰麒の女怪か？」
「はい。汕子といいます」
「よい人妖だ」
言うと、泰麒は瞬く。
「女怪にいいとか悪いとかあるんですか？」
「なくはない。汕子のようにたくさんの獣が混じっているほど、よい人妖だとされる。――汕子、退がってもよいぞ。泰麒には私がおつき申しあげるゆえ」
景麒が言うと、汕子は深く一礼して小径のほうに向かう。

消えずに歩み去っていく姿を見て、景麒は僅かに眉を顰めた。
「よい人妖だが、まだ力が解放されていない」
呟くと、泰麒は首を傾げる。鬣が触れて麝香草が揺れた。
「泰麒のお力が解放されていないからでしょう。女怪は主人と縁が深い。麒麟が病めば病むものです」
「ぼくは……病気なんでしょうか」
「それはものの喩え。――しかし、ご病気だと申しあげるのが近いのかもしれない」
「そうですか……」
うなだれた子供を見て、景麒は息を吐く。どうにも落ち着かなかった。

4

景麒はしばらく、話の糸口を探していた。子供は押し黙って俯いている。
「――先程は、どうしてお泣きになったのか、お訊きしてもよろしいか」
無礼な質問かもしれないが、玉葉は泰麒の心情を理解せよと言った。
「……済みません」
小さな麒麟は身を竦めるようにする。

「謝っていただきたいわけではない。理由をお伺いしたいのです」
泰麒は俯いた。
「……自分が情けなかったからです」
「なぜ？」
「このままずっと転変できないんだろうか、と思って。女仙はみんな、ぼくが転変できるようになるのを待っているのに」
「女仙がそんなに気になりますか？」
訊くと、心許無げな顔を上げる。
「はい。みんなあんなによくしてくれるのに。ぼくは麒麟だから蓬山に住むことを許されて、それでとても親切にしてもらっているのに、麒麟らしいことは何もできないんです。せめてお礼に喜ばせてあげたいのに、そんな日は来ないんじゃないかと思ったら、情けなくて……」
言っているうちにまた涙を睫毛に溜める。
「お泣きくださいますな。また私が女仙たちに叱られます」
泰麒は目をしばたたく。
「景台輔でも女仙に叱られたりするんですか？」
「しますとも。女仙は麒麟に遠慮がない」

言うと、泰麒は微かに笑った。
「女仙を気になさいますな。あれは泰麒のお世話を申しあげるためにいるもの。泰麒が女仙の主なのですから」
「でも……」
呟いて泰麒は再び俯く。
「ぼくは女仙がいないと何もできません。何から何まで面倒を見てくれる人を、そんなふうに思えません」
「泰麒は変わっていらっしゃる」
「そうでしょうか……」
それがまた、切なげな声だったので景麒は慌てた。
——まったく、玉葉は何を考えているのか。こんなふうだから自分には向かないと言っているのに。
「責めているわけではありません」
「はい……」
頷いてから、泰麒はぽつりとこぼす。
「ぼくは、うちでもそうだったんです」
「うち？」

「はい。蓬莱の家でも。……おばあさんもお母さんも、喜ばせてあげられなかった。いつでも失敗ばかりして、おばあさんを怒らせたり、お母さんやお父さんに溜息をつかせたりしてばかりいました」

泰麒は蓬莱に流された。あの蝕の様子を景麒も覚えている。あのとき、景麒もまた蓬山にいたのだから。

「汕子が迎えに来てくれて、蓬山に来て、ぼくの本当の家は蓬廬宮なんだと聞いて、それでだったんだな、と思いました。ぼくは本当の子供じゃなかったから、何をしても駄目だったんだな、って。……でも、蓬廬宮でもやっぱり同じなんです。誰もぼくを叱ったり、ぼくのせいで泣いたりしないけれど、やっぱりぼくは誰も喜ばせてあげられない。時々、自分が本当はキリンじゃないんじゃないかと思います。もしもキリンじゃなかったら、ぼくは蓬廬宮にいちゃいけない。うちにいちゃ、いけなかったのと同じに」

景麒はようやく泰麒が十年暮らした場所を離れてきたことに思い至った。景麒ですら、蓬山を離れるのはなにやら切ない気がした。景麒よりも小さな——これほど簡単に泣いたり落胆したりできる生き物なら、もっと切なかったのではないかと、そう思われた。

「泰麒は麒麟に違いありません」

「そうでしょうか」

「麒麟は麒麟が分かります。泰麒は確かに麒麟の気配をしておられる」

泰麒は景麒を見上げる。
「金の光のようなもの。はっきりと見えるので分かります」
泰麒はまず自分の周囲を見渡し、次いで景麒の周囲を凝視した。
「ぼくには……見えないのですけど」
「それは、泰麒の力がまだ解放されていないからでしょう。泰麒は麒麟に間違いありません」
「じゃあ――、ぼくが蓬山にいるのは、間違いじゃないんでしょうか。キリンらしいことは何もできなくても？」
「間違いではありません」
よかった、と呟いて、泰麒はまた目をしばたたく。
「……ひょっとして、泰麒は蓬莱のおうちが懐かしくていらっしゃるのか？」
「……はい。ときどき。女仙には悪いと思うんですけど」
「私は母親を持たないので分からないが……お母さまが恋しいか？」
景王はひどく死んだ母親を恋しがった。家を懐かしみ、時にただの娘に返してくれろ、と景麒を責める。
「景台輔もお母さんがいないのですか？」
「麒麟には普通、いないのです」

「では、ぼくは恵まれているんですね」
「代わりに、女怪と女仙がいましたから。……しかし泰麒にはお母さまがおられた。やはりお会いになりたいものですか？」
泰麒は答えなかった。深く俯いただけだ。
「女仙に遠慮なさることはない」
景麒が言うと、小さく頷く。
「でも、ぼくはうちの子じゃなかったんだから、仕方ないんです……」
「そうか……」
「女仙はあんなによくしてくれるんだから、寂しいなんて言うと罰が当たります」
「そんなことはない」
「そうでしょうか」
「もちろんですとも」
泰麒は静かに泣き始めた。膝を抱いて、顔を埋める。景麒はすっかりうろたえてしまった。やはりこれも、自分が泣かせたことになるのだろうか。
「その……泰麒」
「……ごめんなさい」
言って小さい身体をいっそう小さくするので困ってしまう。鋼の色の髪が落ちて、細い首

が露になるのが寒々しい。しっかり膝を抱いた肩も、何やら寒そうに見えて、そわそわしたあげく、手を置いてみた。

「ごめんなさい……」

再び謝るので困惑する。

「お謝りになる必要はない」

言うと、声を上げて泣き始めた。女仙がしていたように抱き寄せると、景麒にしがみついてくる。悲しんでいるのだから哀れに思って当然なのに、温かいのが愛しい気がする。撫でてやると、いっそう強くしがみついてきた。嗚咽の合間に声がする。

「……うちに……帰りたい……」

「そうでしょうとも」

「お母さんに……会いたい」

それを聞いて、この小さな麒麟は本当に寂しいのだと、そう思った。

5

空が茜に染まった。西陽が雲海に反射して複雑な煌きをつくる。

濃い影と強い西陽が交錯する迷路を景麒に手を引かれて抜けながら、泰麒は歩みの速度で

故郷を思う。

迷路で遊ぶのは楽しい。学校へ行かないでいい生活にもすぐに慣れた。もともと友達と遊ぶのは下手だったので、同じ年頃の子供がいない寂しさにも慣れるのが早かった。汕子も女仙も優しい。ここでは、激高した祖母に叱られることも、祖母と母親が争うのを見ることもない。そのあとに母が泣いて、その夜に母と父が喧嘩をする、そういう光景を見ることもなかった。両親の喧嘩のあとで、父親に呼ばれ、溜息混じりに叱責されることもない。

女仙は帰ってきた、と言った。自分が本来いるべき場所に帰ったことを疑問に思ったことはない。女仙は温かい。たくさん歓迎してくれて、いくらでも優しくしてくれる。泰麒が帰ったことを心から喜んでくれているのが分かる。

――だから、いるべきでなかった場所を懐かしむのは、女仙たちに済まない気がする。

それでもふとしたはずみに思い出すのだ。

思い出してみると、古い家の廊下は迷路よりも楽しい遊び場だった気がした。庭は迷宮のどの広場よりも綺麗な場所だった気がする。女仙に囲まれているよりも、学校の校庭でどのグループの仲間にも入れず、ぽつんと同級生の遊びを見ていたときのほうが、ずっと楽しかった気がする。――女仙の誰よりも、汕子よりも家族のほうが優しかった気がしてしまうのだ。

今頃は夕ご飯だろうか。母と祖母と弟で、食卓を囲んでいるのだろうか。父親は何時に帰ってくるだろう。早くに帰ってきて大きな背中を流させてくれるだろうか。

思い出せば何もかもが切なく恋しかった。

庭の紫陽花は咲いたろうか。祖母は日傘を出したろうか。喧嘩した母は一人で風呂場に行くのだろうか。弟は夜中に一人で手水に行けているのだろうか。

——少しでも自分のことを思い出してくれているだろうか。

忘れられていれば悲しい。忘れずにいて、いなくなったことを喜ばれていれば、なお悲しい。いなくなったことを悲しんでいてくれれば、いっそう悲しかった。

「……泰麒」

泣きそうになっていた自分に気づいて、泰麒は慌てて瞬きを繰り返した。

「はい」

「少し紫連宮にお寄りになりませんか」

泰麒は景麒の顔を見上げる。景麒の表情には相変らず変化がなかったが、泰麒の手を握った大きな手は温かかった。

「でも、玉葉さまが」

「少しだけです」

「……はい」

景麒はまっすぐに紫蓮宮に向かうと、出迎えの女仙に退がっているよう申しつけて、奥の寝室に泰麒の手を引いていく。東にある小さな庭の、奥に塞がる岸壁に夕陽が当たって、苔が複雑な色に輝いて見えた。その照り返しで、部屋の中の何もかもが夕陽の色に染まっている。

景麒は泰麒の手を軽く叩いて手を放すと、部屋の中央で僅かに顔を上向けて目を閉じた。何が起こるのだろうと、泰麒が首を傾げる間もなくそれは始まった。

不思議な映像でも見ているようだった。景麒の姿が揺らいで、溶けた。それはいつか何かで見たガラスや金属が溶ける光景によく似ている。溶けたかたまりが鮮やかな金色を示して、あちこちが引かれたように伸びる。伸びたそれが、ちょうど服でも裏返すように内側から反転して、声を上げる間もないうちに一頭の獣が姿を現した。

「……あ」

ほんの僅かの時間でしかなかった。獣の身体に掛かった着物が音を立てて床に落ちる。獣が僅かに上げた首を下ろして、泰麒を振り返った。

紫の瞳は変わらない。金の髪の——鬣の色も変わらない。首は決して長くなかった。馬よりも華奢な印象で、鹿に似ている。温かな黄色の身体に模様はあったが、それは背だけで、それも模様というより角度によって色を変える体毛が複雑に入り交じっている印象を受

けた。

「……麒麟」

それは少しも「キリン」に――ジラフに似たところがない。別の生き物なのだと分かる。顔は馬ほど長くなく、鹿に似ている。額に枝分かれした角があったので、いっそう、そういった印象を受けた。ただしそれは鹿よりも短く、一本しかない。白というより金味のかかった真珠色で、夕陽を浴びて薄紅の光沢を見せている。

しなやかに曲がった首にかかった金の鬣は、景麒の髪が膝裏に届くほど長かったことを思えば、うんと短くなっている。そのぶん細くもなったのか、あるかなしかの風に吹かれて揺れるさまは、金の炎でも燃えているようだった。

馬のような蹄。尾は長くて鹿とは異なる。付根が細くて馬のそれとも違うが、牛のそれよりも長毛が豊かで、ちょうど馬と牛の間のように見えた。

「……景麒。これが……麒麟なんですか」

「そうです」

期待していなかったが、紛れもなく景麒の声で返答があった。

「もっと違う生き物だと思っていました」

「そうですか？」

そばに寄ってみると、大きな生き物だった。華奢な印象があるが、馬よりも一廻り小さい

くらいだろうか。艶やかな毛並みに触れてみたい気がしたが、景麒だと思うとそれも躊躇われた。

「……こんな綺麗な生き物だとは思っていませんでした」

呆然と立っていると、景麒のほうから首を下げて鼻先を近づけてくる。

「お気に召したか？」

「はい」

自分でも頬が紅潮しているのが分かる。

「ぼくも、こんなふうなんでしょうか？」

「黒麒麟ですから、色は違いましょうが」

「そう……ですね」

こんな獣になるのは、どんな気分がするのだろう。

「やっぱり前脚は手のような感じがしますか？」

「いえ。前脚は前脚です。転変すると、どこかが切り替わってしまうようで」

「角も尻尾も？」

「尾はあまり意識しませんが。角は付根に火が点ったような感じがします。それだけ気が集まっているんでしょう。——そうですね、転変するときには額に気を集めているような感じはします」

泰麒はちょっと景麒の真似をして目を閉じ、額に意識を集中してみる。あいにく何も起こらなかった。泰麒は息を吐く。

「……急にできるようになったりはしませんね」

「急がれることはない」

「はい。——きっとこのお姿だと、足も速くていらっしゃるんでしょうね」

「ええ。それに麒麟は黄海の中でも宙を駆けます。風に乗ると、どんな鳥よりも速い。その気になれば、この世を一廻りすることもできます」

「……蓬莱へも行けるんでしょうか？　ずっと東の果てにあると聞いたのですけど」

「行けます。それをお望みなら」

泰麒は目をしばたたいた。

こんなに綺麗な獣になって、世界中の空を駆けるのはどんなに気持ちがいいだろう。しかも、転変することを覚えさえすれば、本当に寂しくてたまらないときに、そっと家を覗いてくることだってできるのだ。

「泰麒さえお嫌でなければ、明日は背に乗せてさしあげましょう」

「本当ですか？」

「ええ。——さあ、先に宮へお戻りなさい。玉葉さまがお待ちでしょう。私もすぐに参りますから」

「はい」
泰麒は深く頭を下げる。
「景台輔（けいたいほ）、ありがとうございました」

六章

1

「一時はどうなることかと思ったけれど……」

蓉可は針を持つ手を休ませる。泰麒は蓬山に来ていくらか大きくなった。着物も仕立て直すか、裾や袖を出すかしなくてはならない。

「なんとか景台輔と馴染まれたようで、よかったこと」

一緒に針を動かしていた女仙も笑う。蓉可もまた笑みを返した。

景麒が麒麟になって見せてくれたのだと言って、宮へ飛びこんできたときの泰麒の顔が忘れられない。翌日には背に乗せてもらえるのだと、すっかり興奮して夜半まで眠らず、翌日風に髪を乱して帰ってきたあとは、さらに興奮して牀榻に入れるのが大変だった。

「玄君のなさることに間違いはないってことだね」

女仙の一人が言って、くつくつと笑う。
「近頃、景台輔が泰麒の真似をして気を遣ってくださる。珍しいやら、おかしいやら」
「本当に。――仏頂面は相変らずだけれど」
景麒は蓬山にいる時間が長かった。そのぶん女仙は遠慮がない。
「こればっかりは躾が立っておられるから仕方がない」
「違いない」
軽い笑いが広場に起こる。
そこへ小径を辿る軽い足音が飛びこんできた。
「お帰りなさいまし」
「ただいま」
駆けてきた泰麒は伸びた髪を縺れさせて、それでも白い顔を輝かせている。両脇に二頭の妖を従えていた。一方は汕子、もう一方は班渠といって、景麒が使令としている妖魔である。
「今日はどちらまで？」
「華岳に連れていっていただいたんです。変わった鳥がたくさんいたよ」
その笑顔を見て、蓉可も笑みを禁じえない。泰麒はすっかり景麒に懐いた様子だが、女仙の誰も景麒に懐く子供がいようとは想像だにしなかった。

「それはよろしゅうございました」
「明日は黄海へ連れていってくださるって。折伏を見せてくださる約束なんです」
「まあ」
蓉可が言葉を途切らせると、班渠が笑う。
「心配はいらない。我々がついております」
「ああ……。そうですね」
景麒の使令がついているから、心配はない。頷きながらも、蓉可はどこかに不安を覚える。過去、黄海で命を落とした麒麟がいなかったわけでは決してない。妖魔は人も麒麟も隔たりなく襲うのだ。
「……さ、お水を浴びていらっしゃいまし。夕餉にいたしましょう」
「はあい」
頷いて、泰麒は汕子と班渠を振り返る。
「行こう」
二頭の妖を従えて駆けていく泰麒を見送り、蓉可は縫い物を置いて立ち上がった。
「どうした」
蓉可が紫連宮に行くと、景麒はちょうど紫蓮洞の泉から上がってきたところだった。この

洞に湧いた水が一段下って、宮の前にある蓮池に流れこんでいる。
「泰麒を黄海にお連れになるとか」
「それか」
素気なく言って、景麒は水を含んだ髪を掻き上げる。
「大事はなかろう。泰麒の御身は重々使令に守らせる」
「ですが」
景麒は苦笑した。
「女仙は泰麒に甘いな」
「泰麒はお年こそ十ですが、麒麟としては幼くていらっしゃるのです」
「そうも言ってはおられまい」
景麒は宮の入り口に凭れて蓮池を見下ろす。
「夏至までもう半月ない」
蓉可は頭を垂れた。
「先に令坤門を見てきたが、すでに集まった者は五十騎を越える様子」
「そんなに？」
景麒は頷く。
「戴と令坤門は正反対の方角ゆえ、数騎もあるまいと——ひょっとしたらまだ昇山の者はな

いかもしれぬと思ったが、どうやら麒麟旗が揚がるのを待って四門を巡っていた者が相当数いるらしいな」

麒麟旗が揚がるや否や、もっとも近い安闔日に四門を越えられるよう、金剛山の周囲を巡る者たちがいる。並の馬に騎乗していては安闔日ごとに四門へ辿りつくことは、到底できない。夏至からいくらも時をおかずに宵渡宮まで昇ってくるだろう。

「なんとか夏至までに使令を持たせてさしあげたい」

我こそはと己に恃むところあって四門を巡っている連中だから、そのぶん気も荒い。せめてものの道理を分かっていれば心配することもないのだが、そういう連中はえてして道理を知らぬゆえに思い上がっていることが多いから困りものである。

景麒は言い添えた。

「私もそうそう国を空けられない。王の登極から間がないゆえ、まだまだ慶は安寧に程遠い」

「……景台輔こそ、泰麒にはずいぶんお優しくていらっしゃるのですね」

蓉可が笑い含みに言うと、景麒は顔を顰めた。

「そうしないとまた、苛めたと責められるからな」

「さようでしたかしら」

笑ってから蓉可は一礼する。

「くれぐれもよろしくお願い申しあげます」
「お怪我などさせまいよ。会う女仙ごとに小言を言われては堪らない」
「そのお言葉、しかと覚えておきます」

2

「――いかがですか？」
景麒は言って、兎に似た生き物を泰麒に差し出した。
黄海の鳥羽口である。五山の麓とも黄海の縁ともつかぬあたりで、荒れ地に灌木が生えているばかり。景麒の差し出した獣は耳の短い兎のよう。――あるいは、身の細く大きな鼠のようである。
「ジャッコ？　ヒソ？」
泰麒の手の中に妖魔はおとなしく抱かれている。柔らかな毛並みの下で、心音がとことこと鳴っていた。
「ジャッコ」
たどたどしい言葉で答えたのは、景麒ではなく妖魔のほうだった。たった今、景麒が使令に下したばかりの小さな妖魔。

「飛鼠というのは、妖魔の種族の名前。これの名はジャッコです。そうですね、雀、胡と」
景麒の言葉に頷いて、雀胡の喉元をくすぐる。
「よろしく」
雀胡は返答する代わりに、ちいと鳴いてみせた。
「まだうまく喋れないのかな」
「このくらい小物だと、ほとんど喋りません。片言が精一杯で」
灌木の下で様子を窺っていた雀胡を示したのは泰麒だった。逃げようとする雀胡に向かって景麒が何事かを唱え、振り返った妖魔と見合うことしばし。再び景麒が何事かを言い、名を呼ぶや否や、雀胡はすすんで景麒の足元にやってきた。
それが折伏のすべてで、もっと何か緊迫した儀式を想像していた泰麒には気抜けするほどあっけなく思われた。
「いつもこんなに簡単なんですか？」
泰麒が問うと、景麒は首を振る。
「飛鼠は小物だから簡単に済んだ。大物だとこうはまいりません。見合って半日を過したこともある」
「そんなに？」
驚いて見返す泰麒に、景麒は頷いて雀胡を抱き上げた。軽く撫でて班渠の背中に乗せる。

雀胡は班渠の耳にじゃれかかった。
「班渠ですよ。これを捕らえるのは大変だった」
「へえ……」
班渠は涼しい顔で岩場に横になったまま、雀胡が耳にじゃれつくに任せている。
「ただ睨み合っているように見えたのですけど」
景麒は苦笑する。
「ただ睨み合うのですよ。こちらが気を緩めると、妖魔は視線を断ち切って逃げてしまう。――あるいは、こちらに襲いかかってくる」
泰麒は神妙に頷いた。
「先に気を散じたほうが負けです。逃げていくような小物ならば大事はないが、相手が大物だと気が緩んだ瞬間に命を取られることになりかねない。視線が合って、これは駄目だと思ったら、睨み合う前に逃げたほうがよろしい。――もっとも、相手が大物だと転変でもしないかぎり、逃げるのも難しいが」
「はい……」
俯いた泰麒を見て、慌てて景麒は言い添えた。
「心配はない。女怪が時間を稼いでくれます」
「女怪に危険はないんでしょうか」

景麒は苦笑した。

「自分の手に負えないような妖魔がいれば、出会う前に女怪が教えてくれます。注意していれば、泰麒にもお分かりになる。所詮獣は敵の気配には敏感なもの」

泰麒は少しぼかんとして、困ったように笑った。

「そうか、ぼくは獣なんですね。……すぐに忘れてしまうんです」

「お忘れになっても構わぬ程度のことですよ」

「はい。——雀胡という名前は、どこからお付けになったんですか？」

景麒は雀胡に目をやる。使令として役に立つほどの妖魔ではない。王宮の庭に放してやるしかないだろう。

「私が付けたのではありません。多分……それがあの者の名前なのだと思います」

泰麒はきょとんと首を傾げた。

「睨み合って、相手が根負けをすると、相手の覇気が緩む。その時に相手の名前を読み取るのです。よくは分からないが、多分そうなのだと思う。ふっと、頭の中に音が湧いてくるのですよ。それで呼んでやると、妖魔はすすんで足元にやってくる。以後二度と、麒麟に逆らったりはいたしません。麒麟が死んで解放されるまでは」

言ってから景麒は微かに笑った。

「文字は宛字です」

「なにか呪文みたいなものを、唱えていらっしゃいましたよね」
「あんなものは、なくてもよいのですが。あれば役に立つ、その程度で」
「はあ……」
釈然としない様子の泰麒を乾いた岩の上に座らせる。景麒もその隣に腰を下ろした。
「妖魔を使令に下すには、妖魔と契約を交わします。——というより、縛るといったほうが正しいか」
「縛る……」
景麒は頷く。
「妖魔は天の摂理から外れたもの。これを天の摂理に組み込み、二度と外れぬよう縛る。それを受け入れたものが使令になる」
「……分かりません」
景麒は溜息をつく。
「済みません……」
詫びる声に慌てて景麒は言い添えた。
「謝ることはありません。泰麒には分からなくても無理はないのですから」
「はい……」
「天帝はこの世を創られた。人々に幸いなれと、この世の摂理を定められたのです。しか

し、ならばなぜ人が死ぬか、病むか。なぜに人を襲う妖魔があり、災厄があるか。——天に深いご思慮あってのことか、それとも天のご思慮をも超えたことか。いずれにしても、それは天帝が『善かれ』と思われたことの妨げに他ならない」

泰麒はしばらく考えてから頷いた。

「いずれにしても天のなさることゆえ、推察はできかねる。ただ、生に対して死があるように、天のおかれた摂理にも、どうやら相反する摂理があるらしいことは想像できる」

「光と影みたいに？」

「その喩えはたいへん正しい。民を助けるために我ら麒麟があり、麒麟を始めとする幾多の妖がいる。そのように、民を害する妖もまた存在する」

「それが妖魔なんですね。だから、摂理の外の生き物なんだ」

「そのとおりです」

景麒は微かに笑んだ。

「その摂理の外の生き物を、摂理の中に入れるんですね？　折伏して？」

「そういうことです。泰麒のあげた喩えで言うなら、妖魔は影の生き物。これを使役するためには、光の中に引き出し、影に帰らぬよう、縛っておかねばならない」

「はい。——でも、どうやって？」

景麒は再び溜息をついた。

「それが言葉にするのが難しい。私にもよく分からないのです、実を言うと。ただ、気迫なのだと思う。この妖魔を自分の支配下におくのだという強い意志の力。ただそれは、ひたすら強く願えばいいというものではない」

景麒が言うと、泰麒は困り果てた表情をした。

「――こう考えるのがよろしかろう。麒麟は『力』を持っているのだと。力の大きさは麒麟によって異なる。しかしながら、どの麒麟も確実に持っているものです」

「その力が、麒麟を転変させる？」

「はい。それは力だから、願いとはあまり関係がない。どれほど強く願っても、持っている力が小さければいくらの足しにもなりはしない。そういうことです」

「腕力みたいなものですね。足の速さとか」

「そう。――そうです」

景麒はほっと息をつく。でも、と泰麒は首を傾げた。

「妖魔を力で光の中に縛りつけるのは、大変ではありませんか？　少しも気を抜けないとか、うっかり妖魔を縛る力が緩むことはないんでしょうか」

景麒はもう一度溜息をついた。

「……済みません」

「お謝りになる必要はない。……これは泰麒にはまだ酷なお話かもしれませんが」

景麒は言って、声を低めた。
「どうか取り乱してくださいますな。――使令は麒麟を食べるのです」
「……えっ」
「正確には死骸を食べる。使令は麒麟を食べて、麒麟の力を己のものにする」
泰麒は班渠を振り返った。班渠は大きな頭を無表情に足の間に落としてそっぽを向く。その動作からは何の感情も読み取れなかった。
景麒は苦笑した。
「ご心配なさるな。班渠は泰麒を襲ったりはいたしません。麒麟は光のもの。妖魔は影のもの。麒麟が自ら与えなければ、己の力にすることができないのです」
「は……はい」
「麒麟は妖魔を力でもって押さえこむ。影の中から光の中に引き摺り出すのです。妖魔にもまた力があるから、強い妖魔を引き出すにはそれに見合った力がいる。妖魔は引き出される力で、その麒麟の力を測ります」
「はい……」
「そして、麒麟が死んだあと、自分が与えられるもののことを考える。使役される価値があるかどうか、判断するのです」
「……それは分かる気がします」

「引き出すことに成功すれば、使役を断る妖魔などいない。それだけの力が与えられることが約束されるのだから」
「だから、契約、なんですね」
「そういうことです。――影の生き物を光の中におくのだから、影に戻らぬよう、縛り上げる鎖が必要です。そして、守護も」
「光の中で生きられるように？」
「はい。使令を繋ぎ、守る鎖が、『名前』です。麒麟は気迫でもって妖魔を引き出し、相手の名を読み取り、その名を改めて与えて己の僕とする。妖魔は気迫でもって麒麟の力を測り、名を受けて将来死体を得る権利を手に入れる。――折伏とはそういうことです」
「そして、麒麟が死んだあとに死体を食べて、新しい力を得て野性に還る……」
「その代わり、使令として仕える間は決して麒麟に逆らいません。麒麟を守りこそすれ、絶対に傷つけたりはしない」
泰麒はまじまじと班渠を見る。気安い生き物が、このうえなく量りがたい生き物に思えた。班渠はそんな泰麒にちらりと視線をよこして、そうしていきなり顎を開く。
「……！」
思わず身を引いた泰麒の目の前で悠々と欠伸をして、それからくつくつと笑った。
「班渠」

窘めてから、景麒は苦笑する。
「実を言えば、成長した麒麟は小狡い手を使います。――泰麒は易をご存じか？」
「占いのことですか？」
「そう言っても間違いではない。……大物の妖魔を狩るときには、易や遁甲、風水の力を借ります。が、これには長い勉学がいる。女仙に訊けば教えてくれるが、今日明日で身につくものではない」
「はい」
「日を選び地形を選び、方角を選んで妖魔を選ぶ。使令に下す妖魔の力がもっとも弱まり、自分の力がもっとも高まるようにうまく準備をするのです。だからといって、備えがなくては妖魔を捕らえられないわけではない。呪言もそうです。易や遁甲ほど役には立たないから、なくてもいい。あれば便利なので使う。使うことに慣れると、何となく使わねばおさまりが悪いような気がする、それだけのこと」
「では、べつに覚えなくてもいいのですか？」
「覚えておきますか？　僅かながら助けにはなるやもしれない」
泰麒が頷いたので、景麒は彼の肩に手を掛ける。姿勢をまっすぐに正してやる。
「まず、姿勢を正すこと。これは常に心懸けなさい」
「はい」

「気には生気と死気がある。午前は生気、午後は死気。妖魔を折伏するのは、生気の午前のほうがいい。鼻から吸うのが生気。口から吐くのが死気。必ず呼吸はそのようにすること。逆にしてはいけません。息を吐くときはできるだけそっと吐くこと。これも常日頃から心懸けるように。そうでなければ身につきませんから」

「鼻から吸って、口から吐く、ですね」

「妖魔を避けるには禹歩」

景麒は独特の歩法を行なってみせる。

――妖魔に出会い、視線を合わせるのを避けるには叩歯。特に右歯を噛み合わせる槌天盤を。気を集中するには前歯を鳴らす鳴天鼓を。

泰麒は溜息をついた。

「ぼく、ちゃんと覚えられるでしょうか」

「すぐに覚えます。身につけるには修養が必要ですが、それは乞えば女仙が教えてくれる」

「はい」

「雀胡の足を止めたのは九字呪言。手をこう」

景麒に言われるままに泰麒は両手を組む。

「これが剣印。――腰に構え、抜刀して四縦五横」

泰麒の手を取って動かしてやる。

「臨兵闘者皆陳列前行、と」

「……本当に難しいな」

「少し練習すれば、慣れます。必ずまっすぐに描くように。――相手が覇気を失ったら、呪言を唱えるが、これには易の知識がいる。いまのところは、こう覚えておかれるといいでしょう。神勅明勅、天清地清。神君清君、不汚不濁。鬼魅降伏、陰陽和合。急急如律令、と」

泰麒は困りきった表情で景麒を見上げる。景麒は苦笑した。

「鬼魅は降伏すべし、陰陽は和合すべし、急急如律令」

「ええと、……はい」

「そして右手を頭上に上げ掌を突いて天意を受け、左手で足元を示して名前を呼んでやる。音だけが浮かぶ場合もあるし、文字ごと浮かぶ場合もある。それは麒麟の本性が知っています」

「はい」

泰麒は息を吐く。景麒は肩を落とした小さな麒麟の背を叩いた。

「死気に入るまでにはまだ時間がある。うんと小さな妖魔で一度やってごらんなさい」

泰麒は頷いたが、結局彼の呪言に足を止めた妖魔は、一頭とていなかった。

3

夏至がやってきた。

汕子は牀榻で深く眠っている子供を揺する。

昨夜――正確には今朝も明け方近くまで黄海にいた泰麒は、汕子の身体に腕を廻して前後不覚に眠っている。無心な寝顔を見れば起こすには忍びないが、そろそろ起きてもらわねば泰麒自身が後悔する。

「泰麒、お目覚めですか」

蓉可の声がして、幄が上げられた。中を覗いて蓉可は苦笑する。

「……あらあら」

微笑ってから汕子を見た。

「ゆうべは遅かったご様子。……どうだった？」

蓉可に問われて汕子は首を横に振った。

明け方まで黄海を彷徨ったが、結局妖魔は捕まらなかった。景麒と女仙とで易を立てて備えても、妖魔は視線を外して逃げてしまう。覇気が足りないのだと、言葉にはしないが景麒も汕子も分かっていた。

「……そう。さぞかし気落ちなさったでしょう。——おかわいそうだけど、起きてもらわないとね」

汕子は頷いて、もう一度泰麒の身体を揺すった。

「……泰麒」

蓉可は幔帳を大きく開けて光を入れた。

「泰麒、お起きになってくださいまし。景台輔がお帰りになってしまわれますよ」

「……ん……」

ようやく泰麒が身動きをした。寝返りを打って、それでまた寝息が聞こえてくる。

「まあ……」

「いとけないこと」

背後から声がして、蓉可も汕子も慌てて牀榻の入り口を振り返った。

「玄君」

玉葉はふっくりと笑う。

「無理にお起こしするのも、何やら無体よの」

「昨夜は遅かったのですから、どうぞそのまま寝させておあげなさい」

言ったのは玉葉の背後に控えた景麒で、蓉可はすっかり慌ててしまった。

「ご無礼を。——泰麒。お起きくださいまし」

「よい。そのまま休ませてさしあげよ」
景麒が言うのに、蓉可は強く首を振る。
「そんなことをすれば、あとで泰麒ががっかりなさいます」
汕子もまた頷いた。
疲れ果てて帰って、それでもなお泰麒が寝つけなかった理由を汕子は知っている。それで強く身体を揺すった。
「泰麒。……泰麒」
三度揺すって、ようやく泰麒は目を開けた。眩しそうに瞬きをして、間髪入れずに飛び起きる。
「……台輔は」
汕子はその髪を撫でつけた。
「まだ、おいでです」
泰麒は瞬きをし、そうして、笑いを嚙み殺すようにして牀榻を覗きこんでいる大人に目を留める。赤くなって頭を下げた。
「ごめんなさい……！　おはようございます」
「玄君にも台輔にも申し訳ございません。いつもはこんなことはない方なのですが」

玉葉は笑いながら蓉可から茶器を受け取って、景麒に目をやる。
「ずいぶんと慕われたこと。よろしゅうございましたの」
景麒は憮然としていた。
「それで景台輔はお役に立ってかえ」
蓉可が曖昧に微笑うと、当の景麒が溜息混じりの声を出した。
「……私では力が及びませんでした。申し訳ないことです」
「天与の力をお教えするのは難しいもの。……台輔の口から殊勝なお言葉が出るようになっただけでよしといたそう」
景麒がさらに憮然として、玉葉が笑ったところに、身支度を終えた泰麒が汕子を伴って入ってきた。
「失礼しました」
景麒は茶器を卓に置く。立ち上がって一礼をした。
「泰麒。お暇を申しあげます」
景麒を見上げる子供の目は赤い。
「本当にもうお帰りになるのですか」
「そうそう国を空けられません。お役に立てず、申し訳ございませんでした」
「いいえ。ぼくこそ、少しもいい生徒でなくて、ごめんなさい」

「そんなことはございませんでしたよ」
「……お元気で」
「泰麒もつつがなく」
「はい」
景麒は何かを堪えるような表情で自分を見上げてくる泰麒を見返す。そっと頭に手を置いた。
「お急ぎになるな。……麒麟は天の創られたもの。天帝が必ずよいようにしてくださいます」
「はい……」
「早く王にお会いできますように。生国に下られれば、虚海を隔てて隣が慶。またお会いする機会もございましょう」
言うと、泰麒は小さな手で景麒の裾を握る。
「本当にそんな機会があるでしょうか」
景麒は微笑った。言外に、会いたいと言ってくれるのが嬉しかった。
「お約束いたしましょう。生国にお下りになられたら、真っ先にお祝いを申しあげに参ります」
言うと、泰麒はぱっと笑みを浮かべる。

「はい」

できればせめて使令の一頭を捕らえるまで、せめて昇山の者との対面が落ち着くまで、そばにいてやりたいが、到底それは叶わない。もう充分に国を空けた。そもそも長くとも夏至までと、そのように言い置いてある。

「……どちらからお帰りになるのですか？」

「白亀宮から」

「宮までお送りしてもいいでしょうか」

景麒は微笑った。

「もちろんです。班渠と雀胡をお呼びしましょうか」

「はい」

玉葉もまた立ち上がって、大小の麒麟を見比べた。

「泰麒は景台輔の使令とも仲ようおなりか」

「班渠にはたくさん遊んでもらいました」

「それはよろしゅうございった」

笑ってから、小さい麒麟の肩に手を置いた景麒に目をやる。

「景台輔にもよかったこと。少しは人に優しゅうする方法を覚えたらしい」

「でも」

泰麒は玉葉を見上げる。
「景台輔は最初からお優しかったです」
本気でそう思っているらしい口調に、玉葉と蓉可は目線を交わらせた。
「そうであったかの」
「はい」
断言する声に玉葉は笑う。景麒はなんとも複雑そうな表情をした。くすくすと押し殺した笑いが部屋の隅に控えた蓉可を始めとする女仙の間から漏れた。
——女仙はもちろん、玉葉でさえ予想はできなかった。
景麒が示す不器用な優しさこそが、景王舒覚に道を踏み外させることを。
しかし、これはまた別の物語である。

4

景麒を送って、泰麒は少し気落ちした風情だったが、実際のところ気落ちする暇は泰麒にはなかった。
夏至の翌日から、甫渡宮に至る道を見渡せるあたりに交代で女仙が詰めるようになった。

甫渡宮には盛大に進香が行われ、女仙の衣服は華やかなものになる。宮の設えも、泰麒の衣服もまた贅沢なものになった。

——蓬山に祭りが始まったのだ。

泰麒は捨身木に近い奇岩の上にいる。迷路の中にいれば花の匂いのする風が、奇岩の上に登ると潮の匂いばかりがする。それがひどく不思議だった。

南西の方角から、何かがやってくる。

泰麒は転変した景麒の背に跨って見下ろした黄海を思い出した。

蓬山は奇岩の山、緑の奇岩が複雑な模様を描いて麓まで続いている。奇岩の作る迷路は途方もなく複雑そうに見えるが、その実、甫渡宮までの道は一つしかない。気の遠くなるような長い年月の間、無数の昇山の者が通い続けたその道は、いつしか深く刳られて一目見てそれと分かった。

道が一つしかないのだから、蓬山への入り口もまた一つしかなかった。そのたった一つの入り口へ向けて、三方から道が集まっていた。

道は黄海を貫いている。これも蓬山の道と同じく、長い間無数の人々がそこを通った痕跡だった。岩山を刳った人の足跡、険しい斜面に刻まれた足掛り。沼や川に投げ込まれた飛び石、荒れ地に立てられた石碑。亀裂に架かった倒木の橋、枝を払われ払われして、いつのま

にか樹海を貫いた細い道。

それらの道が黄海の四方、四つの門へ向けて延びているのだ。

そのうちの一つ、南西にある令坤門はすでに開いて閉じた。夏至にそこを越えた旅人は、今はどのあたりにいるのだろうか。

黄海は妖魔・妖獣の住処だから、旅は決してたやすいものではない。同じ日に門を抜けた人々は隊商のように集団を作り、危険な道を互いに守り合いながらやってくる。彼らを守るための傭兵のような職業さえあるのだと聞いた。

「どきどきする……」

懐に抱えこんだ膝の上に顎を載せて泰麒が呟くと、隣に座った汕子が静かな声を発した。

「緊張なさらず」

「うん……」

それは予感に似ている。

遊んでいるとき、女仙に簡単な易を習っているとき、ふと視線を上げて南西の方角を見ると、とたんに胸苦しくなることがある。その方向に令坤門があることを思い出し、何やらヒヤリとするような、そんな気分がして鼓動が速まる。

決してよい予感ではない。やってくる何かが、怖いもののように思えてならなかった。

「ぼくにちゃんとできるだろうか」

「できますとも」
汕子はそれしか言わなかったので、強い言葉よりも風の音のほうが耳に残った。
「……あの中に王様がいると思う？」
「さあ」
「まだ、いないよね」
「おられないほうがよろしいですか？」
「うん……」
汕子は膝を抱えたまま身を硬くした主人を見つめる。
もしもその中に王がいて、蓬山を離れることになるのが嫌なのか。それとも、試されるのが怖いのか。
いずれにしても、夏至を越えてからの泰麒の緊張は汕子にも伝わって、そばにいるのが痛いほどだった。
昇山してくる者は王たらんと自ら恃むところのある者、あるいは王たるべきと周囲の人間に推挙された者だから、実際のところ次王は昇山してくる者の中に圧倒的に多い。
ひょっとしたら、泰麒は王を持つこと自体を恐れているのかもしれなかった。
麒麟は王を選ぶことによって一国の運命を担い、王はその生き方いかんによって麒麟の運命を担う。

王が道を踏み外せば、その報いは王を選んだ麒麟に向かった。王が進むべき道を誤ったために麒麟が病む、その病を失道という。いったん罹れば、ほとんど治癒の方法がない重い病である。ゆえに王は麒麟の生命そのものを握っていると言ってもいい。

己の運命を他者に委ねることの、恐ろしくないはずがなかった。

「こんなに早くには、昇ってこないに決ってる……」

己に言いきかせる口調だったので、汕子は黙っていた。

使令もなければ転変もできない。麒麟である自覚が薄い。自負を持てないのも無理はないから、逃げ腰になる泰麒を責められない。

「景台輔が……」

泰麒は視線を南西から外して汕子を見返した。

「おっしゃったでしょう。天がよいようにしてくださいます」

泰麒は再び視線を空に向けて、幼いなりに堅い横顔を曝した。

「……うん」

奇岩の上をゆく風は疾い。

七章

1

「泰麒、本日は離宮までお出ましくださいませ」
ついに禎衛が言ったのは、夏至をいくらも過ぎないころだった。
とうとうその日が来たのだと、泰麒は朝餉の箸を置く。
「……はい」
朝、いつもより早くに起こされ、汕子が用意した着物も、いつになく豪華なものだったから、何となく覚悟はしていた。
蓉可が軽く背中を叩く。
「そんなに緊張なさることはありませんよ」
「蓉可も一緒に行くの？」

蓉可は微笑んだ。
「参ります。ずっとおそばにおりますから」
「汕子も？」
否定されることを予感しながら問うと、案に相違して禎衛は頷いた。
「もちろんでございますよ。——ただ、汕子は隠伏して参ります。姿は見えずとも、必ず間近におりますから」
泰麒は落胆の溜息をついた。隠伏とは文字どおり姿を隠して潜んでしまうことだ。それでは手を握ってもらうことも、背中を撫でてもらうこともできない。
「……はい」

進香の女仙と禎衛・蓉可を始めとする十人ほどの女仙に囲まれて小径を歩き、蓬廬宮の果てにある門の前で泰麒は足を止めた。
目の前で女仙が門を外した。
門が開くまでに、泰麒は外に広がる荒涼とした迷路を思い出していたが、実際に門扉が開け放たれると外の様子は一変していた。
聳えた奇岩とそれが連なって作る緑のうねり、奇岩の間に広がった草地。そこには色が溢れている。天幕が張られ、無数の旗が立っていた。打たれた杭や垣、そこに繋がれた馬や珍

しい獣と、そこに干された馬具や掛け布。そして、種々多様な容姿、身なりの人間たち。
そこには忽然と町が現れていた。
思わず竦んだ泰麒の手を禎衛が取る。
「物怖じなさることはありません。気息を整えておっとり構えていらっしゃいませ」
泰麒は目線で頷き、背筋を伸ばして深い息をした。
禎衛に手を引かれて足を踏み出したとき、近くの天幕のそばに立っていた男が一行に気づいてその場に膝をついた。そこから波紋が広がるようにして、草原に散った人々がざわめきとともにその場に膝をついていく。
泰麒は禎衛の手をしっかり握って、前を行く女仙の簪が揺れるのを見据えて、無数の視線が薙いでいく苦痛をやりすごした。
「……大丈夫ですか？」
そっと後ろから蓉可が問うてきた。
「はい。……お喋りをしてもいいの？」
「構いませんよ。とにかくお気楽になさいませ」
「うん」
思ったほど堅苦しい儀式ではないらしい。それを思って、泰麒はちょっと息を吐く。
「これが全部？」

この問いには禎衛が答えた。
「いいえ。供の者が半分以上おりますから」
「……よかった」
見渡すと、鎧を着た者が多かった。ずいぶん若い姿もあり、同時に老人の姿も見える。多くが男だが、女の姿も少なくない。
「ずいぶん女の人がいるね」
禎衛は笑う。いつものような笑顔ではなく、どこか何かを控えたような笑顔だったから、禎衛も禎衛なりに緊張しているのだろうと思った。
「もちろんですとも。……泰麒は王と女王と、どちらにお仕えしたいですか？」
「分からない」
門から甫渡宮までは石畳が敷かれている。その両脇に大勢の大人が膝をついて首を垂れていた。それはひどく不自然なことに思われる。
「……どうしてみんな座っているの？」
「それが礼儀だからですよ」
禎衛はすでに、身分という言葉を泰麒がうまく理解できないのを呑みこんでいた。
「ぼくは挨拶しないでいいのかな」
「いまはいいんです。お話をするときに気になるようでしたら、お立ちなさいと言ってさし

あげてください」
「話をしてもいいの？」
「進香のあとでなら。きっと珍しいお話がたくさん聞けますよ」
「……大きな獣がたくさんいる」
「妖獣です。みんなあれに乗ってきたんですよ」
「へえ……」
トラのような獣がいて、ライオンのような獣がいて、馬や牛に似た獣がいる。
「妖獣も折伏するの？」
「妖獣は生け捕りますね。調教して馴らすんですよ。――さ、足元にお気をつけて。中に入ったら祭壇に一礼してくださいまし」
周囲を見廻していた目線を正面に戻すと、甫渡宮が目の前だった。
蓬廬宮のほとんどの建物とは違い、きちんと四方に壁がある。中に一歩入って、それで追ってくる視線が途切れて、泰麒はかなりのところホッとした。
中は天井の高い大きな広間が一つきり、正面に祭壇がある。それは寺院の本堂に雰囲気が似ていた。
禎衛に言われるままに一礼し、祭壇の前まで進んで香をあげ、そうして祭壇の右手、壁沿いに設けられた一段高くなった場所へ連れていかれた。和室でいえば八畳くらいの壇上の奥

は壁、三方には御簾が下がっている。いまは正面の御簾が上げられていて、壇上の奥にある椅子に座ると、甫渡宮の入り口から祭壇までが見渡せた。

そこからおとなしく女仙たちが進香を行うのを眺めるうちに、また視線が絡んでくるのを感じた。見ると、宮の入り口に大勢の人間が集まっている。進香が終わって女仙のほとんどが壇上に上がってくると、御簾が下ろされ、泰麒はようやく大きく息をついた。

「もうお楽になさって結構ですよ」

禎衛は笑い混じりに言う。

「……たくさんの人に見られるのって、落ち着かないね」

「すぐにお慣れになりますよ」

「汕子を呼んじゃ、だめ？」

「御簾が下りているときなら」

禎衛に言われて、汕子、と呼ばわる。すぐ足元からするりと身を起こすように汕子が現れて、その豹の身体に腕を廻してやっと落ち着いた。労うように頭を抱えてくれる腕が温かい。

「よほど緊張してらしたんですね。そんなに硬くなる必要はないんですよ」

禎衛は苦笑混じりだった。

「……頭では分かってるんだけど。——これからどうするの？」

「昇山した者が進香に入ってきます。帰るまでここでそれを眺めていらっしゃっても結構ですが、退屈なら外においでになって昇山の者とお話しになっても結構ですよ」

禎衛が言っている間にも、宮に進香する者が入ってきた。最初の一人が妙に硬い仕種で祭壇の前に進み進香を行う。

「泰麒、王気は？」

禎衛に耳打ちされて、泰麒は首を横に振った。分からない、の意だったが、禎衛はちゃんと了解してくれたようだった。

「これから泰麒には、ここまでしばしばおいでいただかなければなりません」

「こうやって、王様がいるかどうか、調べるんだね」

「さようです。もしも王がおられたら、あたしたちに耳打ちしてくださいまし」

「……はい」

進香を終えた男が壇上の正面まで戻ってきた。一礼して壇の下で膝をついた男は、父親くらいの年代の男だった。相撲取りのように太っていて大きい。壇下の女仙と言葉を交わす彼の声を聞きながら、泰麒は懸命に意識を凝らす。天啓が——それがどういったものかはまだ分からないが——ないかどうか。

禎衛が目線で問うてきたので首を横に振った。

天啓と思われる変事は何一つ起こらなかった。

2

泰麒はおとなしく進香を眺めていたが、二日で飽きた。

四日めにようやく外に出る決心がついた。

進香は午前の短い時間だけに行われる。泰麒は壇上に座って、それを眺める。最初のうちこそ女仙ではない人間が珍しく、雑多な容姿や身なりを眺めているだけで楽しかったが、すぐにただ座っているのが苦痛になった。

正午前には宮に帰ってもよかったが、ただ座っている時間の長いこと。

「……外に出てもいい？」

泰麒が訊くと、壇上の女仙は全員が嬉しそうにした。彼女たちもまた退屈していたのだろう。

「もちろんですとも」

蓉可も満面に笑みを湛えていた。

「ひょっとして、ぼくがそう言うのを待ってた？」

「そうでもありませんけどね」

蓉可は笑う。

「ちょっと飽きていたのは事実です。なにしろ、今朝ももう六回は南瓜大夫の顔を見ましたから」

女仙たちは一斉に忍び笑いを漏らした。

進香の者の中には、日に幾度となくやってくる者もあった。最初の日、一番に入ってきた男がその代表で、毎日泰麒が戻るまでに十度は進香にやってくる。どこかの大夫らしいが、赤ら顔が丸くて南瓜に似ているというわけで、女仙たちによって密かに南瓜大夫の名を献上されていた。

「外に出ても大丈夫だと思う？」

禎衛も笑みを浮かべる。

「大丈夫ですよ。あたしどももついておりますし、人も多い。いつぞやのような不心得者がおりましても、周りの者が先を争って助けてくれましょう。なにしろ誰も彼もが泰麒にいいところを見せたくてしようがないんですから」

蓬廬宮に忍びこもうとした愚者が、すでに十人ばかり蓬山の外に放り出されていたが、女仙の誰もそんなことを泰麒に知らせるつもりはなかった。

「……そう」

「取り囲まれて挨拶責めにされるでしょうけど、ここに座ってるほどの苦行じゃありません。ただ、早々にお言葉を掛けてやらなければ、とんでもない長口上を聞かせられる破目に

なりますよ」
「言葉？　話しかければいいの？」
「そうですね、もしも王がおられたら、古来のしきたりどおり、礼を」
「御前を離れず、詔命に背かず、忠誠を誓うと誓約する――？」
禎衛は頷く。
「はい」
「もしも、王じゃなかったら？」
「いまは夏至、至日ですから、中日まで無事で、とおっしゃるのが慣例です。中日でしたら、至日まで無事で、と」
「次の安闔日まで無事で、ということだね」
「さようです」
「どちらか、分からなかったらどうしたらいいんだろう」
禎衛はさらに笑った。
「そんなことはございませんよ」
「汕子も一緒でいい？」
「隠伏してなら。ただし、広場では決して呼び出さないでくださいまし。馬や騎獣を脅しますから」

壇上の女仙は泰麒を取り囲む恰好で、壇下の女仙の羨ましげな視線を浴びながら外に出た。壇の下に控えた女仙たちは、今日は一日そこにいて、進香する者を見守り、昇山の者たちに対応しなければならないのだ。

昇山の季節は、玉座を願う人々にとっても一つの大きな祭礼だったが、女仙にとってもまた一つの祭りだった。

女仙であることを後悔することは少ないが、寿命が長いだけ人生にも飽いている。夏至を越えて、どの女仙も身仕度に時間をかけるのは、なにも威儀を考えてばかりのことでもない。昇山の男たちを澄ました顔でからかうのは無条件に楽しかったし、そうこうするうちに本気になって、下山する男と一緒に下っていく女仙もいたりするのだ。

せっかく表に出たというのに、真っ先に駆け寄ってきたのは、くだんの南瓜大夫だった。宮の近くに控えていたらしく、泰麒たちが宮から出るなりすさまじい形相で駆け寄ってくる。

地響きを立てて膝をつき、平伏する際に勢いあまって額を地に打ちつけたので、押し殺した失笑が女仙のみならず出遅れた人々の間からも漏れた。

「ほ……蓬山公にはご機嫌うるわしく」

声がうわずっているのがおかしい。

「わたくしは戴国垂州司馬、呂迫と申すもの、そっ……そもそも馬州南擁郷は――」
平伏したまま早口で、しかもつっかえ、とちりながら言われるので、泰麒には延々と続いた口上のほとんどが聞き取れなかった。
「――ご高顔を拝謁なるは、光栄至極。公の万歳を祈念いたします！」
泰麒が困って蓉可を見上げると、蓉可は眉を上げて泰麒を見た。瞳の色を読み取って、叩頭平伏した男に声を掛ける。
「……中日まで、ご無事で」
男はぱっと顔を上げ、巨体の肩を目に見えて落とした。
「……そう……そうか。……さようか」
呟いたまま悄然としている。蓉可が笑いを噛み殺しながら泰麒の背を押した。
「さ、そのあたりを廻ってごらんなさいませ」

押されるままに男を何度も振り返りながら歩いた。少し離れたところで、女仙の一人が泰麒に囁く。
「いつまでも口上を聞いておられたので、まさかと思いましたよ、泰麒」
「……口を挟む隙がなかったの」
「ああ、よかった。泰麒の主があれでは、お世話した甲斐がありませんもの」

心底安堵した女仙の様子に、泰麒は首を傾げる。
「あの人では駄目なの？」
「天啓があれば、駄目もなにもありゃしませんけどね。ただ、仮にも王があんな南瓜では、戴国の威儀も地に落ちようってもんです。美丈夫である必要はありませんが、やはり見栄えがするにこしたことはなし。せめてもっと垢抜けた御仁がようございますね」
「そんな……ものなんだ」
蓉可は笑う。
「真面目にお聞きにならないでくださいな。要は天啓の有無でございますから」
泰麒にそう言った蓉可に、女仙たちが軽く食ってかかった。
「あれ、蓉可。そうは言うが古今東西、醜い王が立った例などあるものか」
「そうそう。顔に品格が出るということだろう。王になるべきお方は、見かけも王に足る品格があるもんだ」
「衆目がございますよ」
蓉可が低く囁いて、ぴたりと女仙が静まった。
それを笑って見渡した蓉可は、泰麒に向かって身を屈める。
「軽弾みな嘱りをお気になさいませんよう。泰麒はただ天啓をお待ちになればよろしいのですよ」

「……うん」

3

大勢の人間に取り囲まれた。さまざまな口上を聞かされたが、泰麒自身には何の変事も起こらなかった。

昇山の者は主従合わせて三百余り、玉座を試すために訪れたのは主人だが、その従者にも機会は等しく与えられている。

泰麒を見つけるなり駆け寄ってくる者もあったが、もの言いたげな視線を向けてくるだけで、話しかけてこない者もあった。会話せずともそこに王がいれば分かるものだと女仙に言われたけれど、天啓を示すものは訪れない。

話しかけられるにせよ、話しかけられないにせよ、いずれにしても期待に満ちた視線を裏切るのは同じように辛かった。

人の切れ間に深い溜息をつくと、蓉可がそれを聞き咎めて顔を覗きこんできた。

「お疲れになりましたか？」

「ううん。でも、たくさんの人を一遍に見たから」

「午を過ぎましたから、甫渡宮に戻りましょうか？　お休みになりたいでしょう。それと

も、もう蓬廬宮にお帰りになりますか？」
「……うん」
泰麒は頷いて何となく周囲を見渡し、視線を止めて蓉可の手を引いた。
「――蓉可。翼のある犬がいる」
ほど近い天幕の外に、馬に交じって巨大な犬が繋がれている。数人の男女がその乗騎たちの世話をしていた。
「天馬でございますよ。そばに寄ってごらんになりますか？」
「構わないと思う？」
「もちろんです」
言って、蓉可は泰麒の手を引き、その犬が繋がれた天幕に近づいていく。
犬は大きく、白身に黒頭、短めの翼を背に畳んだ様子が美しかった。
「……これは、蓬山公。ご健勝そうでなによりでございます」
世話をしていた男女のうち、近づいてくる泰麒たちを認めて真っ先に膝をついたのは大柄な女だった。
「この天馬はそなたの乗騎ですか」
「さようでございます」
「公にお見せくださいましょうか」

「喜んで」

女は笑って天馬のそば近くへ一行を促す。蓉可に押されておずおずと近づいてみると、天馬は見た目の印象よりさらに大きな生き物だった。

「……大きいんですね」

泰麒が呟くと、改めて天馬のそばに膝をついた女が答えた。乗騎の世話をしていた数人のうち、彼女が主人らしかった。

「これでも天馬にしては小柄なほうでございます」

「どうぞ、立ってください。――触っても構いませんか？」

「ありがとう存じます。――よろしければ、撫でてやってくださいまし。とてもおとなしゅうございますから」

女に言われて、泰麒はちょっと躊躇いながら手を伸ばしてみる。艶やかな毛並みは触れてみると見かけより硬い。首のあたりを撫でてやると、天馬は心地よさそうに目を閉じた。

「本当におとなしいんですね。……名前は何ていうんですか？」

「これは飛燕と申します」

飛燕、と呼んでやると、目を閉じたまま手に耳の下を摺りつけるようにする。

「噛んだりしませんか？」

「大丈夫でございますよ。もともと天馬は、妖獣にしてはたいへん気性のおとなしい獣でご

ざいますから。飛燕はとくに温和な性格ですし、噛んではいけない相手はちゃんと心得ているようです」

「えらいんですね」

泰麒はひとしきり女と天馬の話をした。どうやって手に入れたのか、どうやって飼うのか。騎乗した感じはどうなのか。

女の返答は明瞭だった。柔かな声で、柔かな言葉遣いで、それでも歯切れのよい返答は、どこか強いものを感じさせる。

実を言えば、泰麒にはまだ大人の年齢が見ただけでは判然としない。いくつぐらいの女なのかは分からなかったが、蓉可や禎衛の外見よりはずいぶん年上に見えた。

もっとも、ひょっとしたらそれは彼女の持つ雰囲気のせいかもしれない。女仙たちの持つ雰囲気とはあまりに隔たりがあるので、年齢まで離れているように感じられるのかもしれなかった。

女仙たちは概ね、たおやかで華やいだ外見をしている。ことに今は鮮やかな着物を着て、美しい髪飾りをしているのでなおさらそう見えた。

反対に女は渋い色の男物の服、赤茶の髪は結いもせずに垂らしただけで、装飾品はいっさい身につけていなかった。上背もあって、動作にもなよやかなところがどこにもない。綺麗な人だと思えたが、それは玉葉や女仙たちが感じさせるそれとは、ずいぶん違った種類のも

のに見えた。
「……ありがとうございました」
泰麒は名残惜しく飛燕の首から手を離した。
「いいえ。飛燕も喜んでおりましょう」
「あなたはどちらからいらしたんですか？」
「私は承州から参りました。承州師将軍李斎、姓名を劉柴と申します」
泰麒は少し目を丸くする。
一国には九州あって、州侯がそれを統治する。州侯にはそれぞれ掌握する軍があったが、これを州侯師、略して州師ともいった。軍の大きさは州の大きさによって違い、二軍から四軍、したがって将軍もまた二人から四人しかいない。
「将軍でいらっしゃるんですか」
それでは、女仙とはずいぶん雰囲気が違うはずだ。
「はい。及ばずながら」
気持ちのいい人柄だったので、落胆させるのは少し辛い。それでもどう考えても天啓に相当しそうなものは泰麒を訪れなかった。
「……中日までご無事で」
李斎は少し自嘲するような笑みを浮かべたが、それだけだった。すぐに元の笑顔で一礼を

する。

「ありがとう存じます。公もご健勝であられますよう」

「ありがとうございます」

他者を選別することは辛い。天啓が泰麒の好悪の情とはなんの関係もなさそうなだけに、いっそうなにやら切なかった。

「あの……また飛燕に会いにきてもいいでしょうか」

李斎は拘わりなげに笑った。

「もちろんでございますとも」

4

喧嘩に行き合ったのは、天馬と別れてあたりを一周した、その帰りだった。

前方に人だかりができていた。何事だろうと、女仙たちが囁き交わしたところに、喧嘩だ、と声がする。咄嗟に泰麒は蓉可の裾に縋りついた。

それがどんな種類のものであれ、暴力は総じて泰麒には恐ろしく感じられるのだ。それは血を恐れるのと同じ種類の恐怖だった。殴られることが怖いのではない。殴るという行為自体が恐ろしく、同時にそれを行う人間が身が竦むほど怖い。

「何の騒ぎです」

女仙が咎めるように声を掛けると、こちらに気づいた者が膝をついた。

「あ……あの――」

蓬山の主は血を嫌い暴力を厭う生き物だから、ここでの流血沙汰は絶対の法度である。理由如何によっては蓬山の外に放り出されることもあった。

「ええい、これだから戴国の者は油断がならぬ。ほんに血の気が多いのだから」

言い捨てて女仙は人垣に向かう。

国によって、国民性の違いとでも言うべきものがある。戴国の民は気性が激しいので有名だった。本来ならその気質は麒麟の中にも流れているはずだが、何事にも例外というものはある。

「おやめなさい！　ここをどこだと思っているのです！」

女仙の声に人垣が割れた。

人垣の中心にいたのは二人の男だった。

一方は長剣を翳した巌のような巨漢、一方はそれよりは小柄な、それでも堂々たる体格の拳を翳した男だった。佩刀しているが、抜いてはいない。それでも一目で小柄なほうの優勢が分かる。

目を引いたのは小柄なほうだった。

黒い鎧と白い髪の対比。肌はよく陽に灼けた褐色、上背が高く、体格も動作も恐ろしくしなやかで獰猛な獣のような印象を与えた。

人垣の中に駆けこんだ女仙が止めに入る間もなく、私闘は終わりを告げた。剣をかいくぐった拳が巨漢を仕留めたのだ。

巨漢は土を掻いたが、起き上がることができなかった。

男は倒れた巨漢を見やる。

「蓬山公の御在所ゆえ、剣は抜かぬ。公にお礼申しあげるがよい」

すこしも気負ったところのない動作、気負ったところのない声だった。

冷淡に言い捨てて振り返った男と泰麒の視線が合った。

――その瞳の真紅。あたかも血のような。

思わず蓉可の裾を握って退がった。泰麒は彼が恐ろしかったのだ。

蓉可を引いてその場を逃げ出そうとする前に、男のほうが近づいてきて膝をついた。

「いらっしゃるとは存じあげなかった」

目が和んで、少しだけ柔和な印象になる。それで泰麒はなんとかその場に踏み止まることができた。それでも蓉可の衣を握った手に力が籠る。

「無作法をいたして申し訳ない。どうかお許しを」

泰麒には返答ができなかった。代わりに蓉可が男に対峙する。

「蓬山で争いごとはお控えなさいませ」
「申し訳ございません」
泰麒の身体に廻された蓉可の手が、宥めるように動いた。軽く背中を撫でて、やんわりと前に押し出そうとする。
「もう大丈夫ですよ。喧嘩は終わりましたし、誰も怪我などしていません」
含めるように言われて、泰麒は頷いた。本人を前にして、この男自体が怖いのだとは到底言えなかった。
膝をついた男は李斎よりもさらに年上に見える。無造作に束ねて低い位置で括った髪は青みを帯びた白銀、そのせいで年長に見えるだけかもしれなかった。端正な風貌の目元が怜悧で、まっすぐに向かってくる視線が射るほど強い。
男は薄く苦笑した。
「すっかり怯えさせ申しあげたようだ。お詫びいたします」
「いえ……」
ようやく声が出た。
「少し、驚いただけです。……どちらからいらしたんですか？」
「鴻基から参りました。私は戴国禁軍、乍将軍と」
周囲の人間から軽くどよめきが起こったので、有名な人物なのかもしれない。

禁軍は王直属の軍だった。必ず三軍で、これに首都州侯――これは必ず麒麟が任ぜられる――の三軍を加えて六師という。麒麟はその性質上、軍の指揮などできはしないから、実際には王が麒麟に代わってこれを掌握する。それで、六師を王師ともいった。

「名を綜。字を驍宗と申します」

まっすぐに見つめてくる視線が怖い。何かを言わなくてはならないと、奇妙な強迫観念に捕らわれて、言わずもがなのことを口にした。

「……将軍でいらっしゃるんですね」

同じ将軍でも和やかな印象を与える先程の李斎とは違って、この男はどこまでも厳しい印象を与える。

それが驍宗と李斎の個性の差によるものか、それとも禁軍将軍と州侯師将軍という立場の違いによるものなのかは泰麒には判然としなかった。

「はい。剣技より他に取得もありませんゆえ」

口でそう言いながら、彼が自分のあらゆるものに自信を抱いているのが分かる。身が竦むほどの覇気。

一刻も早くこの場から逃げ出してしまいたかった。

これまでと同じように自分自身の様子を探り、どんな異変もないのを確認して、泰麒は密かに蓉可の衣を引く。

「……中日までご無事で」
やっとそれだけを言って、視線を断ち切り、会釈をした。それで、彼がそのときどんな表情をしたのかは分からない。
軽いざわめきが周囲からまた起こった。
「乍ではなかったか」
誰かのその声で、彼が泰王に目されていたのだと分かった。

5

「――驍宗？　ああ、王師の乍将軍ですね」
問うたのはその翌日、問うた相手は前日に会った李斎という女将軍だった。
彼女は落胆など毛ほども見せず、再び飛燕に会いにいった泰麒を歓待してくれた。女仙が従者と話しこんでいる間、泰麒は李斎と飛燕のそばに座っている。
「李斎殿も将軍でしょう？　お知り合いですか？」
李斎はいいえ、と否定する。
「私は将軍と言っても州侯軍の将軍。驍宗殿は王直属になる禁軍の将軍ですから身分がまるで違います」

州侯師の将軍と禁軍の将軍では、その身分に雲泥の差があると言ってよかった。禁軍の将軍ならば王宮に昇って王に直接対面ができ、朝議にも参加して政治の一端を担うことができる。州侯軍の将軍が単なる軍人であるのに比べ、禁軍の将軍ともなれば、王の重臣であると言っても間違いではない。

「では、有名な方なんですか？」

「ええ。たいそうな剣客でいらっしゃるから。軍兵の信望も篤い。直截苛烈だが礼を知り道を知る方だと聞いております」

言って李斎は泰麒を見返した。

「――驍宗殿に興味がおありですか？」

「……昨日、喧嘩に行き合って……」

ああ、と李斎は呟いた。

「どこかの命知らずが驍宗殿を怒らせたと聞きましたが、それですね。あれは相手のほうが悪い。ひどく驍宗殿を侮辱したと聞きました。そうでもなければ、たやすく私闘などなさる方ではありません」

「そうですか……」

李斎はまっすぐに泰麒を見る。

「驍宗殿が王ですか？」

泰麒は慌てて首を振った。
「そういうわけではないんです。ただ、とても怖い感じがしたので……」
李斎は意外なことに少し落胆したような表情を見せた。
「ああ……驍宗殿ではないのか……」
「昨日もそういう声を聞きました」
李斎は笑う。
「柔和な方ではなかろうが、怖い方でもないようですよ。立派な方だと思います。一軍一万二千五百の兵卒に、悉く尊崇されるのは並大抵のことではありませんから。敵も少なくはない方だが、味方にはこのうえなく慕われておられる。——それは、残念だな」
「李斎殿は驍宗殿の味方なんですね」
李斎はちょっと飛燕の毛並みを弄んだ。
「そう——お会いしたことはないが、尊敬申しあげておりますね。私も軍を預かる者ですから。驍宗殿が王なら納得できたと思います」
「そんなに強い人なんですか？」
李斎は頷いた。
「剣客といえば、一に延王、二に驍宗と言われます」
「へえ……」

「驍宗殿に比肩する者がいないわけではありませんが、彼には人望が篤い。軍才と徳と、両方を備えるのは稀なことです」

泰麒は頷く。

（……けれど、彼には天啓がなかった……）

「残念なことです」

これは李斎の本音だった。

禁軍の乍将軍がどれほどの逸材だか、軍に関係するもので知らぬ者はない。彼が禁軍の将を拝命したのは、禁軍においては破格に若い頃だったし、反乱の討伐に向かった驍宗を討伐された当の民衆たちが誉めそやすのも耳にした。

単に強いだけの将、単に徳のあるだけの将なら他国にもいくらでもいるが、両方を備えて、なおかつそれが他国にまで鳴り響くほどの人物は滅多にいない。

実際のところ、令坤門に駆けつけて、今回の昇山の者の中に驍宗がいるという話を聞いたときに、自分が玉座に就くことはあるまい、とそう思った。

温情ある将だ、よくできた人物だと周囲に煽てられ、担ぎ出されるようにして昇山したが、李斎とて己に恃むところがないわけではない。それでも、世間の風評を信じるかぎり、自分では驍宗にはかなわないと、そう率直に思えるだけのものが彼にはあった。

「本当に、残念だ……」

李斎の呟きに、泰麒は迷いながら言ってみる。
「ぼくは、李斎殿が王様だったらよかったな、と思うんですけど……」
李斎は破顔した。
「これは名誉なことを言ってくださる。ありがとう存じます」
「本当にそう思うんです」
「そうおっしゃっていただけるのは光栄に存じますが、あまり簡単にお心を許されませんよう。公に取りいって出世栄達を願う輩かもしれませんよ」
悪戯っぽく見つめられて泰麒はきょとんとした。
「まさか」
「どうして、どうして。そういう輩も多いもの。昇山の者の中には、端から玉座は諦めて、これを機会に公や王と誼を結ぼうとする者もおりますから」
「そんなものなんですか？」
「残念ながら。かく言う私も、公が戴国にお下りあそばしたのち、王師に召し上げてくださればと願う肚やもしれません」
泰麒は首を傾げた。
「李斎殿はそんな方ではありません。……と、思います」
李斎はさらに破顔した。

「公は本当に李斎が舞い上がるようなことを言ってくださる」
「そうでしょうか」
「そうですとも」
笑って李斎は腰を上げる。軽く衣服についた藁を払った。
「おつきの女仙方は話が弾んでおられるようです。——よろしかったら、李斎をお供に召し抱えて、そのあたりをお歩きになりませんか？」

八章

1

「蓉可、外に出てきてもいい？」
甫渡宮に着くなり、そわそわと訊かれて、蓉可は仄かに笑った。
「どうぞ。また、李斎殿のところですか？」
「いけない……？」
「いいえ。李斎殿はよいお人柄のよう。仮にも将軍でいらっしゃるのだから、腕のほうも頼りになりますでしょう」
そう許可を貰い、交代で壇上に詰める女仙たちに囲まれて泰麒は宮を出た。
日が過ぎるにしたがって、女仙たちにも昇山の者の中に顔見知りができてくる。一人二人

と立ち止まって話しこんでしまい、つき従う女仙の数が減ってゆく。蓉可さえもが李斎の天幕が見えるあたりで足を止めて、どこかの従者と立ち話を始めてしまったので、泰麒は残る距離を小走りに急いだ。

挨拶に捕まることは減ったが、何やかやと話しかけてくる者は絶えない。彼らに捕まらずに済む一番の方法がとにかく急いで行くことだと学んでいた。

「李斎殿」

声を掛けるより先に、李斎が天幕から出てきた。

「おいでなさいませ」

「来るのが分かった？」

「公がいらっしゃると、飛燕が嬉しそうに鳴きますから」

「本当に？」

「ええ。存外飛燕は、公が主だと思っているのかもしれません」

「まさか」

「さあ、どうでしょう。妖獣は喋りませんから、直接聞いたわけではございませんが」

笑いながら李斎は飛燕の首を叩く。

「どうだ？　飛燕？」

天馬はぷいとそっぽを向いて、泰麒の胸に頭を摺りつけた。李斎が苦笑する。

「ほら。私の申しあげたとおりでしょう？」

飛燕の毛並みを梳かせてもらって、泰麒は李斎と午まで散歩に出る。

李斎は泰麒の質問に丁寧に答えてくれて、珍しいものをいちいち示しては面倒がらずに解説してくれた。

知り合いにも紹介された。李斎が昇山してから親しくなった知人らしいが、その誰もが気持ちのいい人柄で、李斎とあたりを歩くのは無条件に楽しい。

「誰も彼も戴国の人なんですね。戴国以外の人はいないんでしょうか」

奇岩の根元に湧いた泉を取り囲むように広がった広場を歩きながら、泰麒が何気なく問うと、李斎は軽く吹き出した。

「――もちろんです。戴国の王は、戴国の者と決まっていますから」

「え、そうなんですか？」

「ご存じなかったのですか？」

李斎は少々呆れ顔だった。

「ぼくはつい最近まで蓬莱で育ったので、あまりものを知らないんです」

ああ、と李斎は頷く。

「そうでしたね。失礼を申しあげた。――王はその国出自の者、という決まりがあるんです

よ」
「じゃあ、ここにいる人はみんな戴国から来たの？」
「そうとは限りませんけれど。生まれが戴国ならそれでいいそうですから」
「へえ……」
李斎に手を引かれて歩きながら、泰麒はふと足を止めた。
「李斎殿、とても綺麗な獣がいる」
泰麒が見やった方向を振り返って、李斎は頷いた。
「ああ、騶虞ですね。――あれは見事だ」
それは虎によく似た生き物だった。素晴らしく長い尾の先まで、不思議な五色に輝いて見える。天馬がどこか柔らかな印象を与える生き物であるのに比べ、それはあくまで猛々しく強い。
「騶虞は最高の騎獣ですよ。一国を一日で駆け抜ける」
「すごい」
女仙から、一国は馬で一月の広さだと聞いていた。
「ええ。しかも主人によく馴れてとても利口です。勇猛で、戦場に連れるのにはこれ以上の獣はいない」
李斎は騶虞に近づいて見惚れるようにしている。

「――私も騶虞に会えるといいのですけど」
「騶虞が欲しい？　飛燕がいるのに？」
「欲しいですね。飛燕は馴れて可愛いけれど、性格が柔らかい分、戦場に連れるのは不憫です。私は武将だから、どうしてもそれが優先になる」
「……そうですね」
「蓬山の帰りにうまく出会えるといいのですが」
「会えたら捕らえて連れて帰る？」
李斎は笑ってみせた。
「そのつもりです。公にお会いするのも楽しみでしたが、それも楽しみだったのですよ、実は」
「へえ……」
「私財をありったけ投げ出せば購うこともできますが、買った妖獣は主を侮る。――いえ、そうでなくても、やはり騎獣ぐらいは自分の器量で捕らえたいもの」
「そうですね」
李斎は笑んで一つ頷いてから、騶虞の繋がれた天幕に声を掛けた。
「失礼をつかまつる。表の騶虞の主はおいでか」
「――訝都のことなら、私の乗騎だが」

突然掛かった声は背後から聞こえた。李斎は驚きを露にして振り返る。どこか身構えるような仕種だった。

「……驍宗殿」

あの男だった。今日は鎧をつけていない。それでも佩刀するのは忘れていなかった。忘れようのない、氷の白髪と、紅玉の目。

李斎は泰麒と驍宗を一度だけ見比べてから背筋を伸ばした。

「初にお目もじつかまつります。わたしは――」

「承州師の李斎殿であろう」

驍宗は軽く笑う。対する李斎は軽く目を見開いた。

「なぜ」

「将軍はご高名であられるのをご存じないらしい」

「やっぱり」

思わず泰麒が口を挟んで、李斎も驍宗も泰麒を振り返った。

「あ……、済みません」

驍宗は面白そうに泰麒を促した。

「やはり？」

「いえ……。李斎殿なら、さぞかし立派な将軍なんだろうな、って。何となく、そう思って

いたので……」
李斎は少し顔を赤くして驍宗を見る。
「公は私を買いかぶっていらっしゃるのです」
「なんの」
驍宗は笑う。
「公はお目が高い。そのとおりです。李斎殿は承州師にその人ありと謳われるお方」
「お信じにならないでください、公」
李斎がいつになく照れているのがおかしい。
驍宗もその様子を見て、軽く笑う。実際にそばにいて笑顔を見てしまえば、さほど恐ろしい人物とも思えなかった。

2

「して、計都にご用がおありは、李斎殿か、公か？」
驍宗は泰麒と李斎を見比べる。
「公がご覧になりたいと」
「公ならば計都にも異存はありますまい」

暁宗は騶虞を示した。

間近に寄ってみると、容姿よりもさらに印象的なのはその目だった。信じられないほど複雑で美しい色をしている。

「……あの、……この騶虞は暁宗殿が捕らえられたのですか？」

「ええ。騎獣を購うのは好きではないので」

「どうしてです？　妖獣を捕らえるのは危険なのではないのですか？」

ふと暁宗の口角が上がった。泰麒は僅かに身を退いた。どこか太い笑みは、泰麒を意味もなく怖気づかせるものをもっている。

「野にあるものに枷をつけて騎獣にするのだから、こちらも相応の犠牲を払わねば不公平というものでしょう」

「……ええ……はい」

暁宗は計都を愛おしげに撫でる。もうあの怖い笑みは消えていた。

「これは私が捕らえて手懐けた。剣とこれとが、私の宝です」

李斎は驚いたようだった。

「ご自身で調教なさったのか？」

「なんとか。調教師が悪いゆえ、いっかな私以外には馴れぬ」

笑って言って、暁宗は泰麒を見た。

「迂闊に手をお出しになりますな。よくよく言い聞かせてはあるが、万が一ということがある」
「……はい」
「そういえば」
李斎は驍宗を見る。
「驍宗殿の剣は先の泰王から拝領されたとか」
「ええ」
「たいそうな名剣と伺いました」
「さて、切れることは確かだが」
剣であるからには、飾りではない。——泰麒はそのことに思い至って身を竦めた。
驍宗は軍人だから、何かを斬ってそれを受け取り、何かを斬るためにそれを帯びているのだ。
「……やはり、お手柄で……？」
泰麒の問いに、驍宗は首を振る。
「軍功ではありません。以前、先王の御前で延帝に剣のお相手を願う機会があって」
「お勝ちになった？」
「負けました」

驍宗は屈託なく笑う。

「三本に一本しか取れなかった。先王はそれでも一本取ったことを喜ばれて、剣を下してくださったのです。——人を殺していただいた剣ではない。ですから宝なのですよ」

「やはり延王がお強いのですね」

「無礼を承知で申しあげれば」

またあの、どこか泰麒を物怖じさせる笑みが浮かんだ。

「私に五百年の寿命があれば、延王に後れはとりません」

言い放つ、苛烈なほどの自信。

軽口を叩いていればさほど怖いとも思えないのに、ときおり見せる表情が身を竦ませるほど怖い。

「私も騶虞が欲しいのですが……」

計都を李斎は見やる。驍宗はあっさりと返した。

「よい狩り場を知っている。お連れしよう」

「よろしいのですか」

「私もここでの用は終わった。ほかにすることもなし、後は安闔日まで騶虞を探していようかと思っていたところ」

「計都をお持ちなのに？」

「もう一頭騶虞がいれば、計都を半分休ませてやれる。三頭はなくてもいいが、二頭は欲しいもの」
「お気持ちは分かりますが、狩り場を秘密にしておられなくていいのですか？」
「そんなことをしても始まらぬ。欲しい者が行って捕らえてくればよい」
「狩り尽くされねばよろしいのですが」
暁宗は薄く笑った。
「なに、どうせ主になるだけの器量がなければ捕まらぬ」

暁宗と別れて、泰麒は深い息を吐いた。自分が実はひどく緊張していたのだと知る。
「どうなさいました」
「いえ……」
李斎は泰麒の顔を覗きこむ。
「公はやはり暁宗殿が怖くていらっしゃるのですか？」
「李斎殿は平気なんですね」
「敵に廻せば怖い方だろうな、とは思います。……そうですね、緊張させられる方ではある。正直なところを申しあげると」
「……やっぱり？」

「恐ろしいほど覇気のあるお方だ。犬だと信じて気安くしていたら、何かの折に実は狼だったと気づいてヒヤリとする、そういう感じがございますね」

それは泰麒の感覚をうまく表現しているような気がした。

「その感じはよく分かります」

李斎は呟いた。

「噂どおりの方のようだ。尋常の覇気ではない。……王でないのが惜しまれる」

「そうでしょうか」

泰麒には、驍宗はなにやら恐ろしすぎるように思われるのだが。

李斎は頷いた。

「王というものは、人柄がよければそれでよいというものではありません。優しすぎる王は国を迷わせるし、奥床しい王は国を乱れさせる。……本当に驍宗殿ならばよかったのですが」

「李斎殿はそれでいいんですか？」

見上げた泰麒に応えて、李斎は苦笑した。

「驍宗殿に会って、のこのこと昇山した己が恥ずかしくなりました。——あの方は私などとは器が違う」

3

「どうやら今回の昇山の中に、王はおられないようですね」
蓉可が言ったのは、夏至をひと月半も過ぎた頃だった。
夜、月は高く、かそけく虫の音がする。
「じゃあもう、明日は甫渡宮には行かなくていいの？」
蓉可は牀榻の中を調えながら頷いた。
汕子は無言で泰麒に着替えをさせている。
「ええ。離宮の大扉は閉めさせましょう。それでもう誰にも望みのないことが分かりますからね」
「あとはどうすれば？」
「どうなりと。外へ遊びに行きたいのならば、どうぞ」
「いいの？」
「構いませんよ。もう人目がございますからね。どうせ驍宗殿と李斎殿でしょう？　あのお二方がついておられれば心配ございません。汕子もついておりますし」
何となくあれ以来、驍宗とも必ず会っている。

李斎を訪ねて飛燕と遊んでから驍宗を訪ねる。それがいつの間にか習慣になっていた。相変わらず時にヒヤリとすることがあるが、その感覚にもずいぶん慣れた。慣れてしまうと蓬山に男は珍しいから、会わないと物足りないような気がする。

「ええと……」

泰麒は上目遣いに蓉可を見る。

「明日は、李斎殿と驍宗殿は黄海に騶虞を探しに行くんだって」

蓉可は眉を上げた。

「――それで？」

「……ぼくも行っては……駄目だよね、やっぱり」

李斎に誘われたものの、きっと女仙が許さないだろうとは言っておいたのだが。

蓉可は部屋の隅に控えた禎衛と目を見交わし、それから息をついた。

「よろしゅうございます。――泰麒のおねだりは滅多にあることでなし。ただしお怪我などなさって、あたくしどもの肝を冷やさせないでくださいましよ」

泰麒は破顔する。

「はいっ」

むしろ深夜に近いほどの早朝、泰麒は甫渡宮から李斎の天幕までを一気に駆ける。

あたりはまだ暗く、人の姿もほとんど見られなかったが、方々にある篝火のせいで広場は明るい。

「李斎殿！」

「――公」

すでにそこに鎧をつけて訐都を引いた驍宗の姿も見えた。

飛燕に鞍を載せながら振り返った李斎も初めて見る鎧姿、彼女は泰麒の後ろに女仙の姿を見つけて軽く頭を下げる。

「行ってもいいんだそうです」

李斎は笑った。

「それはようございました」

「飛燕に乗せてもらえますか？」

「もちろんですとも」

追いついてきた禎衛が端然と一礼をした。

「かけがえのない御身、くれぐれもよろしくお願いいたしますよ。李斎殿、驍宗殿」

李斎も驍宗も重々しく一礼を返す。

「お二人を信じてお出しするのですから、万が一にも公に危険のございませんよう。お手数とは思いますが必ず午にはお帰しくださいませ」

「かしこまりました」

禎衛は頷き、鞍の用意をされているのが天馬と騶虞だけなのを見てとる。

「随従はお連れにならないのですか」

「随従の馬では、午までに行って帰って参れません」

李斎が困ったように言うと、禎衛もまた眉を顰めた。

黄海は本当に危険な場所なのだ。五山は守護されているものの、黄海には無数の妖魔が住む。妖獣も捕らえて調教してしまえば主人の言うことをよくきいておとなしいが、野生のそれは、本来、人を襲う危険な生き物なのである。

しかも黄海には、妖魔以外にも無数の危険がある。流砂があり、瘴気をくゆらせる沼があり、落石の多い山がある。

「公には傷一つなくお帰しくださると、お約束くださいましょうか」

李斎は深く頷いた。

「お怪我をさせるようなことは決して」

「我らがお供できればよいが、女仙は玄君の許可なく五山を下ることができぬ。危険な場所は困ります。狩りをなさるにも、公の安全を第一に考えてくださいますよう。血の汚れも困ります。——よろしいか」

「ええ……はい」

李斎は困惑した表情を浮かべる。禎衛はそれに構わず、言葉を続けた。
「もしも已むを得ず妖魔を斬ることがあれば、どちらかご一方が公を連れてお逃げください。……たとえそれが一方を見捨てることになりましょうとも」
「……禎衛」
あまりの言いように、泰麒が軽く禎衛の裾を引っぱったときだった。
「我々は物見遊山に参るわけではない」
驍宗だった。顔にあの苛烈なものが浮かんでいる。
「妖獣を狩るとなれば、黄海の縁ばかりを往くわけにはまいらぬ。多少の危険はないとは言わぬ。お守り申しあげる自信があればこそ、お誘いしたまで。そこまで重々の念の押しよう、いかな蓬山の女仙方とはいえ無礼に過ぎよう」
禎衛は驍宗を見据える。
「……たいした自信じゃが、奢りでないと申せるかえ」
それを見返す驍宗の目のほうがいっそう烈しかった。
「たかが女仙にご心配いただくまでもない。公は我が戴国の麒麟。公の御身の安全を願うに、戴国の民以上の者があってとお思いか。それこそ女仙方の奢りと思うが、いかが」
睨みあうこと僅かののち、禎衛のほうが視線を逸らした。
「……確かに、お任せいたしましたよ」

「しかと承りました」
踵を返す禎衛を見やって、驍宗は騶虞の手綱を取る。
「――陽が昇ってしまう。参ろう、李斎殿」

4

天馬は素晴らしく速かったが、ほとんど揺れを感じさせなかった。
岩を跳び伝い、平地を駆け、倒木を跨ぎ越してもほとんど騎者に衝撃を感じさせない滑らかさは、到底動物の背に跨がっているとは思えない。泰麒はそれにひどく驚いた。
夜目も利くようで、岩や樹木が月光を遮る場所さえ、速度を落とすことなく駆けていく。
「……いかがですか？」
李斎に訊かれて、背後から泰麒を抱えるようにして手綱を握っている李斎を振り返った。
「まるで、麒麟みたいです」
李斎は目を丸くした。
「麒麟に騎乗したことがおありですか」
「ええ。……変ですか？」
李斎は苦笑する。

「畏れ多い経験をなさいましたね。――飛燕も麒麟と比べられては、さぞ恥ずかしゅうございましょう」
「そうなんでしょうか」
「そうですとも。公はご自身が麒麟だから、麒麟を軽く考えておられるのでしょう。私などは、麒麟に跨がるなど、考えただけで身が竦みます」
「へえ……」
そんなものなのか、と泰麒は思う。確かに、景麒という人物の背中に跨がっているのだと思えば、とまどう気分もあったが、畏れ多いことだとは思わなかった。
「こうして同じ鞍にお乗せしているだけで、畏れ多い気がいたしますのに」
微笑う李斎の顔を見上げて、そんなものなのだろうか、と首を傾げる。
意見を求めてすぐそばを走る計都のほうを見ると、李斎と泰麒の会話など耳に入っている様子もなく峻厳な表情で前を見ている驍宗の横顔が目に入った。
まだ、あの怖いものが驍宗の周囲に漂っている。彼は禎衛の言葉によほど怒ってしまったのだろう。
天馬に揺られて高揚していた気分がすっと萎んだ。
それは自分のせいだという思いがあったからだった。

飛燕と計都は黄海に深く入りこみ、岩山を軽々と駆けぬけて五山の北、恒山の麓に廻りこんだ。

殺伐とした岩の隆起が連なる丘で、先をゆく驍宗が計都を止めて鞍を降りた。まだ空には月がある。

「――驍宗殿、ここですか？」

飛燕を止めた李斎の問いに、驍宗は無言で頷いた。

泰麒は李斎に抱き降ろされながら、いっかな覇気の引かない驍宗の横顔を見る。

「あの……驍宗殿」

「どうされました」

驍宗の声音は突き放すような響きをしている。鞍に結んだ荷を解きながら、泰麒を振り返りもしなかった。

その背中に向けて泰麒は頭を下げる。

「さきほどは……女仙が失礼をしました」

驍宗は手を止めて、息を吐いた。ふと彼を取り巻いた覇気が衰えた。

「……公がお詫びになることではない」

「いえ、あの……驍宗殿にも、李斎殿にも本当にごめんなさい」

李斎は岩陰のほどよい場所に焚き火の用意をしながら笑う。

「気になさることはありません。女仙が心配するのも当然のことなんですから」
「いえ」
言ってから泰麒は二人を見比べた。
「……ぼくは病気の麒麟なんです」
二つの視線が集まって、泰麒は赤くなる。
「それはものの喩えなんですけど……」
泰麒は懸命に言葉を探す。
「禎衛は、李斎殿や驍宗殿を侮ったわけではないんです。そうじゃなくて、ぼくがあんまり頼りないんで、心配なんだと思うんです」
李斎は柔らかく笑った。
「公はかけがえのない方なのですから。そのようにご自分を軽くお考えになってはいけませんよ」
泰麒は首を振った。
「いいえ。――女仙が心配するのは、ぼくには麒麟らしいことが何もできないからなんです。たぶん、そうなんだと思います。……ぼくは、使令を持っていないんです」
驍宗も李斎も目を見開いた。一瞬、互いの目を見交わす。
麒麟は血を忌むので、自ら武器を持って他と戦うことができない。それは相手が妖魔であ

れ、獣であれ等しく変わらなかった。

そんな麒麟を本人に代わって守護するのが使令で、麒麟は無数の使令を持っているものだというのが常識だった。使令がいないということは、身を守る術がないことを意味する。

「それだけじゃなくて、ぼくは転変もできないんです」

これは驍宗と李斎をさらに驚かせた。

「本当なら使令をいっぱい持っていて、使令たちが守ってくれるはずなんですけど、ぼくにはそれができない。逃げるときだって麒麟になれれば逃げられるはずなんですけど、それができないから」

至らない自分を告白するのは、少し恥ずかしい。泰麒は無意識のうちに身を縮めた。

「それで女仙たちは、とてもとても心配してしまうんです。なんとか治してくれようとして、慶国の台輔をわざわざ呼んでくれたぐらいなんですけど」

いたらない自分がどれほど周囲の人間の心を痛めさせているか。にもかかわらず、どれほど深い愛情を注いでもらっているか。——それを考えると切ない。

「台輔も本当に一生懸命教えてくださったのに、ぜんぜん駄目だったんです。それで——」

驍宗が大きな手で軽く泰麒の頭を叩いた。

見上げると、柔らかな視線を向けられていた。ときに怖気づくほど怖い驍宗は、またときに呆然とするほど優しい顔をする。

「公の使令は、端からあてにしておらぬ。ご心配召さるな」
「あの……女怪ならいるんですけど」
驍宗は微笑った。
「それは心強い」
大きな、景麒のそれよりいっそう大きな感触の手が頭を撫でた。
「……はい」

5

「餌は何を使うんですか？」
泰麒は罠を張っている李斎に問うた。
「玉です。騶虞は特に瑪瑙を好みます」
李斎は鶏の卵ほどもある瑪瑙を出して見せた。
「こ、こんなものまで食べるんですか？」
李斎は笑った。
「猫のマタタビと一緒です」
「へええ……」

李斎は瑪瑙を泰麒の掌に載せて、驍宗を振り返った。
「少し寄せ餌を撒いておきましょう」
李斎は天馬に飛び乗る。
「寄せ餌？」
「瑪瑙の屑ですよ。——驍宗殿、公をお願いします」
「承った」
飛燕は大きく跳躍して、飛び立つ勢いで駆けていく。ようやく東の空が僅かに白む気配を見せていた。
狩りは夜中が最良なのだという。陽が高くなれば妖獣はあまり出歩かなくなるらしい。まだ夜明け前とはいえ、決して条件がよいとはいえないこんな時間に、二人が狩りをするのはひとえに泰麒の安全を考えてのことである。
驍宗は岩の間に打った杭に縄を掛けると、軽く手を叩いて立ち上がり、焚き火のそばの岩の上に長々と寝そべった計都のそばへ歩いていく。
「公、少し休まれぬか」
「はい」
驍宗は計都に凭れて、自分の脇を示す。それでおとなしく横に座った。
「捕まえられると思いますか？」

「さて。運次第だろうな」
「計都もここで捕まえたんでしょう？」
驍宗は頷いた。
「安闔日のたびに通って、六度目だったか」
「大変でした？」
「正直を言えば。罠にかけてからが、てこずらせる」
複雑な形に巡らされた鎖と縄がどういうふうに働くのだろう、と泰麒はしばらく想像をたくましくする。
「――公は私が怖いか？」
唐突に訊かれ、泰麒は驚いて驍宗を見上げた。
「……いえ……あの」
「ときおり、後込みなさるふうをお見せになる。ひょっとして死臭でも染みついていようか」
「そんなことはありません」
「では、私には麒麟を後込みさせるものがあるのだな」
驍宗は薄く苦笑した。
「麒麟は仁の生き物だという。どうやら私には仁に厭われるものがあるらしい」

「そんなことは……」
「武人ゆえ仕方がないか。仁とは遠い役目だから。……もしも公が私に欠けたものをご存じなら言ってはもらえまいか。自分の何が致らなかったのか、知っておきたい」
暁宗の声は静かなばかりだった。淡々と夜に溶けていく。泰麒は困惑した。
「……あの、そういうことではないと思うんです」
暁宗は問うような視線を向けた。
「ひょっとしたら、目の色が……血を連想させて怖いのかも……」
「気配りはありがたいが、それはあまり私に対して親切ではない」
静かに、それでも強く言われて暁宗の目を見返した。
「……うまく、言えないんです」
「どんなことでも、構わぬ」
「ぼくは、気が弱いんです。……きっとそうなんだと思うんです。覇気に乏しいとか、もっと自信をもつようにとか、女仙に言われるのですけど、どうしてもそういうふうなんです」
暁宗は無言で泰麒を見ている。
「暁宗殿はとても自信に溢れた方です。覇気、って実を言うとよく分からないんですけど、きっとあれを覇気っていうのだろうな、って。そういう……気配みたいなものをときどき強く表されるんです。——ぼくの言っているの、分かりますか？」

驍宗は頷いた。

「それでとても気後れがしてしまうんです。羨ましいのとはちょっと違って」

泰麒は計都のそばの焚き火を見つめる。

「……火って、暖かくて明るいものですけど、あんまり強いと怖いでしょう？　そんなふうに竦んでしまうんです。……たぶんそういうことなんだと思います」

自分でも自分の恐れがうまく理解できない。

「自分が情けなくなるわけじゃないんですけど、乱暴そうで怖いとか、そういう感じとも違います。血を見たときに怖いのとも、少し違う――」

言葉を探しても、見つけた言葉はどれも正しいとは思えない。もどかしくてもどかしくて、泣きたい気分になった。

「嫌な感じじゃないんです。大きな火は怖いですけど、綺麗だなとかすごいな、って思うでしょう？　それと一緒なんです。すごいなって、思うんですけど、それと同時になんだか竦んでしまって、それで」

ぽんと掌が頭に置かれた。

「お泣きになるな」

「済みません……」

「私こそ、詮無いことをお訊きしてしまった。申し訳ない」

「いえ……」
暁宗は柔らかく笑って、泰麒の髪を撫でつけた。
「公はよい御子だな」
「いいえ……そんな……」
「誠実でお優しい方だ。戴国はよい国になろう」
「そうでしょうか」
暁宗は頷いて、髪を撫でた腕を肩に廻してそのまま焚き火に目を向けた。
それきり何も言わなかったので、計都に凭れる代わりに暁宗に凭れて、泰麒もまた黙りこんでいた。

九章

1

「暁宗殿！」

火の粉を散らして松明の灯が岩場に駆けてくる。李斎を乗せた飛燕が戻ってきた。東の空がようやく白み始めようとしている。

「暁宗殿、妙な穴を見つけましたが」

「――ほう？」

暁宗は立ち上がった。

「少し離れた沼地の近くです。出入りした足跡がありましたが、それが騶虞のものではないかと」

「巣穴かな」

「やもしれません」
「行ってみよう」
李斎は泰麒を抱えあげる。飛燕に乗せた。驍宗もまた計都に騎乗した。
その穴は岩山の切れ間、暗い色の水とも泥ともつかぬものを湛えた沼地のほとりにあった。水際からずいぶんと離れたところ、侘しいばかりの草が申し訳程度に生えた地面に口を開いている。
降り立ってみると松明の灯に、穴へ向けて幾条かの足跡が続いているのが見つかった。
驍宗は計都を止める。たったいま計都が残したばかりの足跡と比べてみると、騶虞よりも大きな生き物のようだった。
「騶虞ではないかもしれぬ。——何だろう」
李斎は飛燕を降りて、穴の入り口を覗きこんだ。
大きな石が組み合ってできた穴の入り口は、李斎の背丈ほどもあった。穴というよりは岩と岩とが噛み合って、その隙間が作った隧道と言うべきだろう。
隧道は少し行った先で曲がっているので奥は見えない。
「先程少し踏みこんでみましたが、そうとう奥が深そうです。——入ってみますか？」
「龍が出るやもしれぬぞ」

「そう言えば、黄海の底にも龍宮があるとか」
驍宗もまた穴の奥を覗きこむ。
「そう言うが、さてな」
「黄海の底に向かうにしては少し小さいようですね」
「……さて、どうしたものか」
李斎は少し怪訝そうにした。
「入ってみないのですか？」
驍宗は返答する代わりに泰麒を見る。
「どうなさる？」
「あの……分かりません」
「では、少々中を覗いてみるか」
李斎はすでに中へ踏みこんでいた。
「先に参ります。驍宗殿には公をお願いいたします」
「分かった」
泰麒は軽い不安に捕らわれる。驍宗を見上げた。
「ええと……」
「怖いか？」

首を横に振ろうとしてやめた。泰麒は正直に言った。
「……少し」
「――どうなされました？」
李斎はすでに曲がり角にかかっている。
「今、行く。――公、私から離れぬよう」
「はい……」

それは岩山の下を貫いているように思われた。少しずつ下りながら紆余曲折を繰り返していく。風はないが、炎が揺れる。空気が通っている証拠だった。枝道と呼べるほどの枝道もなかった。
「……長いな」
驍宗の声は窃する。先を行く李斎が足を止めた。
「行き止まりです」
示した先は小さな広場になっている。歩いてきた隧道の床とは泰麒の背丈ほどの段差があった。
李斎は段差を飛び下り、岩の起伏が積み重なった広場を見廻した。
「……変だな、何もいない」

「いないはずはない。微かに何かの臭気がする」
泰麒は眉を顰めた。驍宗の言うとおり、何かの臭いがする。
それはひどく嫌な臭気だった。何やら胸騒ぎを誘う臭い。
李斎は広場の床面をなす岩を上り下りして、斜めに突き出た平らな岩のそばで身を屈めた。後ろ姿が一歩ずつ遠ざかるのが、泰麒にはひどく不安な気がした。
「ああ、さらに下る穴がある」
「それか」
驍宗は泰麒を抱きあげて段差を飛び下りる。一つ岩を上ると、遠目に李斎が覗きこんだ穴が見えた。
——その、暗い穴。
「何か……いる」
泰麒は呟いた。
「——え？」
驍宗も李斎も泰麒を振り返る。足元から震えが立ち上ってくるのを泰麒は感じた。鼓動が速まる。ひどい胸騒ぎがする。
「……戻りましょう。……そこは、よくない」
「どうなさった？」

泰麒は驍宗の手を引く。李斎に向けてもう一方の手を伸ばした。
「そこは嫌です」
李斎は驍宗と目を見交わし、それから笑って穴の縁に手をかける。
「中がどうなっているか、確かめるだけ」
「いいえ。——いいえ、駄目です」
泰麒は李斎を止めに駆け寄ろうとしたが、足を踏み出した刹那、岩の間から何かが現れて前を遮った。
「——行ってはいけません」
「汕子！」
驍宗は唐突に現れた人妖の姿に、咄嗟に柄に手を掛けたが、ほかならぬ泰麒がその人妖に抱きついたので力を抜いた。ではこれが、泰麒の言っていた女怪なのかと納得する。
李斎もまた驚いて、出現した白い人妖に目を見張っていた。岩に手を掛けたまま半身を泰麒のほうへ向けた、その李斎の腕に突然何かが巻きついたのはその時だった。
李斎は声を上げなかった。悲鳴を上げたのは驍宗の間近にいる子供のほうだった。
「——李斎！」
驚いた表情のまま、李斎の身体は頭から穴の中に引き摺りこまれた。あがく脚が一瞬目の中に焼きついて、我に返ったときにはすでに李斎の姿はない。

「――李斎――!!」
泰麒の声に応えるように、穴の奥から悲鳴が響いた。

2

驍宗は岩場を駆ける。李斎が呑まれた穴まで駆け寄った。
その暗い穴は下へ下っている。かなりの段差がありそうだった。
「驍宗殿!」
「汕子とやら、公を連れて逃げよ。計都に乗って蓬山に帰れ」
汕子は頷いたが、泰麒はすでに驍宗のほうへ駆け出していた。
「泰麒、いけません!」
走る子供を、汕子は跳躍して抱き止める。
「だって、李斎殿が!」
穴を示した泰麒を驍宗は目線で止めた。
「李斎のことは、私に任されよ。公は外へ」
「できません!」
驍宗は泰麒の声には返答せず、穴の底へ飛び下りた。泰麒は汕子の腕をかいくぐる。

「泰麒！」

泰麒は転がる勢いでその穴に駆けつける。伸ばされた汕子の手を払って、委細構わず穴の中に飛びこんだ。

――断固として、驍宗だけに行かせられない。

かなりの落差があったが、先廻りした汕子が泰麒を受け止めた。

「――泰麒」

「だめ！　逃げない!!」

汕子は思わず泰麒の身体に掛けようとした手を引く。なぜかその声に逆らえなかった。

――どうしたこと。

汕子は一瞬、状況を忘れて自分の手を見た。

泰麒は汕子の主人だが、今は何よりも泰麒自身の安全が優先する。泰麒を連れてこの危険な――危険の正体は不明だが――場所から逃げなければ。多少泰麒の言いつけを無視しても、多少乱暴な手段をとっても。

そう思うのに、泰麒を押し留めた腕は、軽々とかいくぐられてしまった。今も、思わず手を引いてしまった。

――なぜ。

泰麒には、そんな汕子に構う余裕はなかった。

穴の底はまるで鍾乳洞のような広い空洞になっていた。明かりは驍宗の持ちこんだ松明のものだけ、床に放り出されたその光では穴の奥行きは計り知れない。

すぐ前に抜刀した驍宗の背中が見えた。そしてその足元、いくらも離れていないところに倒れた李斎。

さらにそれから、李斎に覆い被さるようにした、巨大な闇。

それは闇の塊のように見えた。鎌首を持ち上げるようにして掲げられた闇の一部が、まっすぐに李斎を狙っていた。

「――饕餮!!」

それは汕子の悲鳴だった。

――なんということ。

汕子はまじまじと妖魔を凝視する。それを単なる妖魔と呼んでいいものか。非常識なほどの力と、ほとんどその姿を見られぬゆえに、すでに伝説の一部だとさえ信じられている妖。

汕子には守りきれない。――この世の誰だろうと、饕餮に対峙して、何かを守りおおせるとは思えない。

李斎が顔だけを上げた。

「――公、逃げて!!」
「できません!」
叫んだ泰麒を驍宗が突く。
「公は戴国に必要な方。ここで死んではならない!」
「ぼくだけ逃げるなんて、できません!」
悲鳴が上がった。
振り下ろされた鎌首が李斎を打ち据えて、さらにそのまま驍宗を襲う。
横に飛んで倒れた驍宗の頭上を掻いて、さらに大きく振り上げられた。
――止めなくては。あの恐ろしい凶器を止めなくては。
(どうやって?)
考えるより先に身体が動いた。
――剣印抜刀。
「臨兵闘者皆陳烈前行――!!」
(止めるだけなら)
影がぴたりと動きを止めた。
(それから……どうするんだったか)
叩歯。――これは震えでままならない。

闇の一部が振り返った。低い位置に松明の火を照り返す二つの目がある。
視線が合った。——合ってしまった。
「……逃げてください」
その双眸を睨み返したまま。一体どれだけ持ちこたえられるか。
「汕子、李斎殿を」
「——泰麒」
「李斎を連れていって！」
——まだ、と汕子は歯噛みをする。
泰麒の言葉に逆らうことができない。
汕子は倒れた李斎に駆け寄った。
血に濡れた身体を抱えあげて駆け戻り、泰麒に一瞥をくれて穴の外に飛び出していった。
「……驍宗殿も。今のうちに、逃げてください」
倒れた驍宗は視野の中にいない。怪我はないのか、確かめる余裕さえなかった。
淀んだ血の凝りのような、二つの目を見返す。
「お願いです……！」
低い声で返答があった。
「できぬ」

もう一度懇願するゆとりが、泰麒にはなかった。
視線が圧力を持つものであることを、初めて知った。
押し寄せる力と、押し戻す力と。
二つの力が充満して空洞の中の時間が凍結した。

3

(汗が……)
二つの目を見据えたまま、もうどれだけの時間が経ったのか分からない。
額を流れた汗が鼻梁に沿って流れていく、その感触。
ただひたすら浅い息を繰り返して。
(……額)
眉間がいつからか疼く。熱く堅いものがそこに埋めこまれている。
疼痛を訴える場所から落ちていくのは、本当に汗だろうか。
(もう、目が)
視力はとうに失っている。
押し寄せてくる力を頼りに相手の目があるはずの場所を見据えているだけ。

その力の方向を探る術さえ失われようとしている。
（時間は……）
どれだけの時間が経った。
泰麒はさっきからそれを無意識のうちに気にしている。
（あと……どのくらい）
なぜそれが気になるのかは、分からない。
ふいに抵抗を感じた。
まっすぐに前に向かっていた力が、何かに遮られるような感触。あるいは粘りつくような感触。
（時間……）
なぜ時間が気になるのか。
さらに抵抗が増して、泰麒は目を見開いた。
なぜなのかを悟った。
それが分かった瞬間、額に亀裂が入った気がした。吸った息が鼻梁の奥から喉を灼く。
饕餮の視線が揺らいだ。粘りが増す。力がうまく相手の力を押し戻せない。惧れた瞬間がやってくる。
――生気が死気に転じるのだ。

「驍宗殿……」

驍宗はいるのか、いないのか。いるとするならどこにいるのか。

「逃げてください……」

きっともう、いくらももちこたえられない。

静かな声が背後から聞こえた。

「……おそれながら、できません。足が動きません」

小さな麒麟は目を見開いた。

気が逸れる。

——まさに死気に転ずる一瞬。

「傷を負いました。動けません。——お助けください！」

萎えたに見えた覇気が一瞬のうちに再燃した。

以前よりもずっと危うい均衡で、その場の力は膠着した。

（……汗）

額を伝い落ちていくもの。

（ほかに……方法がない）

驍宗の気配を感じる。身動き一つなく、それでも自分に注がれている視線。

（捕らえるしか、ない）

驍宗は動けない。泰麒もまた、動くことはできない。

（下れ……）

初めて念じた。

（使令に下れ……）

ふいに闇が身動きをした。――その気配を感じた。

押し寄せてくる力が緩んだ。

生まれる、微かな余裕。

（使令に、下れ）

さらに相手の力が弱まった。

瞬きをする余裕。同時に汗で濁った視野が澄む。

凶器を振り上げたまま硬直した相手の姿が見えた。

強い力を放つ双眸はそのまま、闇は形を変え始めた。

それは震え、萎縮し、巨大な空洞を満たすほど巨大な鬼に転じた。

恐怖は感じなかった。さらに余裕が生まれた。金属で固めたように張り詰めた自分の四肢をようやく意識した。

「下れ……」

闇はさらに凝縮するようにして、あまりに大きな牛の姿へ。
さらに、虎へ。
さらに、大鷲へ。
さらに、大蛇へ。
千変万化。——その尋常でない力の証。
やがて目の前に端座した小形の犬が姿を現した。
「……使令に下れ……」
大天井を指した手で天を受ける。
ふと、視線を押し戻してくる力が失せた。抵抗を失って何かがまっすぐに駆けていく。天を受けた掌から巨大な力が流れこんできて束縛を引きちぎって駆け抜けていく。
「——鬼魅は降伏すべし、陰陽は和合すべし」
掌から音の洪水が脳裏に押し寄せてきた。
ゴウ。郷、剛、嚆、号、業、豪、強。
音が渦巻いて脳裏に形を描く。
人。あそぶ。出る。風に。旗、なびく。鞭、打ち、叩く、水。——溢れて。
「急急如律令——！」
ただ一つの直感。

「下れ！　――傲濫!!」

犬が立ち上がった。

半ば朦朧としながら芝犬のようだ、と思う。すると闇は、歩くにつれてさらに縮まり、茶の毛並みを現した。

仔犬なら、もっといいのに。足の先だけが白い犬。

――思うと本当にそのように変じた。

泰麒の足元にそれがやってきて再び端座したとき、それは故国で見た芝犬に寸分違わなかった。

「……傲濫」

身を屈めると、仔犬は泰麒を見上げて尾を振る。手を差し出せば、温かな舌で指先を舐めた。

抱き上げて抱きしめる。すとんと足腰から力が萎えて、泰麒はその場に座りこんだ。

4

「信じ……られない」

人ではなかった己の実感。

泰麒は人ではなく、獣でもなく、巨大な——あまりに大きな力の一部だった、その感触。
（ぼくは人ではない）
麒麟であるということの確信。
（本当に、人ではなかったんだ……）
麒麟と呼ばれるものがどういった種類の生き物なのか、直感した。
天の一部であるもの。だからこそ天意を理解し、具現できるのだということ。
——迷いがあった。どこかで自分が自分以外のものであることを、信じきれていなかった。
やっと理解した。
自分が、いままで「自分」だと信じていた枠組みを大きく超えた生き物であること。それは天に直結し、卑小な自分の殻の中に、大きな力を注いでくれる。
「私こそ信じられぬ……」
ふいにどこか掠れた声がして、ようやく泰麒は我に返り、この場にいるのが自分だけではなかったことを思い出した。
慌てて振り返ると、驍宗は岩の間に座ったまま呆然としているように見えた。
「饕餮をからめとる麒麟があろうとは……」
泰麒は萎えた足で立ち上がった。

いまになって足が震えて、まっすぐに歩くことが困難だった。
「大丈夫ですか？　お怪我は」
「いや……」
腕に傲濫を抱いたまま、ぺたりと驍宗のそばに座りこむ。松明の灯はすでになかったので、身を屈めた。どこか岩の間の亀裂から光が漏れているらしく、穴の中は暗いものの、真の暗闇というほどでもない。
傷の程度を量ろうと、顔を近づけて見廻したが、驍宗の身体のどこにも傷は見出せなかった。
「痛みますか？　どこか折れたんでしょうか」
仰ぎ見た驍宗は、しかし首を振った。
「どこも。――どこにも怪我などありません」
血の色のまなざしが意味深い。
「……嘘を申しあげて失礼をした」
泰麒はきょとんとし、それから驍宗の意を理解した。
「驍宗殿……」
逃げよ、と強く言われたとき、驍宗には分かった。

――動いてはならないのだということ。

自分が動けば、必ず泰麒の気が緩む。緩んだ瞬間にすべてが終わってしまうだろう。全身全霊で饕餮を留めている麒麟に、安堵する隙を与えてはならなかった。

そしてまた、身動きをしてはならない。

断固として麒麟の気を散らすようなことをしてはならないのだと、そう了解していた。

それでその場にじっと座り、気配を殺してただ泰麒を見据えていた。

小さな子供がどういった方法でか、名にしおう妖魔を押し留めているのを黙って見つめながら、泰麒が覇気と呼んだものを理解していた。洞窟に満ちたものを、それ以外のどんな名前で呼べばよかったのか。

そうしてたぶん、泰麒と同じ気分を実感していた。

自分でも驚いたことに、驍宗は目の前の子供に畏れを感じていたのだ。

「お助けくださり、ありがとうございました」

「いいえ」

泰麒は首を振る。

驍宗を背後に庇っていなければ、自分は必ず傲濫の覇気に呑まれただろう。

だがしかし、泰麒がくじければ驍宗の命もなかったのだ。逃げもせず動きもせず、じっと座って留まっていた、その胆力に感嘆する。

「ぼくのほうこそありがとうございました。……驍宗殿はすごいなあ……」
「その言葉はご自身に言ってさしあげなさい」
驍宗は微笑って、泰麒の汗を含んで重くなった髪を梳く。
「見事なことだ。……戴国はよい麒麟を得た」
泰麒は目の前で柔らかな視線を向けてくる男を見上げた。
（ぼくは、間違いなく麒麟なんだ……）
労ってくれる手が本当に優しく、それでかえって胸の中に穴を穿たれるような心地がした。
（では……驍宗殿は確実に王ではない）

5

「ええい、何が起こってかい」
禎衛は固く爪を噛む。傍らに立った蓉可はすでに顔色がなかった。
「まだ李斎殿は気がつかいでか！」
李斎の従者はおろおろとするばかりだった。
明け方、人妖が抱えて戻ってきた李斎には意識がなく、ただ無惨な傷痕だけがあった。当

の人妖は李斎を置くと、委細の説明をせずにいずこへか消え去ってしまった。
それだけでも肝の潰れる思いがするのに、そのうえ女仙の叱責。頼みになるはずの主人は、夕刻も近いというのに未だ意識が戻らない。
「李斎殿を信じてお出ししたのに、その李斎殿が帰って、泰麒がお帰りにならぬとはどういうことかえ」
そうは言われても、ただ平伏するしかありはしない。
「もしも万が一のことがあってみや。その時はその女もお前たちも、決して生かしておきませんぞえ」
さすがに周囲の女仙が咎めようとしたときに、ふとざわめきが聞こえた。
「――なにか」
見廻した禎衛に、女仙の一人が遠方を示した。
「騶虞が、あれに！」
「……驍宗殿！」
陽射しを浴びて白く、騶虞が駆けてくるのが見えた。
後ろには天馬を従えている。李斎の随従が声を上げた。
「飛燕！」
鞭のように長い尾を引いて駆けてきた獣と飛燕とは、一足に近くの天幕を飛び越えて、音

もなく人垣の近くに着地する。騎乗した驍宗と、驍宗に抱かれた子供の姿が見えて、どっと歓声が起こった。

「――驍宗！」

禎衛は人垣を掻き分け、騶虞のそばに駆けつけた。

「一体何が起こってか！　どういう――」

叫びかけた禎衛を、驍宗が黙るように示す。

「泰麒は……」

「おやすみです。どうかお起こしになりませんよう」

そっと言われて、禎衛はそばに忍び寄った。惧れていたような傷もなく、ましてやどんな災難の痕もなく、子供は驍宗の腕の中で眠っていた。禎衛はようやく力を抜く。

「……ご無事でいらっしゃったか……」

驍宗は泰麒を抱いたまま乗騎を降りた。

「よろしければ、このまま宮までお連れいたそう」

「その前に、何があったか申してみや。場合によっては許しませぬぞえ」

驍宗は笑った。

「公は、お疲れになっただけでしょう。計都にお乗せするや否や、眠ってしまわれた」

「……こんな時間まで。午にお帰しくだされとお願いしたはず。お恨みしますよ」

「申し訳ございません。――宮にお連れしてもよろしいか。お起こしするには忍びない。事情は道々」

どこか含みのある言葉に、禎衛は周囲を見渡した。興味深げな衆目に気づいて、とりあえず頷いた。

「……ああ、ではお願いいたしましょう」

禎衛は女仙を促し、先に立って門へ向かう。驍宗を蓬廬宮の中へ招き入れた。

「――それで。どういうことです」

迷路を辿りながら問う。

「折伏に時間が」

禎衛は目を見開いた。蓉可を始め、背後に従った女仙がざわめいた。

「折伏……？　泰麒が？」

「公ご自身から、使令は持たぬとお聞きしたが」

「ええ……。そうです。そのことは……」

「むろん、誰にも申しあげません。戴が侮られるのも我慢がならぬ話、しかもすでに公は使令を持っておられる」

禎衛は微笑う男と、眠った泰麒を見比べた。

「では……？」

「見事に使令に下された。夜明け前から睨み合っておられたが」
禎衛は深い息を吐く。何重もの意味で安堵した。
「そう……だったのですか。そうとは知らず無礼を申しました。お許しくだされ」
「いいえ」
笑った男の腕の中に目をやる。
よほど疲れたのか、こころもち眠った顔色が悪い。——だが、そんなことは何でもないことだ。ゆっくり休ませてやればすぐに回復するだろう。
折伏ができたのなら、転変も可能に違いない。
これでもう蓬山公に傷はない。泰麒が悩むこともなければ、その場凌ぎの慰めを口に上らせる必要もないのだ。
「……よかったこと……」
「——さすがは黒麒と申しあげるべきか。……饕餮です」
禎衛は瞬間、驍宗を見返した。
「いま、何と？」
「饕餮を使令に下された、と申しあげた」
「……そんな莫迦な」
女仙の間から悲鳴に似た息が漏れる。

それはありうべからざることだ。饕餮は使令にならない。麒麟に折伏できるような生易しい妖魔ではない。

「私も驚きました」

驍宗は抱えた子供に視線を落とす。深く眠っているのだろう、睫毛の先まで死んだように動かない。

「たまたま八卦がうまく働いたにせよ、並の麒麟ではあらせられぬ。……先々が案ぜられる」

「失礼な」

「お気に障ったならお詫び申しあげる。——他意はござらぬ。ただ、あれほどの力があって、無自覚なのがなにやら不安な気がしたまで」

禎衛もまた眉を顰めた。

「これを機会に、自信を持ってくだされればよいが。——私を守ろうとして必死になってくださったようだが、守るものがなくては必死になれぬのだとしたら、それは危険なことに思われる」

「ええ……」

「あれほどの力をお持ちにしては、覇気が薄い。ご自分に自信がおありでないのか、それともほかに理由があるのか……。いずれにしても、今後のご成長が楽しみなような、不安なよ

うな」

「ご心配には及びませんとも」

「そうであらせられればよいが。……これを言うのは戴国の民としては許されぬことやもしれないが、できるだけ長く蓬山におられたほうが公ご自身のためであろう」

禎衛はまじまじと驍宗を見た。

この男はものの道理を分かっている。天啓のないのが、惜しまれるほどだ。

驍宗は抱えた子供を見やった。

「それにしても、みごとな麒麟だ。……無念だな」

十章

1

「李斎殿、お加減はいかがですか？」
泰麒が天幕の中を覗きこむと、横になっていた李斎が身体を起こした。
「――公」
随従は最小限、長い旅があるのだから、持ち運びを考えて天幕は決して贅沢なものではない。内部のしつらえもごく簡素で、辛うじて必要なものが揃っているだけだった。ただし、蓬山は気候がよい。とりあえず中の様子が見えない程度のものでよかったから、薄く軽い布地で設けられた天幕は、その分ずいぶんと広かった。
その天幕の奥、やはり簡素な寝床の上に身を起こして、李斎は上着を引き寄せて羽織る。
泰麒はそれを留めた。

「どうぞ、寝ててください」
言って泰麒は、天幕の中に控えていた随従に水差しを渡す。
「今日は女仙のお遣いで来たんです。――これを」
李斎は無礼にならぬ程度に衣服を調えて頭を下げた。
「ありがとう存じます」
随従にすすめられて李斎の間近に座り、泰麒は彼女の顔を覗きこんだ。
「傷の具合はいかがですか？」
「いただいている仙水のおかげで、すっかり痛まなくなりました」
「……よかった」
息を吐くようにして言ってから、泰麒は首を傾けた。
「傷が残らないといいのですけど」
李斎は微笑う。
「どうぞそんなにご心配くださいませんよう。女仙方のご好意で仙水もいただいておりますし、もともと私は仙人のはしくれですから、たいそうな怪我に見えても大したことはなかったりするのです」
泰麒は李斎を見つめて不思議そうに瞬いた。
「……仙人、なんですか？　李斎殿も？」

「州侯師でも、将軍になれば仙籍に入って仙人になります。そうでなければ州侯のおそばに仕えることができませんから」

「どうしてですか？」

今度は李斎が驚く番だった。

「ご存じないのですか？　州侯も人ではなく仙ですから。州侯の城には仙人でなければ出入りできませんし、そもそも州侯はたいへんな長寿でいらっしゃるので、そばに仕える者も、ただの人では長くお役に立てません」

「はあ……」

本当に理解できていない様子に、李斎は呆れた。この麒麟はつい先頃まで蓬莱で育ったのだとは聞いていたが、蓬莱には仙人がいなかったのだろうか。

「神仙には本来、寿命がないのです」

「そうなんですか？」

李斎は軽く溜息をついた。

「……公も神仙の一人ですよ。お分かりですか？」

「ぼくも、ですか？」

「そうです。そもそも王が神籍の方、いったん王になると歳をとることもなければ、よほどのことがないかぎり亡くなることもない。——少なくとも、ご病気で亡くなるようなことは

まずありません」
「そうだったんですか」
「麒麟も神籍の生き物です。王と同じように老いもなければ、病もない。傷にも強いし、めったなことでは亡くなったりしません。もっとも、麒麟だけが罹る病というものもありますけれど」
泰麒はきょとんと目を見開いて、しばらく何かを考えるようにした。
「……じゃあ、ぼく、このまま歳を取らないんですか？」
「大人になってしまわれると、そのまま歳を取らないのだと聞いています」
「……それは……ちょっと変な感じですね……」
「女仙たちは自分たちにも老いも病もないので、お教えするのを失念していたのですね。——とにかく、そうなんですよ」
「はあ」
「仙人は王が任じます。普通、王のそば近くに仕える者や、州侯、州侯の側近はぜんぶ仙人です」
「王様だけ長生きでも仕方ないですもんね」
李斎は苦笑する。
「さあ、理由までは存じあげませんが。——仙にも、老いも病もありません。ですが、これ

は仙人でいる間だけのことです。神籍と違って、仙籍は出入りができます。仙人になったり、仙人を辞めたりできるんです」

「仙人を辞めると、普通に歳を取りますか？」

「そのようですよ。あまり自ら辞める者はおりませんけどね。たとえば私のように将軍職を賜って、それで仙籍に入った者は、将軍を辞めたり辞めさせられたりしたときには仙籍を返上します。そういう、王から仙籍を賜って、王の下で働く仙人を地仙と申しますが」

「へえ……」

「それ以外の――自分で誓願を立てて仙人になった者や、王に任ぜられても特に王に仕えていない者、そういう仙人を飛仙と申しますね。蓬山の女仙は飛仙です」

「そうだったのか……」

言って泰麒は息を吐いた。

「前に、禎衛に歳を訊いたことがあったんですけど、禎衛は覚えてない、って言うんです。ひょっとしたら、本当に覚えてないくらい長生きをしてるのかもしれないんですね」

「かもしれませんね」

李斎は軽く笑う。

「――ですから、私の身体のことも、さほど心配いただくことはないんです。普通の人よりもずっと丈夫なんですから」

「よかった」
「私などより、公はいかがですか？　もうお身体はおよろしいのですか？」
「はい、すっかり。ぼくのは、疲れたのと、ちょっと血を見てびっくりしただけですから。本当はもっと早くにお見舞いに来たかったんですけど、女仙がなかなか出してくれなくて」
「……面目ございません」
恥じ入って俯いた李斎の顔を、泰麒は覗きこむ。
「李斎殿のせいじゃないです。ぼくが麒麟のせいなんです」
「……いいえ」
李斎は首を振って、それ以上は口にしなかった。
黄海を侮っていた。そこに住む妖魔の中には到底李斎程度には太刀打ちできない者もいることを失念していた。なまじ腕に覚えがあって、よほどの妖魔でも斬ってのける自信があっただけに、用心を怠った。
――そうして、同じ将軍職を賜る者として、驍宗に対する意地がなかったとはいえない。危険かもしれない場所だとどこかで分かっていながら、躊躇して意気地のない奴よ、と思われたくなかった。
「申し訳ございません」
「あの……本当に李斎殿のせいじゃないですから。あんなところに饕餮がいるなんて、誰に

も分からなかったことだし、李斎殿は自分を盾にしてぼくを逃がそうとしてくださったんだし、それにあのおかげで、使令を下すことができました」

李斎は熱心に言いつのる子供を見返す。

「……公はお優しくていらっしゃる」

「本当なんですよ」

真剣な顔で訴える麒麟に、李斎は微笑んだ。

「それよりも仙水をありがとう存じます。おかげさまでなんとか中日には下山できそうです」

泰麒はちょっと目を見開いた。

「……下山……」

――考えてみれば当然のことだった。

李斎は女仙たちのように蓬山に住んでいるわけではない。次の安闔日は秋分、黄海の南東にある令巽門が開く。

逆算をしてみて、李斎が蓬山にいられる日々が半月を切っているのに気がついた。

……そして。

李斎の天幕を出、声を掛けてくる人々に生返事をしながら歩いていた足を止めた。

(そして――)

2

「どうなされた」
肩に手を置かれて、我に返ると驍宗だった。無意識のうちにいつもどおりの道を歩いていたらしい。
「ああ……驍宗殿」
――そして、驍宗もまた、それだけしかいられない。
それはひどく動揺することがらだった。李斎も――驍宗も山を下ってしまう。
ぼうっとしていた自分が気恥ずかしく、泰麒は無理にも微笑って、それからふと眉を顰めた。驍宗が黒い鎧を身につけているのが目に入ったからだ。それは、蓬山で最初に会ったとき、そうして騶虞を狩りに出かけたとき、それ以外には身につけられなかったものだ。
「お身体はもうよろしいのか？」
「……はい」
「どうなされた。難しいお顔をしておられる」
泰麒は一瞬、口籠り、そして息を吐いた。
「秋分までもうひと月ないな、と思って……」

ああ、と驍宗は頷く。

「下山の時節になりました。腕に覚えのない連中は数を頼みに下ろうと、下山日を決めようとしているらしいが」

「……そうですか」

言って、泰麒は改めて驍宗の姿を見た。

「どうなさったんですか？　鎧をおつけになって」

「ああ、これは――」

言いさして、驍宗は泰麒の前に膝をつく。

「ちょうどお会いできてよかった。私はこれから下山いたします」

「――え……？」

泰麒は呆然と驍宗を見返した。血の気が引くほど、その言葉は衝撃的だった。

「李斎殿に挨拶しようと思っていたところ」

「……これから……？」

驍宗はこともなげに笑う。

「はい。道中、騶虞を探すつもりゆえ。同行したいと申すものも幾人かおりますし。……ひょっとしたら、このままご挨拶もままならないかと思うておりましたが。お会いできてよかった」

見廻してみると、すでに驍宗の天幕はなく、乗騎を繋いだ杭も抜かれて地は平らに均されてしまっていた。

「こんな時間から、ですか……？」

「今度は馬が一緒だから、いまから下らなくては夜までに黄海に着けません」

「でも、夜の黄海は危険なのでは」

驍宗は立ち上がりながら笑う。

「夜でなければ、騶虞も寝ております。狩りをするつもりなら夜に旅をしなければ」

そんな危険な、と思い、すぐに驍宗は騶虞を狩ることに慣れているのだと思い出した。彼は何度もそのようにして黄海に入ったのだ。だから計都を捕らえることができた。

「……諦めてないんですね」

「諦めません」

「それでは、また安闔日のたびにいらっしゃる……？」

「帰りに捕らえることができなければ」

泰麒はそれを言おうか迷い、結局口にしてしまった。

「――じゃあ、蓬山にお寄りになることはできるでしょうか」

驍宗はちょっと泰麒を見つめた。

「それは叶いません。蓬山への昇山は一度しか許されない」

言って窘めるように笑う。

「第一、蓬山に寄っていたのでは、安闔日のうちに往復することができない」

考えるまでもなく当然の返答だった。疾風のような計都の足をもってしても、黄海の深部まで往復するのは簡単なことではないだろう。午に門が開くやいなや駆け込んで、夜中狩りをし、駆け戻って閉門にぎりぎりというところに違いない。

「……でも、驍宗殿は王師の将軍なのですから、またお会いできますね」

泰麒は驍宗を見上げ、辛うじて笑んだが、驍宗は苦笑を返してきた。

「残念ながら」

「――え？」

「王師には戻らぬつもりです。仙籍を返上し、戴を出る所存」

泰麒は無意識のうちに両手を握った。

「……なぜ……ですか？」

「私は恥をかくことに慣れていない」

泰麒は目を見開き、そして俯く。

「別段、公を責めているわけではない。王の器でなかったのだから致し方ない」

「でも」

「ご案じになりますな。私のような者でも、あれば役に立つと言ってくれる奇特な国もござ

いましょう。しょせんは武人ゆえ、いまさら商いには向こうはずもなし」
泰麒は驍宗を見上げる。
「……では、もうお会いすることもないのですね」
「おそらくは」
驍宗は笑みを刷いたままだった。
――彼は少しも泰麒と別れることなど気に留めていないのだと、思った。泰麒が未だに寝込んでいれば、挨拶もなく下山してしまうつもりだったのだ。
「いくら狩りをするにしても、中日にはまだずいぶん……日があるのに」
辛うじて言うと、驍宗は苦笑する。
「無様なことはいたしませぬ。私は選ばれなかったのだから、ぐずぐずと蓬山に留まって、未練な奴よと笑いものになりたくはない」
言ってから、大きな手で軽く泰麒の頭を叩いた。
「そのような顔をなさる。――公が気になさることはない。なに、私のような思い上がった者にはよい薬だ。これで少しは謙虚になろう」
驍宗が笑ったので、笑い返そうとしたが、できなかった。
驍宗殿、と声を掛けてくる男があった。驍宗はそれに手を挙げて応え、泰麒に向かって一礼をする。

「李斎殿に挨拶して参ります」
「はい……」
李斎の天幕を訪ねた驍宗は、すぐに戻ってきた。泰麒はその間、石を呑んだようにその場を一歩も動けないでいた。
「ご自愛なされよ。御代つつがなけれと祈念申しあげる」
驍宗は訃都の傍らに立って言う。
――別れの言葉だ。泰麒が頷けば、驍宗はこのまま手綱を取り、騎乗してこの場を去っていく。そうして二度と会うこともない。
それは想像するだけで、耐えがたいほど苦しい。しかし引き止める方法が、泰麒にはない。
「では」
驍宗は一礼して踵を返した。泰麒はその背中を見据える。
振り返ってくれないだろうか。
念じたが、驍宗が決してそれをしないだろうと、何となく分かっていた。
李斎ならば、慕ってくる子供を無下にもできず、きっと一日延ばしに、結果として安闔日のぎりぎりまで蓬山に留まってくれるだろう。
だが、驍宗は決してそんなことをしない。

驍宗は計都に騎乗した。周囲の者も泰麒に礼を取って離れていく。
周囲の乗騎に合わせて、計都はゆっくりとした足取りで去っていった。
驍宗は見送る者を一顧だにしなかった。

3

月が出ていた。
薄い帳を透かして、牀榻の中にも月の光は入ってくる。
驍宗ら一行は、すでに蓬山の麓まで降りたろう。
野営は危険ではないのだろうか。それとも、夜中騶虞を追って、夜明けになってから野営をするのだろうか。
「……眠れませんか」
汕子に問われて、泰麒は無意識のうちに汕子の毛並みを撫でていた手を止めた。
「李斎殿は、もう少しおられます」
「……うん」
それは少しも泰麒を慰めはしなかった。
寝床の中で転々として、やがて我慢がならずに起き上がった。

「……散歩に行っちゃ、駄目かな」
「夜は駄目です。夜の黄海は」
見すかされて、泰麒は俯く。
「じゃあ、旅も危険だろうね」
「おそらく」
また饕餮のような妖魔が出たら。たくさんの人が黄海の道中で命を落とすのだと聞いた。
ましてや驍宗たちは人数が少ない。
「傲濫」
何か、という声は牀榻の下から響いた。
傲濫の声は太く低い。最初でこそ小さな犬の姿でいた傲濫だが、近頃では特に泰麒が望まないかぎり大きな赤い犬の姿をとることが多かった。
「驍宗殿を令巽門まで送ってくれない？　ご無事に着けるよう」
「できません」
返答はあっさりと返ってきた。
「泰麒のおそばを離れるわけにはいかない」
「ぼくの頼みでも……？」
「いまは何より泰麒のご無事が優先する。驍宗が王だというのならいざしらず」

……まただ、と泰麒は唇を噛んだ。

驍宗を引き止める方法も、決して振り返らぬ彼を振り返らせる方法も、無事に四門まで旅させる方法も、何もかもたった一つしかない。

驍宗が王になればいいのだ。——王であればよかったのに。

どうして天啓がなかったのだろう。あればよかったのに。

（……それは）

泣きたい気分になった瞬間、するりとそれは心の中に忍びこんできた。

（……それは、麒麟にしか……分からない）

泰麒は目を見開き、慌てて固く目を閉じた。

鼓動が跳ね上がった。

（どうしてだろう）

そんなことを考えてしまうほど、驍宗と離れることを苦しんでいる自分に驚く。

李斎が好きだった。彼女が王ならいいのにと思った。なのに、李斎だって下山するのだという事実はさほどに泰麒を苦しめない。

悄然として起き上がった。何かにひどく追い詰められていて、じっと横になっていることが苦痛でならなかった。

「……泰麒」

「表に出るだけ」

夜着のまま、ぼんやりと宮の石段に腰を下ろした。

蓬山の麓まで、道は一つしかないが、黄海に出れば道は無数だと言っていい。ましてや乗騎を狩りながら旅するのだから驍宗たちはあえて道を離れるだろう。一行が黄海に入ってしまえば、もう見つけることさえ困難かもしれない。

彼は危険な黄海を渡り、四門に辿りつく。安闔日を待って金剛山の外に出る。

そうすればもう追っていく方法もない。

戴国に帰った彼は王師を辞職して戴を離れる。どこに行くのか、消息を訪ねる方法が泰麒にあるだろうか。

……たとえあったところで。

泰麒は驍宗を選ばなかった。驍宗は戴国を離れる。そうなれば驍宗にとって泰麒は無価値な十の子供でしかない。己の運命を切り開くに怖じることのない彼は、無価値なものを決して振り返らないだろう。

それは死別に近い。

一歩蓬山を離れるごとに驍宗は泰麒を忘れる。驍宗と自分とを繋いだものは日一日と細くなって、四門が開き、閉じた瞬間に断ち切れてしまう。

泰麒は立ち上がった。

4

「泰麒」
悄然と俯いていた泰麒が突然立ち上がったのを見て、汕子は慌てて腕を伸ばした。駆け出した身体を抱き止めた。
「いけません、夜は――」
昼や早朝の比ではないのだ。時間は深夜を廻って生気に転じたばかり、これから妖魔はもっとも活発になる。
「駄目です、泰麒……！」
泰麒は汕子の手をかいくぐる。
どうあっても耐えられない。驍宗と決別することだけは、耐えることができない。
「――どうしたの、汕子」
露茜宮から容可が顔を出した。数人の女仙がその背後から不審そうな表情を覗かせている。
女仙と汕子と傲濫と。どんなに駆けても、必ず捕まる。分かっていてなお、泰麒は駆けずにおれなかった。

汕子は跳んで、逃げた子供の先へ降り立った。どうあっても、夜の黄海へ出すわけにはいかない。

李斎の傷と、傲濫の身に染みついた血気のせいで長く寝込み、ようやく外出できるようになったばかりなのだ。体力が落ちれば気力も削げる。いま妖魔に出会っても、折伏することは不可能に近い。

そして同時に、主の力が弱まれば使令の力もまた弱まる。汕子も傲濫も、すでにそれほど泰麒と縁が近い。汕子自身にも分かっていた。小物の妖魔ならいざしらず、傲濫のごとき妖魔に出会えば、この麒麟を逃がしてやることさえできない。

必死の思いで、駆ける身体を抱き止め、捕まえようとした。

「泰麒」

――躱された。

汕子は空を抱いた己の両手を見る。確実に捕らえたと思ったのに。

僅かに狼狽し、すぐさま振りかえってさらに腕を伸ばす。泰麒の手を捕らえようとした手はまたも宙を摑んだ。子供はただ、がむしゃらに逃げようとしているとしか思えないのに、やはり捕らえることができなかった。

――同じだ、と汕子は瞠目する。

傲濫を捕らえた、あのときと同じだ。何かの罠にはまりこんだように、どうしても泰麒を

捕まえることができない。

——なぜ。

ようやく己の力に目覚め始めたばかりの、小さな無力な麒麟でしかないのに。

「傲濫！」

汕子の声に、岩陰から躍り出た獣が泰麒の行く手を遮ったが、細い小道いっぱいに立ち塞がった獣を、どんな魔術でか泰麒は躱した。

もう一度跳躍して汕子は子供の正面に立ち塞がった。大きく広げて抱き止めようとした腕を躱され、辛うじて腕を摑みかけ、そうしてそれすらも躱されて、やっとのことで夜着を摑んだ。

「泰麒、お願いです、夜は——」

汕子は言葉を途切らせた。駆けつけてきた女仙もまた口を開けて足を止める。

汕子が摑んだ夜着はふわりと抵抗を失って、手の中に残された。

「あ……」

思わず声を上げ、同じように声を上げ顔を上げている女仙の視線を追う。

月の夜、奇岩は黒く、影の色もまた黒い。稜線だけが僅かに銀の、その奇岩の合間。——燐光を放って夜を駆け上っていく獣が見えた。

「泰麒……」

まだ短い鬣は鋼の色。
黒に銀と雲母を散らした背、漆黒の脚、漆黒の首。
額に短く真珠の一角。
——追わなければ。
汕子は手の中に残された夜着を握りしめる。
だがしかし、全力で疾走する麒麟に追いつけるものが、この世にいようはずもない。

5

泰麒はただ、走ることしか考えていなかった。
傲濫をよけて汕子の手をかいくぐり、ただ走ろうとしたときにふいに身体が軽くなった。
それに励まされて数歩を駆け、やっと自分が浮遊しているのに気がついた。
転変した己に気づくまでに三歩、振り返って見た露寒宮は後方遥かに遠い。
違和感も苦痛もなかった。先へ、と願うと四肢は応えて疾走した。
甫渡宮まではさらに三歩、昇山の者たちが点した松明の火は、潤むように尾を引いて遠ざかった。

最初にそれに気づいたのは騶虞だった。

驍宗は乗騎を見やった。月のあるうちに狩りをしようと、鞍の準備をしていた手を止める。

「どうした？」

騶虞は天の一郭を見上げて、低く喉を鳴らしている。

最初は妖魔の夜襲かと思った。だが、それにしては騶虞の様子に緊張が見えない。

眉を顰めて騶虞の視線を追い、そうして驍宗はそれを見つけた。月を背に駆けてくる優美窮まりない獣。

――黒麒。

感嘆と同時に未練が首をもたげた。未練を残す己を許せないから、こんなに早くに下山した。

起き出してきた者が一様に空を見上げて声を上げる。麒麟は螢火のように光の尾を引いて野営地を見下ろす岩の上に降り立った。

そこは灌木と岩とに囲まれた窪地だった。五つ点された松明の内側に、天幕と乗騎と、呆けたように空を見上げる人々の姿があった。

「これは……みごとな麒麟だ」

最初に声を上げたのは驍宗だった。微笑って言って、鞍を地に置く。

「どうなされた、公。わざわざお見送りくださるのか？」

泰麒はためらい、それから岩を下りて窪地に立った。自分が罪に踏みこもうとしている自覚があった。

「無事転変なされたな。お慶び申しあげる。しかし、二つとない稀な姿を見せていただけたのは嬉しく存ずるが、とても公とは思えぬな」

返答など、できない。

「いくら使令がおられるとはいえ、いささか無用心にすぎよう。早く宮に戻られよ」

泰麒が動かないのを見てとって、驍宗は荷物の中から袍を引き出す。

「――それとも、何かご用がおありか？」

袍を広げてくれたので、泰麒は獣形を解いた。どうすれば人に戻れるのかもう漠然と分かっていたし、実際、人に戻ることにはなんの造作もなかった。すとん、とやや身体が重くなった気がしただけだ。

袍にくるまれながら驍宗を見上げた。見返してくる目はどこか烈しかったが、怖くはなかった。

――怖いのは自分だ。一体、何をしようとしている。

「……驍宗殿」

（……天啓がないのに）

だが、ほかに方法がない。

泰麒は膝をついた。驍宗が目を見開いた。

「――公」

頭を下げる。深く。――深く。さながら許しを乞うように。

「……御前を離れず……詔命に背かず……忠誠を誓うと」

これは裏切りだ。摂理に対する、女仙に対する、王に対する、ありとあらゆるすべてのものに対する。

「誓約します……」

(こんなことは、してはいけないのに……!)

驍宗は少しの間、無言だった。

あの視線が痛いほどに注がれているのを泰麒は感じた。

いまならば、まだ引き返すことができる――そう思ったときに、深く静かな声が頭上から降ってきた。

「――許す」

もはや引き返す術もなく、泰麒はさらに深く頭を下げた。そのまま倒れ伏してしまいたいほど、苦しかった。

何という裏切り。これまで慈愛を注いでくれたすべての人に対する、国と王と、民と、驍

宗自身を欺く途方もない偽り。

その足の甲に額付いた。罪に刺し貫かれて、目の前が真っ暗になる。

――引き返したい。

こんなものは嘘だと、そう叫んでしまいそうだ。

ほとんど喉元までせりあがった叫びを遮ったのは、浮遊感だった。

驍宗の手が泰麒を抱き上げる。驚いて見返した先に、誇らしげな驍宗の笑みがあった。

「礼を言う、――泰麒！」

返す言葉もないうちに、周囲からどよめきが起こった。驍宗は泰麒を抱き上げたまま周囲を見渡す。これ以上ないほど誇らしげに見渡してから、泰麒に向かって破顔した。

「お前は小さいのに見る目がある」

まっすぐな視線を受け止めかねて見やったほうに、駆けつけた汕子の姿が見えた。

十一章

1

――王だったのか。

汕子は驍宗の足元に額付いた泰麒を見て、そう納得した。

彼女は泰麒が驍宗に対し、なにかしら怯えのようなものを抱いていることを了解していた。

確かに驍宗に懐いてはいたが、もともと人懐っこい気性の子供なので、それ自体は特別のこととは思えない。懐くといえば、李斎には驍宗以上に懐いているように見えたものを、それでもなお泰麒が驍宗に拘わるわけが理解できなかった。

泰麒の気配――それはいまでも金の光として汕子の目には映る――を追って、黄海までを駆けながら、汕子は釈然としない気分を味わっていた。

なぜ、逃げる泰麒を捕まえられなかったのか。

なぜ、突然あの麒麟が転変したのか。

漠然と到達した解答は「意志」だった。断固として自分の行動を妨げさせまいとする強い意志。何を措いても駆けてゆくのだという意志の力。

――それが泰麒を捕まえようとする汕子の手を無意識のうちにためらわせ、今日まで不可能であった転変を可能にしなかったか。

問題は、なぜ驍宗が係っているときにかぎって、泰麒が彼には似合わぬ強い意志の力を見せるのか、ということだった。

いっそ脆弱に見えるほど、覇気の薄い麒麟である。それが何に由来するものかは知らないが、泰麒にはひどく自分を軽んずる性癖がある。それはときに度を超して、謙虚というよりも卑屈に思えるほどだった。

その麒麟が、なぜよりにもよって驍宗が係ったときにだけ、あれほど強い意志を見せるのか。汕子にとって泰麒の安全以上に重大なことなどありはしないのに、その汕子の手を留めるほどの、饕餮を使令に下してみせるほどの、初めての転変を可能にするほどの意志の力を発するのだろう。

それが、泰麒が実のところ隠し持っている力のせいなのか、もっと別の理由によるものなのか、汕子にはどうしても見極めがつかなかった。

隠伏していれば泰麒の影にしがみついてどこまでも一緒についていけたものを、なまじ泰麒を止めようとして姿を顕したために離れてしまった。それに歯噛みしながら傲濫とともに岩山を駆け、蓬山の麓でやっと主に追いついた。

そしてその姿を見て、理解した、と思った。

――泰麒は必死だったのだ。

本人がそれを意識していたかはともかく、本人の能力を大きく超えた力を引き摺り出してしまうほど、泰麒は必死だったのだ。――驍宗が王であったゆえに。

汕子が窪地に向かって岩場を下りると、泰麒は彼女を振り返った。どこか怯えたような、途方に暮れたような表情に見えた。

それに微笑んで、汕子は己の姿を溶かして泰麒の影の中に紛れこんだ。

驍宗が王だったのなら、なぜ泰麒が驍宗に対しあれほど怯えたのか、なぜいまに至るまで驍宗が王であることが分からなかったのか、釈然としないことは残るが、泰麒に追いついてしまえばもうどうでもいいことに思われた。

結局のところ、汕子には泰麒以上に重大なことなどありはしないのだ。

驍宗一行が蓬山に戻ると、甫渡宮の前に血相を変えた女仙たちが集まっていた。

「泰麒……！　ご心配申しあげました」

計都から驍宗によって抱き降ろされた泰麒を見て、真っ先に蓉可が駆け寄ってくる。
「一体どういうことでございます。……驍宗殿も」
驍宗はそれにはただ笑んだだけだった。代わりに驍宗の随従が高らかに答えた。
「公は主君を追ってこられたのだ！」
甫渡宮の周囲に集まった人々からざわめきが起こり、それがやがて歓声になった。
蓉可は、太い笑みを浮かべて自分を見返す驍宗と、その驍宗に引き寄せられてどこか怯えた顔をしている泰麒を見比べた。
「主君……。では」
蓉可は膝をついた。
「天啓でございますか」
泰麒は返答ができなかった。代わりに肯定の声が周囲の随従から上がり、さらにどこからともなく強い声がした。
「契約をお済ませです」
汕子の声だった。
蓉可は驚いたように口を開いた。見張った目を禎衛に向け、禎衛はもものしい表情でそれに頷く。膝をつき、両手をついてその場に平伏した。周囲の女仙が禎衛に倣った。
「お慶び申しあげます、驍宗様」

泰麒の肩に手を置いた人物は、笑みを浮かべたまま頷く。
禎衛は平伏したまま言った。声は微かに震えていた。
「万歳をお祈り申しあげます。……泰王ならびに泰台輔」
——泰麒の罪は確定した。

2

すみやかに驍宗主従の住居は蓬廬宮の中に移された。
驍宗が逗留したのは、外にもっとも近い丹桂宮だった。
蓬廬宮の中ではもっとも大きなこの宮で、天勅を戴くために吉日を待つのが古来からのしきたりである。
以後、驍宗に対する女仙の待遇は一変した。彼はすでに女仙の主である泰麒の主君である。おさおさ疎かにするわけにはいかなかった。
多くの女仙が驍宗一行に仕えるために丹桂宮に遣わされた。起床から就寝に至るまで、驍宗主従の面倒は一切合財女仙たちが見る。
それは劇的といっていい変化だった。
つい先頃まで驍宗に敬意を求めていた相手が、いまは驍宗に礼を尽くす。

すでに驍宗は女仙の誰に対しても頭を下げる必要はなかったし、蓬山公に対してもそれは同様だった。一歩蓬廬宮の外に出れば、昨日までの同輩が叩頭して礼拝する。

——驍宗は極みへ登ったのだ。

「おめでとう存じます」

李斎がようやく祝賀に訪れたのは、吉日まであと僅かの頃合いである。

「もう起きてよいのか」

「主上にはご心配をいただきまして、もったいのうございます」

李斎は平伏したまま頭を下げて、さらに泰麒に向かう。

「台輔にもお慶び申しあげます」

「……ありがとうございます」

李斎はその精彩を欠いた声に首を傾げた。

「失礼ながら、台輔はどうかなされたのですか」

問うと、子供は心許無げな笑みを薄く浮かべる。

「いえ……あの、台輔と呼ばれるのが妙な感じなんです」

李斎は笑った。

「すぐにお慣れになりますよ」

「はい……」
不安げな泰麒に微笑んで、李斎は驍宗を仰ぎ見る。
「実は、お祝いと同時にお暇を述べに参りました」
驍宗は少し眉根を寄せた。
「もう下山して大丈夫なのか？」
「はい、おかげさまで。いくぶん、心許無いところもございますので、明日下山の衆と一緒に下ります」
驍宗は頷いた。
「それがよかろう。くれぐれも無事で。――戴でまた会おう」
「はい。ありがとう存じます」

短い会見のあと、丹桂宮を辞去しようとする李斎を見やって、泰麒は驍宗を仰いだ。
「李斎殿をお送りしてきてもいいですか？」
驍宗は笑う。
「行ってこい」
言ってから、ふと驍宗は手を上げる。
「――ああ、李斎」

「はい？」
「禁軍から将軍が一人欠けるが、どう思うか？」
暁宗の問いに、李斎はこともなげに笑った。
「欠けたままというわけにはまいりませんでしょう。諸将の功績を比べ、徳を比べて情けを用いずに抜擢なさるのがよろしいかと存じます」
「なるほどな」
暁宗は薄く笑う。ゆけ、と李斎を目線で促した。
李斎は一礼して宮を出ていく。泰麒がそのあとを追っていった。

3

「李斎殿は禁軍の将軍になりたくないんですか？」
泰麒は李斎と二人、奇岩の間の小径を歩く。
「なりたくないわけではありませんが、私以上に相応い人がいるのなら、その方にやっていただきたいと思います」
「……李斎殿はご立派ですね」
呟くように言って、どうしたわけかうなだれた泰麒の顔を李斎は覗きこんだ。

「本当にいかがなされたのですか？　お元気がない」
「何でもありません」
そうは到底見えなかった。
「何かお悩みでも？」
重ねて問うと、泰麒は李斎を見上げる。
「李斎殿は、驍宗さまが王になられると嬉しいですか……？」
李斎は瞬きをし、そうして、理解した、と思った。
「嬉しゅうございますとも。驍宗殿ならご立派な王におなりでしょう。……前にそう申しませんでしたか？」
「おっしゃいました」
「もしも驍宗殿ではなく、私が選ばれていたら釈然としなかったろうと思います。自国の王が、拘りなく尊敬申しあげることができる方なのは嬉しいものです。よくぞ選んでくださったと、公にはお礼申しあげたい」
泰麒は微笑おうとしたが、できなかった。
「公がお気になさることはないのです。王は天が選ぶものなのですから」
李斎の慰めは、傷を刳ることしかできなかった。

「――台輔は、あまりめでたくない様子だな」
李斎を見送って戻った泰麒に、驍宗はそう言う。
「そんなことはありません」
「李斎も怪訝そうにしていた。……台輔を見ていると自分が麒麟をかどわかしたような気がする」
「まさか……」
そばに控えていた蓉可が笑った。
「台輔は蓬山をお離れになるのがお寂しいのでございます。蓬莱を離れて僅か、しかもまだお小さくていらっしゃる。そのうえようやく慣れたものを、またお移りになるのですから」
なるほど、と驍宗は言ったが、蓉可の言葉は泰麒の胸を貫いた。
蓬山を離れることも、女仙と別れることも考えなかった自分を思い出した。
驍宗は泰麒を手招きする。
「――蓬莱生まれなら名があるな。なんという?」
首を傾げながらそばに寄ると、驍宗は笑った。
「台輔と皆から呼ばれるのは、大役を念押しされているようで息が詰まろう。――名は?」
「……高里、要です」
掌の上に文字を書かせて、驍宗は笑う。

「名はよいな。文字どおり戴国の要となるのだから」
泰麒は目を伏せた。
「姓は面白い。高里という山が蓬山にあるのを知っているか？」
「いえ」
「死者の魂魄が還るという。草冠をつければ、死者の住む山の名だな。いっそ不吉で縁起がよかろう」
「死者の……」
呟いた泰麒に、驍宗は頷く。
「死気はやがて生気に転じる。死者もやがて生者に還ろう。——蒿里、お前が戴にとってもそのように、再生を約束するものであるように」
泰麒はうなだれた。
罪は犯した者を無限に苛む。しかし、もはや引き返す術を見つけられなかった。

4

きたる吉日。
沐浴し、礼服に改めた泰麒を、漆黒の衣装に身を包んだ蓉可が迎えにやってきた。

慶事には黒を用い、凶事には白を用いる。蓬萊とは逆なのだと、泰麒はすでに知っていたが、それでも女仙たちの黒衣はひどく暗示的に思われた。

――なんて、不吉な。

蓉可は床に平伏して正式な礼を取る。

「泰台輔、刻限でございます」

「はい……」

まるでこれから弔いでも始まるようだ、と泰麒は思う。

蓉可は心配そうな顔を上げる。

「どうなさいました？　昨夜はお休みになれませんでしたか？」

泰麒は返答をしなかった。

眠ることができるはずがない。

これから泰麒は驍宗と共に蓬山の頂上へ昇る。そこで天勅が下され、驍宗は天にも認められた王になる。

……偽りは必ず発覚するだろう。

そこでどんな儀式が行われるのかは知らないが、天がこの罪を見逃すとは思えない。

驍宗は王ではないと弾劾され、泰麒は王でない者と契約を結んだ罪を問われる。

どんな罰が下されるかは想像もつかないが、これは泰麒の罪で、驍宗には何の責任もな

い。それを訴えて、咎めが驍宗に及ばぬようにしなければならない。
その決意で頭がいっぱいで、眠ることもそのほかのことを考える余裕もなかった。
蓉可はしばらく泰麒をまじまじと見つめてから、膝をついたままそっと両手を伸ばした。
泰麒は黙って蓉可の間近に歩み寄る。
蓉可は泰麒の髪を撫でつけた。
「……まだ短いようでございましたね」
「そう……？」
「ええ。女仙の目がなくなるからといって、駄目ですよ、お切りになっては。せっかく綺麗なお姿なのだから、鬢が短いのは惜しいもの……」
転変した姿のことを言っているのだと悟って、泰麒は頷く。
「ちゃんと見られた？」
転変した夜は女仙たちに見せてやることなど、考えにも浮かばなかった。——女仙たちも泰麒自身も、あれほどそれを願っていたのに。
「はい。嬉しゅうございました」
丹念に丹念に、蓉可は髪を撫でる。
「驍宗様は王に足るお方。本当に嬉しいこと続きでございます」
「……嬉しい？」

蓉可は目をしばたたく。
「はい。少し……寂しゅうもございますが」
いちばん身近にいた、優しい女仙。どれほどの愛情を注いでもらったろう。
「……蓉可」
膝をついた蓉可に抱きついた。
――別れ、なのだ。
「泰麒、どうぞつつがなく」
ごめんなさい、と、これで何度目かに呟く。
蓬山に来てから、女仙には詫びることばかりだった。転変できずに、使令を下せずに、そしてまたひどい裏切りをして。
全部を白紙に返してしまえたら、どんなにいいだろう。驍宗を黙って見送っていれば。
そうすればこれほどの罪の意識も、蓬山との別れもなかった。つい先頃までそうしていたように、蓉可の歌うような声に起こされて、女仙たちと笑いながら食事をして、汕子と迷路で遊んで――これからも、そんなふうに過ごすことができたのに。
蓉可はひとしきり背中を撫でてくれてから、身体を離した。
「――さあ、参りましょう」

5

連れて行かれたのは蓬廬宮の北、断崖の麓にある雲梯宮だった。

宮の奥には朱塗りの扉がある。暇に飽かせて各宮を巡って歩いた泰麒が、かつてそれを開いてみた時には緑の岩壁が見えるばかりだった。そこに今、忽然と上へ昇る階段が現れている。

水晶でも作ったか、透明な階の下から光が当たって、あたりは明るい。その一種幽然とした階段の上に一羽の烏に似た白い鳥が待っていた。

女仙たちは床に平伏する。扉の前に進んだ驍宗と泰麒に、玉葉が深く一礼をした。

「王にも台輔にも、末長くご健勝であらせられますよう」

驍宗も泰麒も一礼を返す。

鳥に促されて驍宗が一段を踏み出した。途端に驍宗の背中が硬直する。

一瞬、泰麒の血の気が引いたのは、必ず罰せられるだろうという確信があるからだ。

息をつめて見守ったが、何事もなかったかのように驍宗がさらに一段を上ったので後に続いた。

一歩を踏み出して、泰麒は驍宗が硬直したわけを悟る。

——何か、電流のようなもの。

足元から頭頂までを一気に貫いたそれは、泰麒の脳裏に一つの思念を刻みつけた。

——いわく、元初に九州四夷あり。

百姓条理を知らず、天子条理を知れどもこれを嗤いて敬うことなし。天地の理を蔑ろにし、仁道を疎かにして綱紀を軽んずること甚だし。風煙毎に起こりて戦禍万里を燼灰にす。人馬失われて血溝を刻み大河をなす。

天帝、これを愁えて道を解き条理を正さんとせんも、人淫声に耽溺して享楽を恣にす。帝悲嘆して決を下す。我、いまや九州四夷を平らげ、盤古の旧にかえし、条理をもって天地を創世し綱紀をもってこれを開かん、と。

引かれるように次の一歩を昇った。

——帝、十三国を拓き、中の一国をもって黄海・蓬山となし、王母をしてこれを安護せしむ。

残る十二国に王を配し、各々に枝を渡して国の基業となさしむ。

一虫あり。解けて天を持ち上げこれを支う。

三果あり。一果落ちて玉座をなし、一果落ちて国土をなし、一果落ちて民をなす。

枝は変じて玉筆をなせり。これをもって開闢とす。

書きこまれた情報を吟味する暇はなかった。

――太綱の一にいわく。天下は仁道をもってこれを治むべし。

民を虐げてはならぬ、戦乱を嗜んではならぬ、税を重くし、令を重くしてはならぬ。民を贅にしてはならぬ、民を売り買いしてはならぬ、公地を貶えてはならぬ、それを許してはならぬ。道を修め、徳を重ねよ。万民の安康をもって国家の幸福とせよ。

長い階段を一段上るごとに、情報が書きこまれていった。

天子の責務。宰相の責務。天地の成り立ち、国家の成り立ち、制度の成り立ち。仁道とは何か、礼とは何か。してはならぬこと、すべきこと。定めるべきこと、定めるべからざること。

憑かれたように階段を昇って、我に返ると泰麒は陽射しの中に出ていた。はたと振り返った背後で朱塗りの扉が閉まる。階の一番上に佇んだまま見送る鳥の目が陽射しに光った。

扉の閉じる微かな音とともに、泰麒の耳に音が蘇った。

耳が最初に拾ったのは波の音、慌てて周囲を見廻した目が最初に拾ったのは見渡すかぎりの滄海だった。

「……雲海」

そういうのだと、すでに泰麒は知っていた。

天には雲海があり、これが天上と天下を分ける。

泰麒が立っているのは小さな島の上、背後には小さな祠があって、その朱塗りの門はいま

やぴったりと閉ざされている。

正面には石段、石段の上には壮麗な廟、島の周囲には遠くいくつかの島が見え、波濤に洗われるその間を蓮に似た花が埋めている。

これから何をすればいいのか、分かっていた。

廟に入り、西王母と天帝の像に進香を行い、驍宗が道を守って徳を施すと誓いの言葉を述べる。そうすれば玄武が現れて、戴国の都、鴻基にある白圭宮まで雲海を泳ぎ渡してくれるのだ。

泰麒は呆然とした。血の気が引くのが自分で分かった。

——終わってしまった。

何らかの選定がここでも行われ、きっと泰麒の嘘は暴かれ断罪があるだろうと思っていたのに。それがどんな形にせよ、必ず罪を償う機会があるだろうと、そう信じていたのに。

そんなものは——なかった。

あの階を昇って、天帝の業と意思を知ること、それが天勅を受けることのすべてだったのだ。

一気に増す罪の重さ。過ちが正される機会はなかった。そうして、泰麒は王の意義を知ってしまった。

あまりに重い、その責務。王は国を統治するだけでなく、王の存在そのものが国を守る要

になる。王は一国の陰陽を調え、八卦を律する。王という要素が国の運命をよい方向へ変える働きをするのだ。

泰麒は、黙したまま感無量の表情で雲海を見渡す主の横顔を見上げた。

王はその存在そのものが国家を鎮護し、百姓を安寧する。

ひどい目眩がした。

――では、この偽りの王が統治する戴国の命運は。

6

後悔と絶望に胸を塞がれながら、泰麒は驍宗が誓いの言葉を述べるのを見守った。

――ちょうど、その頃。

天下の北東に位置する戴国、その首都鴻基山の頂上にある白圭宮の、奥まった一郭にある二声宮で声が上がった。

二声宮は、主とその身の回りを世話する小官が十人ほどの小さな宮である。その二声宮で、突然高らかな声が上がって、小官たちは俄かに色めき立った。

高らかな声を発したのは、宮の主、主は一羽の白雉である。

「白雉――鳴号！」

小官の一人が喜色を満面に浮かべ、大声を上げながら宮を飛び出して行った。

「一声鳴号！」

声の行く先々で喧騒が生まれる。それが王宮全体を揺るがす歓声となるまでにいくらの時間もかからなかった。

白雉は一生に二度しか鳴かない。その鳴き声も二通りしかなかった。よって白雉を二声と呼ぶ。

最初に上げる声が「一声」、二度目に上げる声が「二声」である。二声を鳴いた白雉は一刻を待たずに死ぬ。それで二声を「末声」とも言った。

そうして、一声は「即位」、二声は「崩御」。——白雉はその生涯にただ二度だけ人語をもって鳴くのである。

白圭宮の白雉は十年前に生まれ、今日まで鳴いたことがなかった。

——すなわち、一声である。

「白雉鳴号！　一声鳴号！」

声は居宮である内殿から、政庁である外殿までを駆け抜けて、あたりは歓喜の声に騒然とする。

「——泰王、即位！」

同時にその頃。東方の慶国、首都蓬天。その王宮、金波宮にも声が通る。
「梧桐宮、開扉！」
官の声に景麒は顔を上げた。
背けた顔を深く伏せ、景麒が読み上げる六官の奏上を聞くともなく聞いていた景王もまた、何事かと顔を上げた。
女官が慌てて窓を開ける。
時を惜かず、一羽の鳥が窓から飛びこんできて、部屋に設けられた金の留まり木に羽を休めた。
「白雉鳴号」
梧桐宮の主、鳳だった。
梧桐宮には鳳と凰の対が住む。牝の凰は他国の凰と意思を通じることができ、対するに牡の鳳は他国の大事を鳴いた。
鳳は高らかに声を上げる。
「戴国に一声――泰王即位」
景麒は鳳をまじまじと見つめ、それから微かに笑みを漏らす。
景王舒覚は自国の麒麟の珍しい笑みに一瞬呆けた。

そしてまた、その少し後。
蓉可は蓬廬宮の小径から空を見上げた。
抜けるように青い空、蓬山の頂上から北東の方角へ向けて一条の瑞雲が伸びていくのを見つけた。それは玄武が雲海に残した、いわば航跡だったが、蓉可はそれを知らない。
ぼんやりと雲を見送る蓉可の横で、数人の女仙が同じようにしてぽかんと空を見上げていた。
「泰麒……」
愛しい子供はあっけなく去った。
祭りは口惜しいほど短く、蓬山に寂しい季節が巡ってきた。
——次の麒麟が実るまで、また幾年もかかることだろう。

十二章

1

戴は北東の一国、その首都は鴻基、天を突く鴻基山の頂上に玄武は着いた。ほぼ一昼夜の後である。

玄武は小島ほどもある巨大な亀、蓬山頂上の廟を出た驍宗と泰麒をすでに雲海で待ち構え、岩のような首を岸に渡して甲羅へと主従を招いた。甲羅は岩の手触りのする無数の突起で蓬山のよう。どこから現れたものか、首にも甲羅にも湿り気一つない。その中央には小さな宮が一つ、まったくの無人だったが、一泊に必要な用意は完全に調っていた。

その亀——というより船——で旅する間に、戴国の王宮・白圭宮でも王を迎える準備が調えられていた。

亀の舳に立った泰麒が最初に見つけたのは険しい形の島、近づくにつれ馬蹄形をなす島の

大きな入り江に面して無数の建物があるのが見えた。
壁はおろか柱、手摺りにいたるまでが白、屋根は蓬廬宮のそれより濃くて紺。それが波一つなく凪いだ入り江の水面に映った風景は、絵空事のように美しかった。
「あれが白圭宮だ。見事だろう」
ぼうっと見惚れていた泰麒は、驍宗の声に頷いた。
「あのあたりが政庁のある外殿、あのあたりが内殿だな」
驍宗は手を上げて示す。
「蒿里が住むことになる仁重殿は、あのあたりにある」
驍宗は水際にある建物の一群を示した。
「ぼくもここに住むんですか？　家来なのに？」
「むろん、そうだ。蒿里は臣とはいえ、ただの臣とはわけが違う。国が船なら王は帆、麒麟は錨だ。どちらも決して欠けてはならぬもの」
「はい……」
玄武がいよいよ入り江に入ると、王宮のあちこちに無数の幡が立ち、正面の大きな建物の前に多くの人々が整列し平伏しているのが見えた。玄武が再び岸に首を渡した。
平伏した人々の間を抜け、正面の宮殿に昇り、大勢の人間の祝賀を受ける間に、泰麒は完全に狼狽してしまった。

人に平伏されることにも、人に仕えられることにも慣れたつもりでいた。華美で贅沢な生活にも慣れたつもりでいたのに、王宮に用意されていたものは、蓬廬宮のそれとはまったく規模が違っていた。

汕子を呼んでせめて手を握っていたかったが、それはしてはならないと蓉可に申し渡されていた。王を選んで生国に下った以上、大人になったとみなされる。汕子はすでに乳母ではなく使令で、使令をたやすく人前に呼び出してはならないのだ。

だから、一日がかりの儀礼が終わって自室に退り、牀榻の帳を下ろしたときには心底ほっとした。

「……汕子」

隣の部屋にはいつでも泰麒の用を足せるように、八人もの侍従が控えている。それでごく小さな声で呼んだ。

「どうなさいました」

いつもは即座に姿を現す汕子が、声しか現さなかった。

「汕子」

「もう大人におなりなのですから、添い伏しはできません」

「……駄目なの？」

泰麒は広い——露茜宮のそれよりも広い——布団の上に身を起こした。

「姿は見えずとも、いつでもおそばにおります」
「……でも」
「おやすみなさいませ」
言われるままに、もういちど横になったが、少しも眠れそうな気がしなかった。
ふと、笑う気配を感じて、上掛けの下に入れた手の先に指の感触がした。汕子の手に違いなかった。
汕子の手の感触が、しっかり泰麒の手を包む。
「……おやすみなさいませ」
「……うん」
ようやく安堵して目を閉じたが、眠りは浅いであろうこと、夢は悪夢に違いないことを、泰麒自身分かっていた。

2

麒麟は生国において、宰輔として王の政務を助ける。年齢がいくつであれ、麒麟である以上その責務から逃れるわけにはいかない。
泰麒も宰輔としての生活を始めなければならなかった。

定時に起きて、礼典に則って衣服を調え、定刻に外殿に出仕し、朝議に参加する。以後は午まで王のそばに控えて、政務を補佐する。とりあえず座って見守っていることしかできなくても、それは麒麟が必ず果たさなければならない責務だった。

午を過ぎ、午後の執務を終えると王は居宮へ退る。宰輔もまた自室に退ってもよかったが、泰麒は驍宗が寝るまでそばを離れなかった。

驍宗がとりあえず行わなければならないのは、己のための即位の儀式を準備することだった。

その傍らで、新しい体制を作らなくてはならない。先王が残したもののうち、拾うべきを拾って捨てるべきを捨てる。臣の任免と法の整備が中でももっとも重大な課題だった。

「大師の訴えはどうなさるんですか？」

驍宗は自室の長椅子に横になって書類を眺めている。泰麒はそばの床に座っていた。

「とりあわぬ」

先帝は奢侈の果てに道を失った。それを承知していた驍宗が、玉座について最初に行ったことは最小限の人数を残し、侍従・女官の悉くに暇を出すことだった。当面使うあてのない宮は閉鎖されることになった。

大師は音楽士の長、その大師から免職される楽士の数が多すぎると訴えがあった。

「私は武人あがりゆえ、楽など分からぬと言ってやる」

「……でも、免職になるとやっぱりみんな困るでしょうから……」
「先王の残した楽士がどれだけいるか知っているか？」
泰麒は首を振る。
「いいえ」
「私も知らぬ。だが、尋常の数でないのは確かだ。なにしろ内殿に来ると、各殿ごとに違う楽の音がしていて、しかもそれが一日中断えることがないというありさまだったのだからな。王が内殿にいようといまいとお構いなしで、朝議の席にまで聞こえていた」
「へえ……」
「王宮で楽士をやっていたといえば、職には困るまい。賓客があったとき、無礼にならぬ程度がおればよいのだ」
「大師は、即位の儀で使う楽士も少なすぎるのでは、と言っていましたが」
「あれでいい。なにしろ戴は貧しいのだから」
「春官長も即位の儀があれでは、少し質素すぎないかと言っておられましたけれど」
春官長は六官の一、礼典・祭祀を司る。
「みすぼらしいと笑いたい者には笑わせておく。気取ったところで仕方があるまい。先帝の奢侈で、国庫は完全に傾いている。倉にあるのは借金の証文ばかりなのだから」
「はい……」

泰麒は幼く、政治の仕組みはもちろんのこと、大人の社会の仕組みもよく分からない。戴国の事情に明るいわけでもない。

反対に驍宗は、内殿にも出入りができる重臣だったのだから、そもそも泰麒の助言などまったく必要ではないのだ。それは自分でも分かっている。

「春官長も人選を考えたほうがよかろうな」

書面を眺めて呟いた驍宗を泰麒は見る。

「先王は派手な式典がお好きであったゆえ、あれも華美を好む」

「……でも、そんなにお急ぎにならなくても……」

驍宗は泰麒を見て笑った。

「そのとおりだな。春官長はしばらく様子を見よう」

泰麒は俯く。驍宗の笑みで、彼が泰麒に合わせてくれたのだと分かった。

「……済みません。余計なことばかり言って……」

「余計なことはない。泰麒がいちいち訊いてくれると頭が冷える」

それが配慮で言ってくれている言葉だと、泰麒にも重々分かっている。

「……申し訳ありません……」

首を垂れた泰麒を見やって、驍宗は身を起こした。

「――蒿里。何を憂えているのか、言う気はないか？」

驍宗に問われて、泰麒は慌てて首を振る。
「いえ、何も」
驍宗は眺めていた紙を置いて、ひょいと泰麒を抱き上げた。
「それとも蓬山がそんなに恋しいか」
「そういうことでは……」
「女仙が恋しければそう言うてもよいのだぞ？　お前は気兼ねをしすぎる」
「そういうことでは、ありません」
「では、気鬱の理由は何だ？　そんなことはない、などと言うてくれるなよ。お前はまだ小さいのだから、無理をすることはないのだからな」
泰麒には返答ができなかった。
「即位の儀が終われば、真っ先に慶国へ遣わしてしんぜよう。少し景台輔に甘えてくるがいい」
「……そういうわけには、いきません」
「私はそんなに無能に見えるか？　私に任せておくのはそんなに不安か？」
泰麒は首を振ったが、それは必ずしも真実ではなかった。
見守っていなければ、と思うのだ。
一刻も目を離してはならない。驍宗の為人を信じないわけではないが、万が一にも道を踏

み外させてはならない。

——驍宗には天啓がないのだから。

驍宗は抱き上げた子供の頑な表情に内心眉を顰めた。

一体何が泰麒を悩ませているのだろう。単に女仙が恋しいだけとも思えない。大役に身が竦んでいるのか。それとも。

蓬山で出会った頃から考えれば、日一日と気鬱が進むように思うのは気のせいだろうか。

驍宗は子供を床に下ろした。

「とにかく、休め。なにも夜中まで私に付き合うことはない」

「大丈夫です」

「大丈夫ではなかろうが。自分がどんな顔色をしているか、分かっているか？」

「いいえ……」

言いさした子供の頭に手を置いた。

「命ずる。今宵は宮に退るように。しばらく午を過ぎて宮を出ることはまかりならぬ」

「主上——」

「何事もお前に無断で決めたりはせぬと約束する。だからしばらく休むように。——返答は」

泰麒は目を伏せた。

「……はい」

3

宰輔の責務は王の補助の他にもう一つある。首都のおかれた瑞州の州侯としての執務がそれだった。

泰麒の起居する仁重殿には瑞州の政庁があって、午後からの短い時間がその政務に割り当てられている。

とはいえ、麒麟は王の一部、実のところ瑞州を統治するのは王であるといって間違いはない。

いまのところ、泰麒には天勅によって知った最低限の知識の他は、右も左も分からないといってよかった。それで政務といっても実際は、官が奏上することがらを黙って聞き、分からないことを質問するという、ほとんど勉強時間と変わらない状態になっている。

驍宗はその間仁重殿を訪れて、ときおり口を挟みながら泰麒を見守っている。それを終えると自分の執務に戻るために内殿へ帰っていくが、断固として泰麒が後をついていくことを許さなかった。

それで仕方なく、午後の大半は自宮に退ってぼんやりしている。

側近は当初常に八人もいたが、大幅に減らされて二人になっている。女官ばかりを残してくれたのは、女仙に囲まれることに慣れた泰麒に対する、驍宗の配慮だろう。夕餉にも必ず呼んでくれる。それもまた配慮なのだと分かっていた。

それほど気遣われて、かえって泰麒には休むことができない。

驍宗が心を配ってくれればくれるほど、追い詰められた気分になるのを止められなかった。

溜息ばかりが漏れる午後、内殿に戻った驍宗から突然の呼び出しがあった。

泰麒は慌てて内殿に駆けつける。——即位の儀が行われる吉日まで、あと僅かの頃である。

「台輔、賓客がお見えだ」

他国の賓客をもてなすためにある掌客の間だった。開け放った扉の向こうに、驍宗は立っている。

珍しく台輔と呼んで、振り返った驍宗はどこか悪戯めいた笑みを刷いていた。

「……お客さま、ですか？」

来客のあろうはずがないのだが。

思ってふと、泰麒は首を傾げた。周囲に何かを感じたからだ。

何かを見たような気がした。それで改めて周囲を見廻してみると、ごく淡く金の光の泡のようなものがたゆたっているように見えた。それは何かが振れて動いたように、薄い帯をなしているようにも見える。

まさか、と鼓動が鳴るのを感じた。

小走りに入室し、そこにいる人影を見て泰麒は目を見開く。

「……景台輔」

彼はごく薄く笑った。そうして、丁寧に会釈をする。

「このたびは、無事の下国、心からお慶び申しあげます」

駆け寄ろうとして足が止まった。景麒の顔をまっすぐに見ることができなかった。

「……ありがとう……ございます」

深く面伏せた子供を、景麒は怪訝な思いで見る。この変わりようはどうだろう。

わざわざ驍宗が使いをよこした理由が分かった気がした。

即位までは、憚って訪問を控えるのが礼儀、そうでなくとも王や麒麟は他国の主従とあまり深くは交わらない。事実、景麒にしても、付き合いと呼べるほどの交際があるのは、王を探す過程で世話になった隣国の延王延麒ぐらいなものである。

驍宗は先王の重臣、それを知らぬはずもないが、あえて慣習を破って景麒を名指しに使いをよこしたのはこのせいだったのだと納得した。

「お約束どおり、一番に参じました。御身、お変わりないか？」
「はい」
俯いた表情が堅い。見上げてくるまっすぐな目も、こぼれるような笑みも見えない。
「そうはお見受けできませんが。……いかがなさいました」
「べつに――」
眉を顰めて二人を見守っていた驍宗は声を挟んだ。
「お二人で積もる話もござろう。私はこれで失礼申し上げる」
景麒が会釈をし、泰麒も已むを得ずそれに倣った。
驍宗はこれから煩雑な仕事に戻るのだろうが、ついていくと言っても通らないのを――いつもに増して今日は来客があるのだから――分かっている。
軽く頭を下げたまま驍宗が退出するのを見送ってから、景麒は泰麒を振り返った。
「お庭をご案内くださるか？」
「どうぞ……。ご案内できるほど、ぼくも詳しくないのですけど」
「お庭を散策なさるほどの余裕もおありでなかったか？」
泰麒は庭に向かう扉を開いた手を止めた。
返答する言葉がなかった。

4

「さすがに戴国は風が冷たい」
内殿の庭にある、広大な池のほとりに立った景麒はひとりごちた。
「すこし、座りますか？」
言って、背後で身を竦めるようにして立っている泰麒を振り返る。
すぐ近くに、呆れるほど華麗な四阿が建っていた。
それは先の泰王が建てたもので、床も柱も水晶でできている。池の周囲にはこの他に、煙水晶、黄水晶、紅水晶、紫水晶で同様の意匠の四阿が設けられる予定だったが、四亭はまだ建設途中で、先王の崩御とともに工事も中断され、そのまま放置されていた。
「戴国は玉の産地だが……これでは内乱が絶えなかったはずだ」
景麒は巨大な水晶を積み上げた柱を撫でる。
戴国は気候が悪い。作物の実りには見放されていたが、代わりに玉泉が無数にあって本来ならば豊かなはずの国だった。玉泉とはその名のとおり宝玉を産出する泉で、ここに種になる玉を沈めておけば種は育って巨大な結晶になる。金泉・銀泉も同様に多い。
「この大きさなら、三十年かそこらはかかろう」

国中の倉という倉が空になったと言われるはずだ。

そんな王の治世がそれでも百年以上続いたのは、ひとえに彼が遊びと政治を混同しなかったためによる。彼は共に遊興に耽る相手を侍従・女官に召しあげたが、決して冠位を与えて政治に参加させることをしなかった。

「お掛けにならないのか？」

景麒は黙って立っている子供に目をやる。

「……結構です」

「泰台輔には、何をお悩みか？」

「……何も」

呟くように答えた表情がどこまでも硬い。それで信じられるはずがなかった。

「使令を下されたと泰王にお聞きしました」

「はい」

「転変なさったとも」

「……はい」

「残念です」

泰麒は訝しんで景麒を見返した。景麒は皮肉めいたとも自嘲めいたともつかぬ笑みを浮かべる。

「私はお約束どおり泰麒をお訪ねした。もっと喜んでいただけると思っていた」

泰麒はうなだれる。

「本当に残念です」

静かな声が泰麒の臓腑を刳った。

会いたいと思っていた人に会って、少しも喜べない自分のみじめさを思う。

誰に対しても——それこそ女官に対してさえ——申し訳なく、済まなく、まっすぐに相手を見ることができない。最後に安らかに眠ったのはいつだったろう。良心の呵責なしに人に会ったのはいつだったろう。

——これは罰だ。罪が明らかにされるまで、未来永劫続くのだ。

泣く権利などないと分かっていたが、涙がこぼれた。

「泰麒……」

差し出された景麒の手を取って膝をついた。頭を撫でてくれたので、そのまま景麒の膝に頭を載せた。

「どうなされた？」

景麒の声は抑揚に乏しいぶん、沁みるほど静かだった。

「……台輔は……麒麟に生まれたことを後悔なさることはありませんか？」

「ありません」

「……王を選んだことを後悔なさることは？」
「ありません」
泰麒は顔を上げる。
「でも、景台輔はあまり王とうまくいっておられないと、お聞きしました」
「誰がそんなことを」
「女仙たちが、そう――」
景麒は息をつく。
景王は完全に政務を放棄している。要石を失って、国政は大きく乱れる兆しを見せていた。諸侯は王を軽んじ、官吏は専横する。
「私は御前を離れず、誓命に背かぬという誓約をしました。たとえ王がどこへ向かわれようと、ついてくるなと命じられぬかぎり、お供をする所存です」
――ただ、それにどれだけの苦しみを伴うか、それだけの問題だと思っている。
泰麒は深い色の瞳でじっと景麒を見返し、やがて目を伏せた。
「……そんなふうに言い切れたらどんなにいいでしょう」
「泰麒は後悔しておいでか？」
淡々と問われて、泰麒は少し迷った。
「……はい」

景麒は首を傾げただけで、何も言わず、どんな表情も見せなかった。
それでもう、泰麒には口を閉ざしていることができなかった。
「ぼくは、とりかえしのつかないことをしました」
景麒は無言で続く言葉を待つ。
「これほどの裏切りはありません」
小さな麒麟は目を上げた。必死の色が浮かんでいた。
「……王には……天啓がなかったのです」
愕然とした。
それは景麒の想像を遥かに超えた告白だった。
「天啓が……ない？」
泰麒は頷く。
「何の啓示もありませんでした。王気も見えませんでした。ぼくは一度、ご無事で、と申しあげました――」
「……なぜ」
「ぼくはただ……驍宗さまがお帰りになるのが嫌だったんです」
伏せた目を上げて、子供は景麒を見上げる。
「どう……すればいいんでしょう」

景麒の膝を摑んだ手が震えていた。
「どうすれば、この過ちを正すことができますか？　どう償えばいいんでしょうか」
「……泰麒」
「全部が嘘なんです。どうなりますか？　戴は滅びますか？　王は罰されるのでしょうか？　もしもこれを知ったら、天は、民はどうするのでしょう」
点々と涙をこぼす。
景麒は口を開きかけ、結局閉ざした。膝を摑んだ小さな手を軽く叩き、そうして立ち上がる。
四阿の床に座って見上げてくる泰麒に一礼をした。
「私は何も申しあげますまい。……今日のところは、お暇申しあげます」

四阿の隅で膝を抱えて、泰麒は金色の髪が遠ざかっていくのを見ていた。
景麒はさぞかし軽蔑しただろう。二度と会ってはもらえないかもしれない。
噂になるだろうか。泰麒の欺瞞はばれるだろうか。
——驍宗は泰麒の裏切りをどう受けとめるだろうか。

十三章

1

その景麒がもういちど泰麒を訪ねてきたのは、それから二日後のことだった。

景麒は、少なくとも驍宗に何も言わなかったらしかった。夕餉のときにも何の変化もない驍宗の顔を見、泰麒は安心する反面、落胆した。

相変わらず鬱々として午後を過ごしているときに内殿から使いがあって、礼服に着替えて掌客の間に来るように言われた。慌てて内殿に急ぐと、驍宗と景麒、その他に二人の人影が待っていたのだ。

正面に座ったのは驍宗と同年輩に見える男だった。おそらくこの男が主賓なのだろう。脇には泰麒より少し年上らしい少年が立っている。

少年は景麒のような金髪で、まるでその金髪が光の残像を残したようにごく淡く金の光が

周囲に見えた。——見えたように感じられた。景麒の周囲にもそれがある。これが麒麟の気配というものなのだろう。それでその少年が、どこかの麒麟なのだろうと想像がついた。

——麒麟の気配は見えるようになったのに。

入り口で一礼し、泰麒は驍宗に目をやる。驍宗の周りに、王気と呼べそうなものは何一つ見出せなかった。

入室し、そのまま下座に控えた泰麒に、景麒は前に進むよう示して述べる。

「延王と延台輔をお連れしました」

泰麒は目を見開く。

（延王……）

それで驍宗が、一段下がったところに座っているわけが理解できた。

泰麒は膝をついて軽く頭を下げる。

王に対しては最敬礼するのが礼典によって定められた決りだった。膝をつき手をつき、額を地につけて叩頭するのがそれだが、麒麟だけは軽く会釈するだけでよい。

「あの……はじめまして」

礼儀は覚えていたが、こういう場合の常套句までは覚えていなかった。それで、ただそのように述べる。

そんな泰麒に、驍宗が小声で言った。

「蒿里。叩頭礼を」
「……え？」
泰麒は慌てて、驍宗を見返す。
「延王は宗王に次いで治世の長いお方。すでにほかの王と同列に存じあげてよいお方ではない」
「……でも」
狼狽して二人の麒麟を見比べたが、景麒もそして延のそばに控えた延麒も、驍宗の言葉を否定しなかった。
「……はい。済みません」
泰麒は慌てて両手をつき、改めて頭を下げる。
深く頭を下げて額付こうとし、そして途中で動きを止めた。
「――どうした」
問うたのは正面の延王だった。
「いえ」
答えて、もういちど頭を下げようとし、やはり途中で動きを止めた。
――できなかった。
「どうした？　戴国の麒麟は、雁に何か含むところでもあるのか」

「いいえ」
救いを求めて見た驍宗は険しい顔をしている。
「泰麒。何をしている」
厳しく言われて、再度頭を下げようとした。
やはり途中で身体が止まる。精一杯下げた額から床までは肘までの距離。その僅かの距離に何か硬いものでもあるように、どうあっても動くことができない。それ以上頭を下げることも、腕を曲げることもできなかった。
「ほう――。本当に何やら含むところでもありそうだな」
延の声は冷え冷えとしている。慌てて延を見上げた。
「いいえ……！」
突き放すような声を放ったのは、延の脇に控えた延麒だった。
「それとも礼儀をご存じではないか。本来ならば、延王御自らまかりこすいわれもないところ、景台輔のたっての願いでわざわざお運びいただいたものを、礼の一つもないとはどういうわけか」
延は皮肉な笑みを浮かべる。
「新参の麒麟にこれほど軽んじられたは初めてのことだな。泰麒はよほど雁が嫌いとみえる。――あるいは、泰王に命じられたか？　雁に阿ることは許さんと？」

「そんな……！」

泰麒は周囲の険しい顔を見比べる。どこからも救いの手はもたらされなかった。

「ならば理由を聞こう。理由も言えず、礼も取れずでは、戴は雁に敵意ありと判ずるが、よいか」

「――泰麒」

驍宗の叱責する声を聞いた。

慌てて叩頭しようとしたが、首が下がらない。なんとか床までの距離を詰めようとしても、どうしたわけか身体はまったくいうことをきかなかった。

焦りではなく、苦痛の汗が浮かんで床に落ちた。吐き気が、それもひどい吐き気がした。延が立ち上がり、歩み寄ってくるのが視野の端に見えた。

「……どうした。礼を取るふりもできぬか？」

声が頭上から降ってくるや否や、髪を摑まれた。そのまま恐ろしいほどの力で押さえられる。

「そのまま頭を下げるだけのことだろうが」

なぜその力に抵抗できたのか、泰麒自身にも分からない。どうあっても逆らうことのできるはずもない力を加えられて、それでも全身全霊がそれに抵抗する。

「……強情な」

言ってさらに強い力がかかったときだった。
ふいに荷重が消失した。
「そこまでするこた、ないだろうが！」
ぱし、と歯切れのよい音がして、髪を摑んでいた手の感触が消える。目を上げると、延麒が延の手を払い除けたところだった。
「こんなちびにそこまでするか！　――おい、大丈夫か？」
泰麒は肩で息をしながら、自分を覗きこんでくる延麒をきょとんと見上げた。
「ああ、真っ青だ。……立てるか？　横になるか？」
頓着なく袖で汗を拭ってくれる。ようやく起こした身体を景麒が支えてくれた。
「大事ないか？　とにかく椅子へ……」
延はといえば、半ば呆れたような、半ば興味深そうな顔つきで泰麒たちを見ていた。
「……うるわしき同族愛だな」
「阿呆。お前がやりすぎたんだろーが！　この莫迦、すっかり悪玉にひたりやがって」
泰麒はぽかんと三者を見比べた。
「無茶な方だとは思っていたが、ここまで無茶をなさるとは思わなかった」
「お前たちが言い出したんだが……」
「惨い真似をしてくだされと、お願いしたわけではない！」

「ものには程度ってもんがあんだよ！」
景麒、延麒双方から怒鳴られて、延は首を竦める。
「……あの？」
問いかける泰麒に延は笑う。
「分かったろう？」
何が、と問うまでもなかった。
「――麒麟は偽りの誓約など、できはせぬ」
目許を和ませた延の頭を、延麒がぞんざいに叩いた。
「王の分際で見てきたように言うんじゃねぇ」

2

風を、と露台に連れ出され、椅子に座らされた泰麒の前に、景麒は膝をついて目線の高さを同じくする。
「私の言いようが足りないばかりに、申し訳ないことをした」
彼は軽く泰麒の手を取った。
「天啓とはどんなものかと、問われたときに、もっときちんとお答えするべきでした。いた

ずらにお苦しめしてしまった。お許しください」
「台輔、……ぼくは」
「天啓は形あるものではありません」
景麒は仄かに微笑う。
「これが天啓だと、言葉にすることができるようなものは、なにひとつ起こらないのです、泰麒」
泰麒は景麒の顔を覗きこんだ。
「なにひとつ……？」
景麒もまた泰麒の目を覗きこむようにして、頷く。
「はい。――王には王気がある。しかし、王気もまた目に見えるものではありません」
「光ではないんですか？」
景麒から前に、麒麟の気配は金の光の形で見える、と言われて以来、泰麒はずっと王気もそんなふうなのだと思っていた。
「それは光のように感じられるかもしれないし、ひょっとしたら闇のように感じられるかもしれない。あるいは、覇気のように感じられるかもしれないし、反対に安穏とした空気のように感じられるかもしれない」
「定まっていないのですか」

「これが王気だと、はっきり呼べるような形はありません」
「でも、景台輔は王気をたよりに王を探した、と」
「探しました。王の居場所がそんなに遠くなければ、漠然とそれを感じとることができます。何かが、こちらの方角にあると、そんな気がするのです」
「何かが……その方角に……」
泰麒は過去を振り返った。まだ昇山の者が甫渡宮に集まる前、そんな気分を幾度となく感じたことがなかったか。それは何やら泰麒を追い詰めるような——しいて言うなら、怖いような威圧されるような、そんな感じではあったけれども。
「王にお会いすれば、この人がその気配の源だったのか、と分かる。それは漠然と感じたものと、同じ種類の気配だからです」
「……それが、王気ですか？」
「はい。王気は、際立った気配です。ほかの者とは明らかに違う、という感じ。目に見えるものでも、言葉にできるものでもないのです」
軽く拳を握った泰麒の手を、景麒は宥めるように叩く。
「天啓も同じです。どんな変事も変化もない。しいていえば、それは——直感です。この方だ、という直感なのですよ、泰麒」
「直感……」

景麒は頷いた。

「正直に申しあげましょう。私は景王にお会いしたとき、この方だ、と思った。同時に、あの方が決して王に向いてはおられないこと、名君として君臨されるためには、何かが足りないこと、それを手に入れるためには多くの犠牲を払い、堅固な努力が必要であることが分かりました」

「そう……なのですか？」

「この方は駄目だ――そう思ったが、逆らえなかった。天啓は抵抗できない強い直感です。おそらくは、たとえその人物を憎んでいても、麒麟はそれに抵抗できない。だからこそ天が下されるのだと言うのです」

肩に手を置かれた。見上げると驍宗が微笑っている。

驍宗は知っていたのだ。泰麒の告白を聞かされていた――。

「麒麟が選んだ、まさにそのことが天啓なのですよ、泰麒」

3

「ぼくは……」

泰麒はようやく、少しずつ力が抜けていくのを感じた。

「暁宗さまを最初に見たとき、怖いと思ったんです……」
「はい」
「暁宗さまが昇山なさる前から、ずっと令坤門のほうから怖いものが来るような、そんな気がしてました……」
それが恐怖でなく、もっと違った——たとえば、光や希望や、そんな明るいものだったら、泰麒は迷わずに済んだかもしれない。
「怖がるようなことをする方ではないって、分かってからもずっと怖かった。立派な方で、優しい方だと分かっていたけど、それでもやっぱり怖かったんです」
「そうでしたか」
「ときどきすごく怖いのに、お会いすると嬉しかったし、お会いできないと寂しかった。蓬山から帰ってしまわれると聞いたとき、とてもとても辛かった」
景麒は頷く。
「それで、よろしかったのです。王のそばにいることが嬉しくない麒麟はいないし、王と別れることが辛くない麒麟もいない。王と麒麟は離れてはならないものなのですから」
「はい……」
「麒麟は天意の器にすぎません。かえして言えば、麒麟に意思などありはしない。ただ天の意思が、通り抜けていくだけ」

泰麒は頷く。景麒は泰麒の頭を撫でる。その手が温かかった。温かいと思えることが本当に嬉しかった。

「泰麒はいま、驍宗様が怖かったとおっしゃられた。私にはその理由が分かるような気がします」

「……どんな？」

「竦んでおられたのでしょう。それは恐怖ではなく畏怖です」

「かもしれません」

「泰麒は己の運命に出会って、竦んでおられたのですよ」

そうだったのだろうか、と泰麒は驍宗を見上げた。その目を見て、そうだったのかもしれない、と思った。

「泰麒は嘘などついておられない。もとより麒麟は自王以外に額付くことなどできない生き物なのですから。あなたはまさしく王を選ばれたのです」

「……はい」

景麒は小さな麒麟の、深い色の目を覗きこんだ。

「できるだけ説明申しあげていたらと、かえすがえすも悔やまれる。せめてもう少し蓬山に滞在していたら。そうすれば泰麒をお悩ませせずに済んだのに。……本当に申し訳ありませんでした」

「いいえ。ぼくが早とちりしないで、ちゃんとお訊きしてればよかったんです」
泰麒らしい言いように笑みが浮かんだ。
「――心から、お慶び申しあげる」
「ありがとうございます」
やっと笑顔が見えた。
景麒は子供に寄り添う驍宗にも視線を移す。彼の麒麟の告白を伝えられて、狼狽もせず落胆も見せず、ましてや責める言葉など口の端にも上らせず、苛烈な目で景麒を見据えてただ一言、それでも自分は王だろうか、と問うた彼。
「――泰王にもお慶びを」
「ありがたく存ずる」
太い笑みを浮かべた驍宗に、延もまた慶賀を述べた。
「雁からもお慶びを申しあげる」
「ありがとう存じます」
「――いつぞや打ちあったな」
「覚えておいでしたか」
「忘れるはずがなかろう。一本取られたのは久々だった。――ただものではなかろうと思ったが、まさか玉座に就こうとは予想もせなんだな」

驍宗は笑う。
「またお相手を願えましょうか」
「同業の誼だ。いつなりと」
「泰王」
声を掛けたのは、露台の手摺りに腰を下ろして見物をきめこんでいた延麒だった。
「――ところで、あの趣味の悪いものはなんだ？」
延麒は露台の向こうに見える四阿を示す。
延は顔を蹙めた。
「礼儀を知らぬやつで申し訳ない」
いや、と笑って驍宗は少年を見る。
「あれは先帝が残した屑です。取り壊して官庫に穀物を買う足しにしようと思っておりますが、雁には余剰の穀物がおありだろうか」
「泰王は運がいい」
延麒は笑った。
「うちはこのところ豊作続きで、値下がりして困っていたんだ」
微笑ってそれを見守っていた泰麒の手を、景麒が揺らした。
「お庭をご案内いただけようか。先日は拝見できないままだった」

「はい。――本当に詳しくないのですけど」
手摺りの上に座った少年が飛び下りる。
「そんじゃ、探検だ」
泰麒は驍宗を見上げた。
「行ってきてもいいですか？」
「行ってこい。日暮れには戻るように。ささやかながら宴をもうけるゆえ」
「はい」
景麒が手を伸ばしてくれたので、泰麒は迷わずその手を握った。
「班渠と雀胡をお呼びしましょうか？」
「いいんですか？」
見上げると、景麒は笑う。
「麒麟ばかりですから、構わないでしょう。泰麒の使令もお見せください」
「――はい！」

エピローグ

「王が玉座にお進みになったら、叩頭礼を。そういうしきたりですので」
春官長に念を押されて、泰麒は頷く。
「はい」
即位の儀がやってきた。
鴻基山の麓、首都・鴻基。そこにある国府の正殿がその舞台である。
すでに正殿前の巨大な広場には、立錐の余地なく民が溢れている。即位の儀とは、他国の賓客、および国民に新王を披露するための儀式なのである。
控えの間にいても、外の歓声が聞こえてくる。誰もが新王即位を喜んでいるのだと思うと、なにやら嬉しい。
昨日、泰麒は初めて白圭宮を下りて鴻基の街を見た。驍宗と別れて陸路蓬山から帰国した随従たちに会い、同行して帰ってきた訐都に会った。即位の儀に訪れた承州侯に随従して、鴻基を訪れていた李斎と飛燕にも再会できた。

その李斎と驍宗と、瑞州を一廻りしたのだ。

鴻基山の非常識に高いことに驚き、街を密かに見物し、玉泉という不思議な泉も見物した。何から何まで珍しいものだらけで、泰麒は目を丸くしどおしだった。

「昨夜はちゃんと眠れたか？」

衣服を女官に調えられながら、驍宗は問う。

「はい。くたびれていたので、寝床に入るなり寝てしまいました」

「それはよかった」

「おかげで、覚えていた口上をすっかり忘れてしまいましたけど……」

泰麒が告白すると、驍宗は声を上げて笑う。

「どうせ、私にしか聞こえぬ」

「驍宗さまに聞こえるかどうかもあやしいですね」

泰麒は表の声に耳を傾けた。驍宗もまたそれに倣ってから、笑みを浮かべた。

「まったくだ」

何となく落ち着いて座っていられず、控えの間をうろうろと歩きながら、春官長に教えられた手順を口の中で唱えていると、いきなり声を掛けられた。

「よう、ちび」

泰麒は慌てて背後を振り返った。
「延台輔」
延麒は、慌てふためいて一礼する女官に軽く手を振って追い払う。
「近所の誼で見物にきたぞ」
驍宗が苦笑して礼を返した。
「わざわざのお越し、いたみいる」
「ありがとうございます、延台輔。――延王は？」
「貴賓席ですっかりできあがってる。――あがってないか？」
「……少し」
泰麒が正直に告白すると、延麒はやれやれというように笑った。
「お前、本当に気が小さいな。ナリも小さいけど」
驍宗がさらに苦笑した。
「蒿里はまだ十ですから」
延麒は顔を蹙める。
「前にも思ったが、趣味のいい名前だな」
泰麒は少し赤くなる。
「……本当に蒿里というんです。草冠はありませんけど」

「へえ」
「そういえば、延台輔も蓬莱のお生まれなんですよね。お名前はなんとおっしゃるんですか？」
「六太。姓はねえよ。そんな結構なご身分の生まれじゃねえし」
泰麒は首を傾げた。昔は誰にでも姓があったわけではないそうだが、それでは雁の麒麟はそんなに昔の生まれなのだろうか。
「いつのお生まれですか？」
延麒はちょっと天井を見る。
「お前が生まれる五百年ばかり前」
「ええ？」

首都に旛旗が翻る。簡素を旨とした即位式は、先帝の奢侈に倦んだ民の目にいっそ好ましく思われた。
玉座のそばには小さな子供が控えている。珍しい髪の色だが、その場にいるのだから麒麟に間違いないのだろう。
わけ知り顔の老爺が、あれが黒麒麟なのだと解説する。黒麒麟がどんな性質なのかは知らないが、滅多にいないのだと聞けばそれだけでなにやら誇らしいのが身びいきというもので

ある。

泰麒は壇上から歓声を上げる民を見下ろす。恐ろしいようでもあるが、それでも罪悪感なしに視線に応えられるのが嬉しかった。

太宰の先払いがあって、次いで驍宗が登壇した。広場を揺るがす歓声が沸く。

悠々と玉座についた驍宗の前に進み、泰麒は膝を折る。

苦もなく頭を下げて額を驍宗の足に当てた。

延王にはできなかったことが、これほどたやすい。何の呵責もなく己の責務を果たすことは、なにやら幸福めいた気分をもたらした。

立錐の余地なく詰めかけた民は、歓喜の声を盛んにする。

――泰王即位。

戴極国に新しい王朝が始まったのだ。

和元二十二年、春、宰輔失道、よって卒す。上、一月禁中に崩じ、諱して驕王という。泰王たること百二十有四年、托飛山桑陵に葬る。

同じく一月、蓬山に泰卵実る。余日を経ずして五山に蝕あり。泰果、枝を離れて失せる。百神、千仙をしてこれを求索せしむ。

三十二年、一月、蓬山に黒麒還り、天下に黄旗飄旋す。夏、乍驍宗、令坤門より黄海に入り、蓬山に昇りて泰麒と盟約、神籍に入りて泰王を号す。

驍宗、本姓は朴、名は綜、呀嶺の人なり。禁軍に将を承りて、瑞州乍県に封ぜらる。天命を授けて玉座に前み、元を弘始と改め、乍王朝を開けり。

『戴史乍書』

本書は一九九三年三月、講談社X文庫ホワイトハートより上下巻として刊行、加筆訂正の上、一冊にまとめ講談社文庫からあらためて刊行するものです。

|著者|小野不由美　大分県生まれ。大谷大学在学中に京都大学推理小説研究会に在籍。講談社X文庫ティーンズハートでデビュー。『東京異聞』が第5回日本ファンタジーノベル大賞の最終候補作に。著書に本書を含む『十二国記』シリーズ、『悪夢の棲む家』『過ぎる十七の春』『緑の我が家』（以上、講談社X文庫）、『魔性の子』『東京異聞』『屍鬼』（以上、新潮社）などのほか『黒祠の島』（祥伝社）がある。

風の海 迷宮の岸 十二国記

小野不由美

© Fuyumi Ono 2000

2000年4月15日第1刷発行
2002年8月26日第5刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-5817
業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-264833-4

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

9784062648332

ISBN4-06-264833-4

C0193 ¥629E (0)

1920193006292

天啓にしたがい王を選び仕える神獣・麒麟。蓬莱国で人間として育った幼い麒麟・泰麒には王を選ぶ自信も本性を顕わす転変の術もなく、葛藤の日々を過ごしていた。やがて十二国の中央、蓬山をのぼる人々の中から戴国の王を選ばなくてはならない日が近づいてきたが——。壮大なる構想で描くファンタジー巨編!!

風の海　迷宮の岸
十二国記
小野不由美
定価：本体629円(税別)

お
81
3